



ANALYSER OG FORSTÅELSER AF NORDISK LITTERATUR

—Læsefrugter i Tanabe Seminar, 2012—

目次

はしがき -----	田辺 欧	1
------------	------	---

第1部・その1：スウェーデン編 (第1期レポート)

Edith Södergran の詩-----	菊地 灯	5
Gunnar Ekelöf の詩-----	関原 瞳	9
Birger Sjöberg の詩-----	徳原 佳子	13
Pär Lagerkvist の詩-----	中谷内なつみ	16
Viktor Rydberg の詩-----	丹羽 美咲	21
Thomas Tranströmer の詩-----	弘瀬 祐也	29
Edith Södergran の詩-----	弓場 麻妃	32
Harry Martinson の詩-----	渡邊 友里	35

第1部・その2：デンマーク編 (第1期レポート)

Orla Brudgård Povlsen の詩-----	板倉 紵理	41
Tove Ditlevsen の詩-----	板倉 亮平	45
Sensommervise の詩-----	井上 みゆき	51
Pia Tafdrup の詩-----	鹿倉 麻未	55
Jens Peter Jacobsen の詩-----	川原 知巳	60
Per Højholt の詩-----	権田 奈津美	64
Benny Andersen の詩-----	櫻木 紗子	67
Jens Fink-Jensen の詩-----	高尾 久美子	71
Halfdan Rasmussen の詩-----	高畠 知里	75
Tove Ditlevsen の詩-----	中川 真麻	79
Uffe Harder の詩-----	中川 麻琴	83
Ole Sarvig の詩-----	西村 侑子	86
Naja Marie Aidt の詩-----	橋本 詩織	90
Piet Hein の詩-----	藤岡 愛実	95

第2部・その1：スウェーデン編（第2期レポート）

Astrid Lindgren : *I Skymningslandet*

『夕暮れの国で』 ----- (訳者：菊地・徳原・丹羽・弘瀬・渡邊) 101

スウェーデン国教会讃美歌集の変遷-----菊地 灯 106

第2部・その2：デンマーク編（第2期レポート）

Henrik Pontoppidan : *Ørneflugt*

『ワシの飛翔』 ----- (訳者：板倉絵理・権田・高畠) 123

編集あとがき ----- 久保田勝己・奥村佳子 126

はしがき—ゼミ論集 14 号—

田辺 欧

ここ数年文学ゼミがデンマーク語専攻とスウェーデン語専攻の両方にまたがり、ゼミの運営方法の模索が続いている。デンマーク語とスウェーデン語が兄弟言語の関係にあるとはいえるが、3年生から双方の原語テクストを用いての合同授業にはどうしても無理が生じる。それゆえ、第1期は3年生と4年生にわけて授業を行っている。3年生は文学理論をはじめとして、どのように文学テクストを読み解いていくかを学びつつ、解釈は難しくても分量的に読み込むことが可能な短い詩を受講生が選んで発表する形式を取って来た。4年生は卒論執筆者13人の発表を順番に。その発表のまとめを9月の下旬、2日間に亘り、3・4年生合同で行った。これは大変な成果があった。みんな本当に頑張りました！

第2期は去年と同じく、デンマーク、スウェーデンそれぞれの言語にわけて授業を行った。スウェーデン文学ゼミでは、最初は3、4年生合同で一つのテクスト、Astrid Lindgrenの絵本を翻訳した。去年もスウェーデン語文学ゼミは翻訳に落ち着いたが、来年度は何か短編を1つでも読んで、皆で解釈をめぐって論議することができればよいと考えている。途中からは4年生には卒論執筆に集中してもらうため、3年生だけの授業となつたが、第1期に参加していた3年生のうち、3人が夏よりスウェーデンに留学してしまったため菊地さん一人の授業となつた。彼女は主ゼミが歴史なので、そこで関心を持って取り組んでいるテーマ「スウェーデン語讃美歌の歴史的変遷」に関連させ、スウェーデンの3つの時代における讃美歌を翻訳した。古い讃美歌を訳するのは難しかつたが、菊地さんの努力は素晴らしい非常に面白い授業になつた。デンマーク文学ゼミは、最初は3・4年生合同でNaja Marie Aidtの短編を読んで合同でテクスト分析をした。その後3年生だけの授業では、Henrik Pontoppidanの短編を読む作業、そして最後2時間は来年度の卒論にむけての準備にとりかかってもらうことになった。こちらは複数であったので、互いの意見を交換できたことが何よりだった。

今年度、私にとっての最大課題は卒論指導だった。私がゼミを担当して以来、最多の人数となつた。卒論指導13名、修論指導も1名、さらにはここ3年間引き摺ってきた自分自身の研究を本として刊行する作業も加わり、まさに受難の年だった。そんななか、ゼミの授業（卒論の校正に至るまで）惜しみないサポートを申し出て下さつた久保田さんにはこの場をかりて、心から御礼を申し上げたい。久保田さんの校正の丁寧さにはいつものことながら、頭が下がる。

毎年同じことの繰り返しになるが、来年度も「文学を愛し、想像／創造する喜びを見いだし、考える力を培う時間を皆とともに創りだしてゆく」授業にしたいと思う。人の意見に耳を傾けること、自分の意見を相手に伝えることによって、自分の目には見えなかつたもの、思いもよらなかつた新たなものに出会うことができるだろう。

最後に今回の論集編集作業においては久保田勝己さんと院生の奥村佳子さんの力に負うところが大きい。お二人に心から感謝の辞を捧げたい。どうもありがとう！

第1部

その1

スウェーデン編

Edith Södergran の詩

菊地灯

OROLIGA DRÖMMAR

Fjärran från lyckan ligger jag på en ö i havet och sover.

Dimmorna stiga och fly och vindarna växla,
jag drömmer oroliga drömmar om krig och stora fester
och att min älskade står på ett skepp och och ser
hur svalorna flyga och känner ingen längtan!
Det är något tungt i hans inre som icke kan röra sig,
han ser skeppet glida in i den ovilliga framtiden,
den skarpa kölen skära in i det motsräviga ödet,
vingar bära honom in i det land, där allt vad han gör är förgäves,
i de tomma och fåfänga dagarnas land långt borta från ödet...

不安な夢

幸せからはるか遠く 私は海と眠りに浮かぶ島に眠っている
霧が立ち、消え、風が変わる、
私は不安な夢を見る 戦と壮大な宴、
そして私の愛する者が船に立ち
燕の飛ぶさまを見つめ、望みの無いことに気付くという夢を！
彼の内には動かすことのできない重いものがある
彼は見る 望まざる未来へ滑りゆく船を、
鋭い竜骨が御し難い運命へ切り入るのを、
帆が彼を運ぶのを、為すこと全て虚ろとなる地へと、
運命からはるか遠く空疎な虚飾の日々の地へと運びゆくのを…

(出典 : *Digter 1916*)

(菊地灯訳)

作者紹介：Edith Södergran（1892～1923）

Edith Södergran は 1892 年サンクトペテルブルクから 50 キロ北西に位置するフィンランドの村、Raivola に生まれた。彼女の幼少期からその死後まで、この地は第一次・第二次世界大戦の戦火に覆われており、彼女の詩にもそれらによる無駄な暴力や殺戮に囚われた、さすらう人々の姿が映し出されている。さらに彼女の幼少期は父 Matts Södergran の影にも覆われていた。彼は Södergran 家が所有していた農園を売り払い、家族を捨てアルコール依存症と結核に侵されていった。父とは対照的に母は教養のある人物であり、Edith は母から詩や文学の手ほどきを得た。彼女は孤独な幼少期を送ったが、彼女が「庭」と呼んでいた自然の風景や、おとぎ話を愛する少女へと成長した。Edith が 13 歳の時、父が結核に倒れた。この際に彼女がした、死にゆく父への口づけは後に Edith 自身を結核に陥れ、彼女は残りの生涯の大部分をサナトリウムやベッドの上で過ごすこととなる。

1916 年、彼女は処女詩集 *Dikter』『詩集』を出版したが、批評家からの理解は得られず、また彼女の詩は狂気的でしからぬものだとさえ考えられた。*

この後彼女は死期が近づくにつれ、キリスト教的な詩や美術を拒絶するようになり、周囲の人からも奇妙な目で見られるようになる。この時期になると彼女の詩は苦しみや孤独から作り出されるものが多くなる。1923 年の夏至の日に Edith が亡くなると、母は彼女の頼み通り、見つけられたすべての手紙を燃やした。

作品解釈

まずこの詩が所収されている *Dikter』『詩集』は 1916 年出版され、まさに第一次世界大戦の混乱の最中であることは注意が必要であろう。この詩には *krig*（戦争）という単語が現れるが第一次世界大戦そのものを指しているとは考えず、この詩は当時の情勢から想像された抽象世界であるという方向で解釈を進めていく。*

第一、二行目の風景は不安を描写しているように感じられる。ö（島）、*havet*（海）、*sover*（眠っている）というこれらの単語それが、現実味がなく、地に足のつかない「浮かんでいる」状態を連想させるからだ。海は「流動」、「死」、「時」を表し、征服するか、あるいは耐えなければならない絶望的で異質な世界を象徴し、眠りは「死」とよく似ているという点からもその不安定さが感じられる。また、*lyckan*（幸せ）からはるか遠い島にいるということから、この幸せというのは *Landet som icke är*「存在しない国」、彼女が夢見てやまなかつた人間の混乱から隔絶された地ではないだろうか。しかし彼女が不安の島で見ているのは幸せの国の夢ではなく、望みのない予感であることがこの後に描かれていく。第二行目では霧が立つもののすぐにかき消され、また風向きが変わる、つまり混乱やなにか落ち着かない状態を描いている。霧は水と空気の間のあいまいな状態であり、形あるものと形ない物の間のものである。つまり、霧という形のないものすら形をとれずに消えていくということを示していると考えられる。これらのことから、第一、二行目で表されて

いるのは、不安の海に漂う島は決して留まることのない風に包まれており、どこに向かうのかは不透明な中にあるという情景だろう。

第三、四、五行目で「私」は、*krig*（戦）と*stora fester*（壮大な宴）、*min älskade*（私の愛する者）の不安な夢を見る。まず宴がなぜ不安な夢なのかであるが、戦争の宴は出征の宴にしろ、戦勝の宴にしろ、人が死ぬこと・人を殺すことを祝うものであり、全くの明るさということではなくどこか暗い影が付きまとっている。もしくは人が死ぬことに祝宴を挙げるという状態への警告なのかもしれない。夢というのは、夢占いという文化から計り知れるように、高次のものによって送られた警告であることもある。また、「私の愛する者」はというと、船に立ち、燕の飛ぶさまを見つめ、そのままに絶望しているのである。彼の乗った船とその行先に関しては詩の後半で述べられていく。彼の見つめた *svalorna*（燕）というのは春の訪れ、再生の象徴とされており、その飛ぶさまを見て絶望するということは恐らく、燕が彼の船と行先を違えていたと考えられる。

ここで「私の愛する者」について補足する。*Edith* は生涯、男性の恋人を持たなかったがここでいう「私の愛する者」はこれを指す指示代名詞が *han*（彼は）であることから男性であることは明確であり、具体的にだれかを指すものではないことがうかがわれる。彼女の詩の多くは死んだ女性の視点で書かれ、その視点は時に男性の恋人に向かっている。その女性は男性から愛されることなく自分が若くして死ぬ運命にあることを知っていることから、彼女を通して *Edith* 自身の視点が表されていると考えるのが真っ当だろう。ここでは、この詩に現れる *min älskade*（私の愛する者）もまた、存在しない想像上の恋人だと考える。

第六行目の「動かすことのできない」と訳した *röra* という単語は「動かす」以外にも「触れる」「影響を与える」といった意味を持つことから、ここでいう *något tungt i hans inre* 「彼の内にある重たいもの」は、運命や宿命のような彼が自身では如何ともしがたいものだと捉えられる。運命とは宿命、必然とともに、神々ですら免れることの出来ないものである。この第六行目は彼の運命、動かすことのできない重いものというのは彼に内包されていながら、彼にはどうすることもできないものであるとの暗示である。もちろん彼は船に乗っており遠く離れたところにいるため、「私」にもその運命には触れられない。

残りの第七、八、九、十行目は *min älskade*（私の愛する者）の視線の先の描写である。彼が見たのは、自らの乗る船、その船の行先、船に運ばれるだけの自分自身、自身の運ばれて行く先であり、そのそれぞれがまた不安を強調し絶望に打ちひしがれるものとなっている。まず第七行目は船のさまを描いているが、この船は「望まざる未来へと滑りゆく」のである。ただ未来へ進んでいくのではなく、*glida*（滑る）という単語であることによりその不可逆性がよく現れている。その未来自体、*ovilliga*（望まない）ものであるが、そこへ進んでいくこともまた彼が望んだことではないうえに、彼には抗えないものであるということがこの行からうかがえる。彼は全く望んでいない未来へ滑り落ちていくのだが、船自体はむしろその運命に入り行くことを知り、覚悟していたかのような様子である。その

様子は第八行目において *den skarpa kölen* (鋭い竜骨)、*skära in* (切り入る) と表現されている。社会の情勢とは往々にしてそうであるが、彼が望まずとも乗っている船は一度滑り始めたらもう止められず、その暗い運命や未来の中へ突き進んでいってしまう。第九行目では *vingar* (帆) すらも船の進行を後押ししており、海の潮流・風向きともにすべてが同じ方向に動いていることがわかり、更なる絶望感を感じられる。その方向、つまり彼の望まない運命の行きつく先が、第九、十行目で描かれる「地」である。何をしても無駄であることは抵抗の無意味さを、運命から遠く離れることはその地においては運命すらも存在しないことを、空疎な虚飾な日々というのは時までもが虚ろなものであることを言っている。彼が戦い抜いてようやくたどり着けたのは何も存在しない、すべてが無為である地であり、「私」は「愛する者」が辿る道筋と終着地を夢で予感しながらも、ただ不安感に襲われる事しかできない。

まとめ

先述したように彼女の生まれた環境、時代はまさに混迷の中であり、また彼女自身も結構に侵されたことで人生の無意味さ、儂さを身に染みて感じ取っていたのだと考えられる。この詩を読んだ限り、彼女は戦争とは勝っても負けても行き着く先は同じであり、すべてが空虚であると考えているように感じられた。勝っても負けても、という戦争観には彼女の生まれ育った Raivola の状況、つまり境界に位置してしまったがために、どの国が訪問しても破壊されてしまうということがよく現れているのだろう。また彼女自身、スウェーデン語話者であるフィンランド住民であったことから、彼女もまたひとつの境界に位置していたのである。この詩を覆う深い不安と虚無感の裏側には、確固たる平和の地や安定への希求が存在するように思える。結局、彼女は最後までどれも得られずにその生涯を終えてしまったことが、彼女を薄幸の詩人たらしめているのかもしれない。少なくとも彼女のあまりに純粹な傷つきやすさと、それをひた隠そうとする精神の強さに、人を惹きつけてやまない奇妙な魅力があると思う。

テクスト

Theo Radic, "OROLIGA DRÖMMAR", *EDITH SÖDERGRAN SELECTED POETRY*,
2006, pp.280.

参考文献

アト・ド・フリース、山下主一郎、荒このみ（共訳）、『イメージ・シンボル事典』、大修館書店、1984年。

Gunnar Ekelöf の詩

関原瞳

Våren

春

Gröna björkar mot solnedgången

夕焼けに向かって並ぶ緑色のカバノキ

lockiga huvuden, bortvända

巻き毛の頭 逸らされた顔

ansikten, osedda

目には見えない

dryader skådande västeut

西の空を見守る ドリュアス

dit där aftonen törstar

そこでは夕焼けがのどを涸らしている

Aftonen törstar!

夕焼けが何かを欲している！

O ge mig att dricka

ああ 私に飲ませてください

det som ni druckit:

あなたたちが飲んでしまったもの

solnedgångens sav

夕焼けの木の蜜を

när i vita barken

私が白い樹皮の中で

jag skär mitt hjärta.

心を傷つける時に

(出典 : *SAMLADE DIKTER* 1997)

(関原瞳訳)

作者紹介：Gunnar Ekelöf (1907~1968)

Gunnar Ekelöf は、スウェーデンで最も有名なモダニズム詩人の一人であり、スウェーデン最初の超現実主義詩人といわれている。1907年9月15日ストックホルムにて生まれる。父は株式仲買人、母は貴族であり、経済的には余裕があった。若い頃には金利で生活していたが、1932年財産の大部分を失うことになった。1958年からはスウェーデンアカデミーのメンバーもつとめた。

1932年、詩集 *sent på jorden* でデビューするが、それは当時あまりに型やぶれなものであったため、広く評価されることではなく、批評家たちの厳しい批判を受けた。それは超現実主義の影響を強く受け、自滅的な思考・世界の終末を思わせる気持ちが表れており、ある意味 Edith Södergran の *Septemberlyran* のように文壇に大きな影響を与えた。その後、ロマン主義へと転じると、2作目の *Dedikation* (1934) ではよりよい評価を得た。最初の2作品は超自然主義の影響を強く受け、暴力的で時には熱狂的な表現がされた。

1941年出版の *Färjesång* では、ロマン主義と超自然主義のブレンド、進行中の戦争の暗い様子がよく表わされており、後のスウェーデン詩人たちに大きな影響を与えることとなった。1955年出版の *Våren* も記載されている *Non Servian* では、スウェーデンの独善的幸福を非難した。1968年3月16日ストックホルムにて亡くなる。Ekelöf による詩の形式・描写、文学用語の配置などは、スウェーデンに限らず北欧の詩人たちに影響を与えている。

※木の精ドリアーデについて

ギリシャ神話に登場する木の精。自らの宿る木と一生を共にし、樹木と共に生まれ、木が枯れると共に自らの命をとじる。このため、ドリアーデやギリシャの神々は、木の精に敬意を払うことなく木を傷つける人間をこらしめる。

普段は人前に姿を現すことは滅多にないが、美しい男性・少年に対しては、緑色の髪をした美しい娘の姿を現し、相手を木の中に誘惑し引きずり込んでしまう。その中で一日を過ごすだけで、何十年、何百年もの月日が経過してしまう。

作品解釈

タイトルの通り、この詩は春の情景と心情を描いたものである。北欧の春のイメージは、暗く、寒い長い冬がようやくあけた後の、明るく、暖かい希望の季節である。しかし、この詩は全体的に孤独で、寂しい雰囲気をしている。この一般的な北欧の春のイメージとの詩における雰囲気の相違に特に興味を持ったため、春という季節に作者はなぜこのような心情になったのかを中心に、解釈を試みた。

文法の解釈

初めに文法的に分かりにくかった点を整理する。

まず、この詩の二連目では代名詞が多用されており、各々が指示する対象が曖昧である。二連目の二行目の “mig”、六行目の “jag”、“mitt” が指す一人称は、語っている本人であ

る作者 Ekelöf 自身であると考える。三行目の “ni” は、既に登場している複数形の対象が唯一であることから、“dryader (木の精ドリアーデ)” であると考える。ただ、各々の代名詞が何を指しているのかが曖昧で、解釈を多様にできるのもこの詩の魅力のひとつであると考える。

次に、一連目の構造についてであるが、二行目から三行目にかけての単語の羅列 “lockiga huvuden (巻き毛の頭)”、“bortvända ansikten (逸らされた顔)”、“osedda (目に見えない)” は、全て四行目に登場する “dryader” の容貌・様子を表わしたものと考える。同様に、dryader の直後 “skådande västeut dit där aftonen törstar” も、 dryader を後置修飾していると解釈した。

二連目の三行目 “det som ni druckit” は、コロンを挟んだ “solnedgångens sav” と同格であると考える。つまり、私が飲ませてほしいものとは、 ni すなわち木の精ドリアーデが飲んでしまった夕焼けの木の蜜であると解釈する。同じく二連目の五から六行目にかけての “när i vita barken jag skär mitt hjärta.” は、“dricka” にかかる。つまり、“私が白い樹皮の中で心臓を傷つける時=私の心が傷ついた時に、飲ませてください” と解釈する。

表現技法

この詩に使われている表現技法としてまず、隠喻が挙げられる。一連目の最後と二連目の最初で二回登場する “Afton törstar(夕焼けがのどを涸らしている)” という表現がそれにあたる。一連目の一行目から三行目にかけては “solnedgången” “lockiga huvuden” “bortvända snsikten” “osedda” 単語の語尾が en (部)と a (部) が交互になっており、リズムがよい。二連目の最後の行では、“jag” と “hjärta” が音声的に頭韻を踏んでいる。

内容解釈

まず、詩に登場する木の精ドリアーデについて解釈を試みた。作者紹介の箇所で説明を加えたように、ドリアーデは木と生涯を共にする精霊である。そのため、ここではドリアーデたちは夕焼けと向かい合って並んでいるカバノキに宿っていると考えられる。そして、日が沈む西の空を眺めている。作者も同じように夕焼けの空を眺めており、ドリアーデたちが飲んでしまったものを自分も飲ませてほしいと願っている。このことから、作者はドリアーデに対して共感のような気持ちを抱いている、あるいは求めているのではないかと考えた。

次に、寂しげな雰囲気を解釈する上で注目したのは、詩に描かれている情景の時間帯である。それは夕暮れ時である。夕暮れは、昼と夜の間、光から闇へと移り変わる時間帯であり、一日の終わりの合図ともいえる。そのため、夕暮れには人は寂しい気持ちになり、何かを欲する気持ちや、願望が生まれる。夕暮れ時には人の感情にそのような影響を与えると考える。作者の Ekelöf も、夕焼けを眺めながら、そのような気持ちになったのではないかと解釈する。そして、“Afton törstar” という表現に Ekelöf はその心情を反映させたと考える。“törstar” には “のどが渴いている” という意味と “何かを渴望している” という意味がある。その二重の意味から、一度目は “夕焼けがのどを枯らしている” と隠喩的

に訳し、二度目は“夕焼けが何かを欲している”と訳し、隠喩に込められた作者の心情が表われるよう工夫した。“törstar”という単語を用いたことにより、何かを欲する気持ちがひしひしと、そして生き生きと伝わってくる。

最後に、これまでの解釈をふまえ、詩の内容と“Våren”というタイトルの関連性について考える。北欧の春のイメージは、暗い冬が終わって訪れる、明るく暖かい、希望に溢れた季節である。一方で情景が描かれている夕暮れ時は、そのような春のイメージとはむしろ反対で、明るい昼から暗い夜へと移り変わる時間帯である。この時間帯に筆者は気持ちが満たされず、何かを渴望している。この状態が春の訪れを待つ冬の心情に似ているように感じる。冬の間に暖かい春を思う気持ち、光が徐々に闇に変わっていく夕暮れ時に何かを渴望する気持ちに共通するものを感じ、希望を求める意味を込めて“Våren”が詩のタイトルになっているのではないかと解釈した。

まとめ

詩の全体の雰囲気が、夕暮れという時間帯や、そこに込められた筆者の心情のために寂しくなっており、初め読んだときにはタイトルと内容が一致せず、違和感を覚えた。しかし、闇が迫る夕暮れ時に何かを渴望しているという作者の心情をふまえ、希望を象徴する春がタイトルとなっていると解釈した。

参考文献

Wikipedia

Gunnar Ekelöf

http://sv.wikipedia.org/wiki/Gunnar_Ekel%C3%B6f

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%89%E3%83%AA%E3%83%A5%E3%82%A2%E3%82%B9>

Birger Sjöberg の詩

徳原佳子

FINNS NÅGOT VATTEN...

Finns något vatten som rinner så fort
som livet rinner undan till dödens port?
"Det har jag aldrig funnit."
Finns något eld som kan brinna så
het som förfäran hos den som skall gå
ung emot dödens skymundanvrå?
"Den elden har aldrig brunnit."

Finns något midnatt så mörk och svart
som jorden vid grävarnas möda vart?
"Aldrig jag kan det tänka."
Finns någon spegel så blank som den
tåren som strömmar på kind hos din vän
som dröjer och hoppas vid graven än?
"Den har ej någon sett blänka."

流れる水が・・・

冥府へ流れる命の如く
早く流れる水などあるだろうか
「そんなものは見たことがない」
死の淵へ勇み足で
向かう恐怖の如く熱く
燃え得る炎などあるだろうか
「そんな炎が燃えはしない」

苦役を負う墓掘り人の傍らの土の如く
暗澹たる夜などあるだろうか
「そんなものは考えも付かない」
未だ墓石に寄り添おうとする
君の友の頬を伝う涙の如く
輝く鏡などあるだろうか
「そんな輝きは誰も見たことがない」

(出典 : *Dikter* 1985)

(徳原佳子訳)

作者紹介：Birger Sjöberg (1885–1929)

スウェーデン人の詩人、作家、バラッド歌手、ジャーナリスト。特にバラッド集 *Fridas bok* (『フリーダの本』) と小説 *Kvartetten som sprängdes* (『爆破された四重奏』) で広く知られている。1885年12月6日、Vänersborgに生まれる。両親は小さな洋服店を営んでいた。経済状態はかなり良く、Birgerと彼の兄と弟は比較的恵まれた幼少期を過ごした。Birgerが13歳のとき、両親の店はほかの洋服店のあおりを受け、閉店を余儀なくされる。それを機に自分の生計について考えざるをえなくなった。学校での成績はあまり良くなかったが、1899年から1年間、無給ではあるものの K.A.Vikner のフォトスタジオで見習いの仕事に就くことができた。1900年に Stockholm に渡り、金細工師の弟子として働き、店の助手となる。しかし長くは留まらず、1901年には故郷に戻り、1903年3月に「ゲオルグ・ニイストレームの鉄・染料・壁紙店」の助手としての仕事を得る。

1906年に Stockholm に戻り、新聞社で働いていた兄の所に身を寄せる。それを機に、兄の友人である John Gustaf Christensén の仲介でジャーナリストとして働き始める。ストックホルム新聞社は彼のフリーダの詩を最初に出版した。それから Christensén に招かれて Skåne のヘルシンボリ・ポステンで働くが、そこでは彼の詩は有名ではなく、出版する機会も減ってしまったので、編集秘書となった。両親の死後、1918年に Ramlösa に移り、1921年にダーグヒル荘を手に入れ、そこで余生を過ごす。

1922年にデビュー作のバラッド集 *Fridas bok* が出版される。Birgerは巡業を短期間行ったが、そのことで彼の舞台恐怖症はすぐに克服される。1924年に小説デビュー作 *Kvartetten som sprängdes* を出版し、大成功を収めた。一方で、自身の苦悩と恐怖を表現した *Kriser och kransar* (『危機と花輪』) は不評に終わった。

1929年4月末には De Nio 賞を受賞するが、その時には既に意識不明の寝たきり状態で応じられなかった。そしてヴェクショ一市ホテルで両側肺炎のため死去する。彼が生前残したたくさんの詩の草案は死後、特に 1929年に *Fridas andra bok* (『続・フリーダの本』) として出版された。

作品解釈

この詩の最大の特徴としては、4つの疑問文とそれに対する否定文の答えで構成されているという点が挙げられる。そして、全体に共通しているのが「死」というテーマである。死にまつわる問いかけと、「そんなへは・・・ない」という答えの執拗なまでの繰り返しが、「死」というテーマ性の重さを一層際立たせている。さらに、第1連と第2連は、どちらも死について描きながらもその視点が異なっている。第1連の舞台は死後の世界である。死後の世界へと流れていく命や、死の淵へ向かう恐怖を、現実に存在する水や炎と比較することによって、死がいかにあつという間に訪れる恐ろしいものであるかを表現している。それに対して、第2連では死者を見送る側の人間の立場、すなわち現世が舞台となっている。「墓掘り人の傍らの土」に関する問いかけでも、死に対するネガティブなイメージはやはり継承されているのだが、最後の問いかけは少し毛色が違っている。これまでの問いかけとその答えが、死に対する暗く、恐ろしい印象を中心としていたのとは対照的に、この

問い合わせは「輝き」という美しさを取り上げている。ここに登場する人物は「君の友」とされているが、一般的な人々のことを指していると考えられる。墓石には大切な者が眠っているのだろうか。死者が既に帰らぬ人となっていることを知りつつも、「未だ墓石に寄り添おうとする」その姿には、故人に対する深い愛情が感じられる。そしてその涙の輝きは、光を反射する鏡以上のものである。そこには、亡き他者のことを思って流す涙は、何よりも尊く、美しく、純粋なものであるというメッセージが込められているのではないだろうか。全体的に「死」という陰鬱なテーマを描きつつも、最後のこの4行によって詩はどこか爽やかで感動的な読後感を与えていている。

では、この作品において作者はなぜ「死」という重いテーマを選んだのだろうか。短い期間ではあるものの、作者が両親や兄弟と共に暮らす比較的恵まれた幼少時代を過ごしていたことから考えると、「死」とはむしろ彼がその後の人生の中で経験した数々の苦悩や恐怖の象徴であるとも捉えることができる。実家の洋服店の閉店による家族との離散に始まる作者の波乱に満ちた生涯は、常に精神的な「死」と隣り合わせの状態にあったといえるだろう。詩人、小説家としての才能を開花させつつも、常に周囲や世間からの厳しい評価に晒され続けなければならないという重圧は計り知れなかっただろう。作家にとっての最大の苦悩とは、読者に人気のある作品が必ずしも自身が書きたいと思う作品であるとは限らないということである。それは作者自身の苦悩と恐怖を表現した *Kriser och kransar* という作品が不評に終わったという事実によっても明らかである。そして、De Nio 賞受賞の知らせを耳にすることも叶わず、あまりに短すぎる生涯を終えたということで、作者の人生はより一層悲劇性を増している。

また、この作品を含め、彼が生前残した詩の草案の大半が死後に初めて発表されたという事実も、詩人としての彼の不遇の人生をより際立たせている。このように、”*Finns något vatten...*”に登場する「死」とは、作者の人生における苦悩そのものを表しているのではないかだろうか。

まとめ

以上のように、この作品には作者 Sjöberg の死生観のみならず、彼の経験した苦悩が色濃く反映されていると考えられる。わずか2連という短い構成でありながらも、Sjöberg の心情や考えを端的に表した詩であるといえるだろう。そして、ただ単に「死」というテーマを否定的に描くだけではなく、死者のことを想って涙を流す者の心の清らかさを謳い上げているという点でも、実に興味深い作品である。

テクスト

Sjöberg, Birger. 1985. ”*FINNS NÅGOT VATTEN...*”. Dikter. Stockholm: MånPocket.

参考文献

http://sv.wikipedia.org/wiki/Birger_Sj%C3%B6berg

Pär Lagerkvist の詩

中谷内 なつみ

Allt är så underligt fjärran idag,

så långt långt borta.

Inne i molnen hörs vingarnas slag

av fåglar, långt långt borta.

Klar som en klocka av silver och glas,

långt långt borta,

ljuder en fågelröst spröd som glas

i en himmel långt långt borta.

Ensam i kvällsljuset lyssnar jag.

Vad dagarna börjar bli korta.

Hösten har kommit. Snart skymmer min dag.

Jag hör vingar så långt långt borta.

何もかもが驚くほど遠いこの日、

遠く遠く遙かに。

雲の中に羽音を打つは

鳥、遠く遠く遙か。

銀と硝子の鐘のように澄んで、

遠く遠く遙かに、

鳥の声は硝子のようにもろく響く

天に、遠く遠く遙か。

赤光の中に私は独り耳を澄ます。

日はかくも短くなりゆく。

秋が来た。やがて私の日は暮れる。

私の耳に響く翼遠く遠く遙かに。

(出典 : *Aftonland* 1953) (中谷内なつみ訳)

作者紹介: Pär Lagerkvist (1891–1974)

1891年5月23日、スウェーデンの Växjo に生まれる。作家・詩人・戯曲作家として活躍し、1940年にスウェーデンアカデミーの会員になる。1951年、『バラバ』(原題 Barabbas)によりノーベル文学賞を受賞。1974年7月11日、享年83歳にて生涯を閉じる。代表作に詩集 *Sibyllan* (『巫女』[邦題]) や短編 *Järn och människor* (『鉄と人間』[未翻訳]) など。

ラーゲルクヴィスト作品の大きな特徴の一つとしてあげられるのが、キリスト教への逡巡である。ラーゲルクヴィストが生まれ育ったベクショーには、当時昔ながらの敬虔なキリスト教徒が多く暮らしていた。地元の旧家に生まれたラーゲルクヴィスト自身も、キリスト教的価値観を当然のものとして、キリスト教に浸った子供時代を送っている。彼は自分の育ったこの地を故郷と生涯思い定め、大切にしていたという。しかし、高校で早くも先進的な学問に出会うと、ラーゲルクヴィストはキリスト教に対して疑問を抱くようになる。やがて彼はキリスト教を否定し、宗教を棄てることを決意するが、それまで当然として生きてきたキリスト教的価値観を抜けだすことは容易ではなかった。この事が彼の生涯の苦しみとなった。キリスト教を信じきる事も出来ず、かといって世迷言と否定する事も出来ないというこの二律背反は、『バラバ』をはじめとする彼の作品の中にも色濃く表れている。

ラーゲルクヴィストは生涯にわたってキリスト教への葛藤を抱き続け、この命題は最後の詩集に至るまで繰り返し問い合わせられている。

*詩集 *Aftonland*について

詩集 *Aftonland* はスウェーデンで 1953 年に刊行された。全 5 章と章外の 11 編で構成されており、約 60 編の詩を収める。各々の詩は題名の付いていないものがほとんどである。内容はキリスト教に関するものが多く、風景描写を通して作者の内面やキリスト教的命題を描くという比喩的なものもあれば、直接的に心情を歌いあげるものもある。章題は付けられておらず、I ~ V という表記に留まるが、詩に描写されている風景から推測して、夕暮れ時～深夜～朝という時間の流れに従って詩が並べられているのではないかと思われる。

作品解釈

ラーゲルクヴィストはキリスト教的価値観を背景に育ってきた。したがって、その言語感覚には当然聖書が大きく影響を及ぼしかだらうと考えられる。

この詩において重要なのは、何度も繰り返される *långt borta* というフレーズである。このフレーズは文章中において補語としては使われておらず、独立していることから、おそらく作者の心情が最もあらわされている箇所があると考え、今回はこの点に絞って、主に聖書という観点から詳細な考察を試みた。

1917 年にスウェーデン語訳された聖書において、*långt borta* というフレーズは 19 回登場する。これらを日本語訳と突き合わせ、次の三つの意味に分類した。

i) (物理的・時間的に) 遠い

Om så icke är, måste han ju, medan den andre ännu är **långt borta**, skicka sändebud och nederhandla om fred.

〈もしできないと分かれば、敵がまだ遠方にいる間に使節を送って、和を求めるだろう。〉
(ルカによる福音書 14:32)

Du människobarn, se, Israels hus säger: ”Den syn som han skådar gäller dagar som icke komma så snart; han profeterar om tider som ännu äro **långt borta**. ”

〈人の子よ、イスラエルの家は言っているではないか。『彼の見た幻ははるか先の時についてであり、その預言は遠い将来についてである』と。〉
(エゼキエル書 12:27)

ii) (精神的・心理的に) 距離がある

Skynda icke efter honom, ty han är redan **långt borta**; han har kommit undan likasom hinden ur snaran.

〈彼の後を追い回すな。彼ははるか遠くに去り、罠を逃れたかもしかのように逃げてしまった。〉
(シラ書〔集会の書〕 13:10)

Gör dig inga betänkligheter, utan uppmuntra ditt hjärta; och håll sorgen **långt borta** ifrån dig. Ty sorgen har dödat många, och den har ingen nytta med sig.

〈自分を変えて心を奮い立たせ、悲しみを遠くへ追い払え。悲しみは多くの人を滅ぼした。それは何の益にもならない。〉
(シラ書〔集会の書〕 30:23)

iii) (主に不信心の結果として) 神やその恵み・救いから遠い

Ty det bud som jag i dag giver dig är dig icke för svårt och är icke **långt borta**.

〈わたしが今日あなたに命じるこの戒めは難しすぎるものでもなく、遠く及ばぬものでもない。〉
(申命記 30:11)

Frälsning är **långt borta** från de ogudaktiga, ty de fråga icke efter dina stadgar.

〈神に逆らう者に、救いは遠い。あなたの捷を尋ね求めないからです。〉
(詩編 119:155)

Så hören nu på mig, I stormodige, I som menen, att hjälpen är **långt borta**.

〈わたしに聞け、心のかたくなな者よ、恵みの業から遠く離れている者よ。〉

(イザヤ書 26:12)

以上に見てきたように、聖書において **långt borta** というフレーズは物理的な意味に留まらず、精神的な距離についても用いられている。また、各章を通して読むと、**långt borta** というフレーズが、必ずしも距離があるばかりでなく、その結果として何かにアクセスできない、という意味合いを持つことも多い。この意味は、特に精神的な意味において用いられる時に顕著である。

今回この詩を読む上においては、**långt borta** というフレーズが

- ① 精神的に距離がある、また神と人との間に距離があるという意味で用いられる
 - ② (主に精神的な) 距離があるために何かに「届かない」というニュアンスを持つ
- という二点が大切になるかと思われる。

これ以外の単語に関しては、聖書中に記述が多く、また特定のシンボルを持たないなどの理由から、聖書辞典や、ラーゲルクヴィストの他の詩を参考にそのイメージを分析した。

Allt är så underligt fjärran idag,
så långt **långt borta**.

物理的・精神的な距離を表し、目的に辿り着くことが困難である、というニュアンスをもつ。

Inne i molnen hörs **vingarnas** slag
av **fåglar**, långt långt borta.

この詩集において、鳥・翼はより良い方向へ飛んでいくものとして描写される傾向がある。下記は一例。

Fågelunge lyft din vinge,/ lyft från min hand/ och flyg in i solen, som jag lovar skall komma

〈翼をふるえ若鳥よ、／私の手から飛び立て／そして太陽へと飛んでゆけ、きっと昇ると私は誓おう〉

Klar som en klocka av **silver och glas**,
långt långt borta,
ljuder en fågelröst spröd som glas
i en himmel långt långt borta.

神聖な美しさではあるが、脆い

Ensam i **kvällsljuset** lyssnar jag.
Vad dagarna börjar bli korta.

しばしば dö 〈死ぬ〉と共に、重々しく、寂しい印象でこの詩集の中に登場する。
... de dödas gård/ i sen höstkvällen. 〈…ついえた庭は、／晩秋の夕べに。〉

Hösten har kommit. Snart skymmer min dag.
Jag hör vingar så långt långt borta.

長い冬を過ごす北欧の人々にとって、秋とは暗く寒い季節の始まりを意味し、気分の落ち込む人が多いという。

まとめ

以上の分析をもとに、この詩を意訳した。原文をとどめていないので、翻訳とは言えないが、この詩の言わんとすることを筆者なりに解釈しようとしたものだ。

この詩に描かれている夕暮れの美しさを想像することはたやすい。夕暮れを眺めながら作者は一人開けた場所に立ち、鳥の声を聴いている。雲に隠れてその姿は見えない。しかし、翼の音から察するにどこか遠くへ去っていくようだ。一人おいて行かれるという孤独感が募っていく。直接描かれているのはそういう情景だろう。

しかし、この詩は単なる風景描写にはとどまらない。作者が生涯持ち続けたというキリスト教への葛藤が、情景描写にオーバーラップして、ますます深い世界を作り上げているようと思われた。

今は何もかもが恐ろしく遠くなつた、
私には叶わぬ場所。
雲の中翼を打ち鳴らし飛んでいく
鳥たちよ、遠く天の方へ。

銀と硝子の鐘の様に危うくも清く、
何処か遠く、
鳥の声は儂く硝子のように響く、
天の国で、遠い遠い場所で。

夕日に一人私は寂しく耳を澄ます。
日はますます短くなるのだろう。
秋が来た。やがてこの日も暮れていく。
翼の音は遙か彼方へ去っていく。

テクスト

Lagerkvist,Pär. 1953. *Aftonland*" Kabusa Böcker: Stockholm

参考文献とウェブページ

旧約新約聖書大辞典編集委員会, 1989, 『旧約 新約 聖書大辞典』(東京:教文館)

ピエール=ジベール著, 遠藤ゆかり訳, 2000, 『聖書入門』(東京:創元社)

bibeln.se (www.bibeln.se)

財団法人 日本聖書協会 (www.bible.or.jp)

Viktor Rydberg の詩

丹羽美咲

Tomten

Midvinternattens köld är hård,

stjärnorna gnistra och glimma.

Alla sova i enslig gård

djupt under midnattstimma.

Månen vandrar sin tysta ban,

snön lyser vit på fur och gran,

snön lyser vit på taken.

Endast tomten är vaken.

Står där så grå vid ladgårdsdörr,

grå mot den vita driva,

tittar, som många vintrar förr,

upp emot månens skiva,

tittar mot skogen, där gran och fur
drar kring gården sin dunkla mur,

grubblar, fast ej det lär båta,

över en underlig gåta.

För sin hand genom skägg och hår,

skakar huvud och hätta ---

»nej, den gåtan är alltför svår,

nej, jag gissar ej detta» ---

slår, som han plägar, inom kort

srika spörjande tankar bort,

går att ordna och pyssla,

går att sköta sin syssla.

Går till visthus och redskapshus,

känner på alla låsen ---

korna drömma vid månens ljus

sommardrämmar i båsen;

glömsk av sele och pisk och töm

Pålle i stallet har ock en dröm:
krubban han lutar över
fylls av doftande klöver; ---

Går till stängslet för lamm och får,
ser, hur de sova där inne;
går till hönsen, där tuppen står
stolt på sin högsta pinne;
Karo i hundbots halm mår gott,
vaknar och viftar svansen smått,
Karo sin tomte känner,
de äro gode vänner.

Tomten smyger sig sist att se
husbondfolket det kära,
länge och väl han märkt, att de
hålla hans flit i ära;
barnens kammar han sen på tå
nalkas att se de söta små,
ingen må det förtynka:
det är hans största lycka.

Så har han sett dem, far och son,
ren genom många leder
slumra som barn; men varifrån
kommo de väl hit neder?
Släkte följde på släkte snart,
blomstrade, åldrades, gick --- men vart?
Gåtan, som icke låter
gissa sig, kom så åter!

Tomten vandrar till ladans loft:
där har han bo och fäste
högt på skullen i höets doft,
nära vid svalans näste;
nu är väl svalans boning tom,
men till våren med blad och blom
kommer hon nog tillbaka,
följd av sin näpna maka.

Då har hon alltid att kvittra om
mången ett färdeminne,
intet likväl om gåtan, som
rör sig i tomten sinne.

Genom en springa i ladans vägg
lyser månen på gubbens skägg,
strimman på skägget blänker,
tomten grubblar och tänker.

Tyst är skogen och nejden all,
livet där ute är fruset,
blott från fjärran av forsen fall
höres helt sakta bruset.

Tomten lyssnar och, halvt i dröm,
tycker sig höra tidens ström,
undrar, varthän den skall fara,
undrar, var källan må vara.

Midvinternattens köld är hård,
stjärnorna gnistra och glimma.

Alla sova i enslig gård
gott intill morgontimma.

Månen sänker sin tysta ban,
snön lyser vit på fur och gran,
snön lyser vit på taken.

Endast tomten är vaken.

(出展 : *Ny Illustrerad Tidning* 1881)

トムテ

真冬の夜の寒さは厳しく
星々はきらきらと輝く。
真夜中のひっそりとした農場では
何もかもが深く眠っている。
月はしんとした道を歩み、
雪はマツやトウヒを白く照らし
雪は屋根を白く照らす。
起きているのはトムテだけ。

畜舎の扉のそばに立ち
白い雪の山に向かって影を落とす。
これまでの幾多の冬と同様に
満月を見上げる。
森の方を見やる、助けにならないけれども
マツやトウヒの薄暗い壁が農場を囲んでいる
考えこむ
奇妙な謎について。

あごひげと髪に手を入れ
頭を振ると、帽子も揺れた。
うーん、この謎はあまりにも難しすぎる
うーん、わからない。
すぐにいつものように
そんな疑問はさておいて
支度をし
仕事へ向かう。

食物庫と物置に向かい
鍵を残らず確かめる—
牛たちは囲いの中で夏の夢を見ている
月明かりに照らされて
くつわもムチも手綱も忘れて
馬小屋のお馬さんも夢を見ている
飼い葉おけがいっぱいになる夢を
いい匂いのクローバーで—

子羊と羊の柵に行く
どんなふうに寝ているかのぞく
にわとりのもとに行くとおんどりが得意げに
一番高い止まり木の上に立っている
心地よいわらを敷いた犬小屋の中
カロは目を覚まし軽く尻尾を振る
カロはトムテを知っている
トムテとカロはいい友達。

最後にトムテはこっそり見に行く
大切な主人の家へ
ずっと、ちゃんとトムテは気づいている
主トムテの働きを認めていることを
それからつま先立ちでそっと子供部屋に近付く
かわいくてちっちゃな子どもたちを見るために
気にくわない者などいない
それは彼の一番の幸せ。

トムテは見てきた、父と息子を
すでに幾代も
ぐっすり眠っている・・・でもどこから?
どこから来てどこへ行くのだろう
次から次へ世代は移る
にぎわい、年をとり、行った・・・どこへ?
ぐるぐると巡る
理解できない謎が！

トムテは納屋の屋根裏に戻る
そこにトムテは住んでいる
干し草の香りに包まれて
ツバメの巣の近くで
今は見ての通り留守だけれども
葉が茂り、花が咲き、春がくると
ツバメも戻ってくるだろう
かわいい奥さんを連れて。

帰るといつもさえずってくれる
数多の旅の思い出を
それでも謎については何にも

トムテの心の中で動く謎については。

納屋の壁の隙間から

月がトムテのひげを照らす

一筋の光が

トムテはうーんと考えこむ。

森も辺りも静まり返り

外の生命は凍っている

山にある急な滝から

すっかり静かな音が聞こえるだけ。

トムテは耳を澄ます、半分夢の中で

時の流れに

時はどこに行くのだろう

時の源はどこにあるのだろう。

真冬の夜の寒さは厳しく

星々はきらきらと輝く。

朝までもひっそりとした農場では

何もかもが深く眠っている。

月はしんとした道を下り

雪はマツやトウヒを白く照らし

雪は屋根を白く照らす。

起きているのはトムテだけ。

(丹羽美咲訳)

作者紹介 : Viktor Rydberg (1828–1895)

Viktor Rydberg は作家であり、ジャーナリスト、小説家、翻訳家、詩人でもある。Jönköping の貧しい家庭に生まれ、早くに母親を亡くす。そのことをきっかけに父は精神を患い、アルコール中毒になり一家はますます貧乏になる。彼の子供時代・青年期は貧しさとの戦いであった。家を出て早くから自活するも経済的理由でルンド大学を中退した。1855 年から Göteborg の新聞社で記者として 20 年以上働く。1840 年代には新聞に物語を発表し、1857 年に 17 世紀の海賊を描いた初の小説 *Fribrytaren på Östersjön* (『バルト海の海賊』) を発表。同年、彼のもっとも有名な作品のひとつ *Singoalla* (『シンゴアッラ』) を発表。これはジプシーの少女と騎士の恋愛小説である。映画化もされ、戦後の日本で初めて紹介されたスウェーデン映画でもある。詩作も早くから始めるが 1882 年まで出版はなされなかった。1881 年に詩 *Tomten* (『トムテ』) を発表。1891 年に 2 作目の詩集を出版。宗教と神話にも取り組み、1859 年にアテネにおけるキリスト教への移行期が舞台の *den siste Athenaren* (『最後のアテナイ人』) を書く。1862 年には聖書の言葉の矛盾を突きキリストの神性や三位一体説を否定する *Bibelns lära om Kristus* (『キリストに関する聖書の教え』) がヒットした。1871 年に Handelstidningen で *Lille Viggs äfventyr på julafoton* (『クリスマス・トムテン スウェーデンのサンタクロース』) を発表。1876 年にはゲーテのファウストを翻訳。1877 年からはスウェーデンアカデミーのメンバーであった。北欧神話とゲルマン神話の違いなど神話の研究もしており、1877 年の *Fädernas gudsaga* (『父の神話』) にまとめる。1884 年に Göteborg を去り Stockholms högskola で教授をする。1895 年に糖尿病と動脈硬化により死亡。

作品解釈

この詩は 8 行ずつ 11 連からなる。各連の 1・3・5・6 行目はアクセントが 4 つ、2・4・7・8 行目はアクセントが 3 つあり、1 行目と 3 行目、2 行目と 4 行目、5 行目と 6 行目、7 行目と 8 行目で脚韻が踏まれており、1 行目と 3 行目、5 行目と 6 行目は 1 つ母音が同じで、2 行目と 4 行目、7 行目と 8 行目では 2 つ以上母音が同じである。

また、この詩はタイトルにあるようにトムテを扱っている。トムテとは、気に入った人の家の納屋や家畜小屋に住みつき、その農家が繁栄するようにと手助けする小人である。トムテは牛や馬など家畜の世話、農場の夜番や火事の警告をする一方でいたずら好きで気に入らない者には復讐する一面もある。クリスマスイヴにはトムテの 1 年間の働きの返礼としてバターや蜂蜜をのせたおかゆを置く習慣がある。トムテが去るとその農場は不運になるとされる。

この詩の中のトムテは納屋の屋根裏に住み、あごひげがあり、帽子をかぶっている。トムテは主人とその家族のことを気に入っており、何世代にもわたって見守ってきた。このことからトムテは長生きだと言える。トムテは真冬の夜の農場で何もかもが眠っている中、食物庫や物置の鍵がかかっているか確かめ、牛、馬、羊、にわとりの様子を見回る。そんなトムテは「人はどこから来てどこに行くのか」「時はどこからきてどこへいくのか」と

いう謎について長年考えている。また、この詩の中のトムテは主人を気に入っているからかトムテの怒りやすい面が描写されていない。1871年にRydbergが発表した *Lille Viggs äfventyr på julafhton* に登場するトムテは主人の文句を言い、その家から出ていこうとしており、より民話におけるトムテの姿に近い。Rydbergは *Lille Viggs äfventyr på julafhton* で民間伝承の中の存在であったトムテを文学の中に登場させた。そしてこの詩によって Rydbergはさらにトムテを哲学的で尊敬すべき、道徳的価値を持つ存在へと昇華させた。それゆえ、発表から 100 年以上たってもなお様々な画家によって絵をつけられ、翻訳もされて世界中で読まれているのであろう。

参考文献・参考サイト

NATIONALENCYKLOPEDIN 16 1995, Hoganäs, Bokförlaget Bra Böcker AB
Svensk litteraturhistoria i sammandrag <http://runeberg.org/svlihist/rydberg.html>
Viktors sidor <http://vrsidor.se/>

Tomas Tranströmer の詩

弘瀬祐也

Flygblad

Det tysta raseriet klottrar på väggen inåt.

Frukträd i blom, göken ropar.

Det är vårens narkos. Men det tysta raseriet
målар sina slagord baklänges i garagen.

Vi ser allt och ingenting, men raka som periskop
hanterade av underjordens skygga besättning.

Det är minuternas krig. Den gassande solen
står över lasarettet, lidandets parkering.

Vi levande spikar nedhamrade i samhället!

En dag skall vi lossna från allt.

Vi skall känna dödens luft under vingrarna
och bli mildare och vildare än här.

ビラ

静かな怒りが 内なる壁に殴り書く
花の咲いた果樹では郭公が鳴いている
それは春の麻酔だ しかしその静かな怒りは
ガレージで逆様にスローガンを描き出す

我々の目には全てが写っているが何も見えていない、だが
小心の船員たちが地下で操る潜望鏡の如く直視している
それは数分間の戦争だ 焼けつくような太陽が
病院を照りつけ、駐車場では人々が苦しんでいる

我々生きる者は社会に打ち付けられた釘なのだ！
ある日我々はすべてから解放されるであろう
翼の下に、死者たちの空気を感じるだろう
そして今より穏やかに、荒々しくなっていくのだ

(出典 : *För levande och döda* 1989)

(弘瀬祐也訳)

作者紹介 : Tomas Tranströmer(1931-)

1931年4月、スウェーデン、ストックホルムで生まれる。北欧の代表的詩人。簡素な日常語を用いた独創的なメタファーを自由自在に駆使する詩人であり、「隠喩の巨匠」と称される。ストックホルム大学では心理学の学位を取得し、心理学者としての顔も持つ。青少年の更生施設で働いた経験をもつ。13歳の頃からその詩作活動を開始するが、そのころからその詩的才能で注目を集めていた。そして1954年に詩集 *17 Dikter*(『17の詩』)でデビューする。現在までの詩集の刊行数は15冊を数え、各文学賞受賞数は25に及ぶ。そして2011年にはノーベル文学賞を受賞する。スウェーデンアカデミーは受賞の理由を、「凝縮された半透明なイメージを通して、現実への新しい道筋をつけた」と説明した。以前から受賞最有力候補とされていた中での受賞であった。

彼は、心理学者としての視点や、世界各地を旅した経験、身近な人々の病気や死、自由と言論統制などのテーマを取り込み自身の世界観を作り上げている。1990年に重度の脳卒中を患い、その後遺症として会話能力と右半身の自由を失ってしまうも、詩作を続けてきた。そして1996年には病詩人の心象風景を描いた *Sorgegondolen*(『悲しみのゴンドラ』)を刊行する。俳句にも深い造詣があり、20代の頃から興味を持っていたという。母国では「俳句詩」で知られている。『悲しみのゴンドラ』では俳句の「五・七・五」という伝統形式にのっとった俳句詩が見られ、2004年刊行の *Den stora gatan*(『大きな謎』)では俳句詩が作品の中心を占めている。彼の作品は60カ国語以上に翻訳されている。

作品解釈

まず初めに連ごとに解釈を行っていくこととする。

一連目は、“Det tysta raseriet klottrar på väggen inåt”(静かな怒りが心の壁に殴り書きをする)という描写から始まっている。「inåt」は「内なる」という意味であるが、おそらくは心の中の出来事であると解釈できる。外部から抑圧され、心の内側に閉じ込められた怒りが内心において爆発しているのだ。それは何に対する、誰の怒りなのか、それはまだこの段階では分からぬ。続いて「花の咲いた果樹」、「郭公」が登場し、それは「春の陶酔」だという。その後再び「静かな怒り」が登場し、今度はガレージでスローガンを逆様に描き出す。ガレージは暗くて狭い、閉鎖された心の中の比喩であると読み取ることができる。思うに、この連では現実の世界と心の中が対比されないと読み取れるのではないだろうか? 心の中は、「ガレージ」という単語によって狭くて暗い空間として比喩されている。そして現実は果樹が花を咲かせ、郭公が啼いているいかにも平穏な世界である。しかしながらそれは「春の陶酔」に過ぎない。この怒りの主はこの見せかけだけの平穏な世界に生きているが、何かに対して怒りを抱いている。だがその怒りは何かにより抑圧され心の内側に閉じ込められている。3~4行目では、その怒りを外側に表現しようにもどうすればいいのか分からないということを表しているのではないだろうか?

二連目に移ると「vi(我々)」という語が登場する。おそらく一連目に登場した怒りの持ち主も「我々」であろう。二連目において「我々」は、小心の船員たちが地下で操る潜望鏡の如くすべてを見ている。しかしそれは地面の下という、現実から隔離された、きわめて安全な場所からである。「地面の下」というのも、「一連目」の「ガレージ」と同様心の中の比喩と捉えることができよう。「我々」は潜望鏡を通して現実というものを直視している。しかし地面の下に隠れ何も具体的な行動を起こさない。「krig (戦争)」と比喩される何かしらの事件・出来事が、ほんの数分の間に起ころ。そうなればもはや手遅れとなり、人々が苦しむこととなる。これは「我々」が傍観者に徹した結果なのだ。

三連目で詩人は主張する、我々生きている者は社会に打ち付けられた釘なのだと。「我々」はこの社会に囚われの身になっているのだと。しかしながら死によってすべてから解放されるだろうと。最後は、死後「我々」は「穏やかに」そして「より荒々しく」なると締めくくられている。「穏やか」と「荒々しく」は正反対の意味を持つ語である。この相反する2語がともに「我々」を形容しているが、ここで「我々」という語を2つの側面から捉えて考えることはできないだろうか？すなわち、生前は傍観者に徹し何ら行動を起こすことなく死によって社会から解き放たれた「我々」と、今まさに見せかけの平和な社会に生き、心の中では抑圧された怒りを抱え込む「我々」である。前者は死によって「穏やか」になるが、後者は前者の不作為によってより「荒々しく」なっていく。そして後者が前者と同じ道を辿っていく、この繰り返しである。第三連は、このような「我々」の無責任による連鎖への詩人の怒りが表出された連だと解釈できるのではないだろうか？

ここから詩全体のまとめに入って行く。今も昔も世の中では、大規模なものから小規模なものまでさまざまな問題が存在している（環境問題・紛争・差別・貧困・いじめなど）。こういった現実をただ傍観しているだけならば、それらに巻き込まれることもなく平穡に人生を過ごすことが出来るかもしれない。だがそれは見せかけだけのもの、「春の陶酔」に過ぎない。「我々」は現実の状況や苦しんでいる人々を傍観しているだけではいけない。心の内側に抑圧された静かな怒りを表明し、行動に移さなければならない。恐れて地面の下に隠れていてはいけない。この詩のタイトルである“flygblad”は、意見を表明するために配る紙という意味である。今回は「ビラ」と訳したが、このタイトルは「我々」に対して、心の内に閉じ込めている「静かなる怒り」を表明せよという詩人からのメッセージなのではと私は考える。

テクスト

Tranströmer,Tomas. 1989. *För levande och döda*

参考文献

<http://sankei.jp.msn.com/life/news/111009/bks11100908260012-n1.htm>

『悲しみのゴンドラ』（トーマス・特朗ストロンメル、エイコ・デューク訳、思潮社

1999年

Edith Södergran の詩

弓場 麻妃

MIN SJÄL

Min själ kan icke berätta och veta någon sanning,
min själ kan endast gråta och skratta och vrida sina händer;
min själ kan icke minnas och försvara,
min själ kan icke överväga och bekräfta.
När jag var barn såg jag havet: det var blått,
i min ungdom mötte jag en blomma: hon var röd,
nu sitter vid min sida en främling: han är utan färg,
men jag är icke mera rädd för honom än jungfrun var för draken.
När riddaren kom var jungfrun röd och vit,
men jag har mörka ringar under ögonen.

私の魂

私の魂は真実を語ることができず何が真実かも分からぬ
私の魂ができるることは泣き、笑い、手を握り締めることだけ
私の魂は記憶することも護ることもできない
私の魂は思考が止まり確かなことも分からぬ
私が子どもの頃海を見た。海の色は青
私が若き頃に花に会った。彼女の色は赤
今私の隣には見知らぬ人が座っている。彼に色はなし
けれども乙女が竜を怖れるほどに 私は彼を怖れない
騎士が迎えに来たとき 乙女の色は赤と白
私の目には黒き隈が浮かぶ

(出展 : *Dikter 1916*)

(弓場麻妃訳)

作者紹介：Edith Södergran (1892-1923)

エーディット・スーデルグラン(Edith Södergran)は1892年にロシアのサンクト・ペテルブルグで、機械工である父マツと母ヘレナの間に一人娘として生まれる。一家はエーディットが誕生して3ヶ月後に、コレラが蔓延したサンクト・ペテルブルグから避難し、フィンランドのライヴォラ(現・ロシア・カレリア)に引っ越しした。1902年にエーディットはサンクト・ペテルブルグのドイツ学校に入学した。1906年、父マツに結核菌が見つかり、母娘二人きりの生活がこのときから始まる。1908年になるとエーディットは体調不良を訴えることが多くなり、1909年初頭に自らも結核であると診断される。

1916年に処女詩集『詩集』(Dikter)が出版された。翌年のロシアの十一月革命によりスーデルグラン一家の財産は紙切れ同然となってしまう。1918年に第二詩集『九月の豊穣』(Septemberlyran)を出版。1919年春には第三詩集である『薔薇の祭壇』(Rosenaltaret)、1920年には第四詩集『未来の影』(Framtidens skugga)が発行された。『未来の影』に対する書評は、ほとんどすべてが否定的なものであり、エーディットは詩を発表することなく沈黙を守っていた。その後、ドイツ語に訳したフィンランドの若い詩人たちの選集を出版しようとしたが、成功しなかった。病状は次第に悪化し、1923年6月24日の夏至の夜、ライヴォラの自宅でエーディットは亡くなった。彼女の死後、友人であったエルメル・ディクトニウスやハーガル・オルソンによってエーディットの遺稿集『存在しない国』(Landet som icke är)が出版された。

作品解釈

この詩は大きく二つの部分に分けることができる。前半では「私の魂」について述べている。「私の魂」は理性的なことができず、泣き、笑い、怒ると云った感情的なことしかできないという。精神の拠り所となる「魂」は、「私」のもつ心の「本質」を映しており、結核という病を持つエーディットの、迫りくる死、人生への不安と、病に対してどうすることも出来ないという一種の諦めにも似た死を受け入れる姿勢が表れている。

後半は、まず過去の回顧、現在の「私」と対比させられる「乙女」の存在がある。そして印象的なのが、多くの色彩である。彼女が思い出す海の色は青色、そして花の色は赤色だ。1913年に母とイタリアへ旅行したときに目にした地中海を思い出しているのかもしれない。このとき見た海をモチーフにしているのであろう「不思議な海」(Det underliga havet—Dikter, 1916 所収)においても、エーディットは美しい海に感銘を受けたであろうことがわかる。海の青色は「希望」のイメージ、花の赤色は「愛」や「美しさ」のイメージである。しかし一方で、現在彼女のそばにいる人は色が無い。また「私」は怖れないにしても、乙女が竜を怖れるように「彼」は一種の怖れの対象であることがわかる。「私のそばに座る彼は、来るべき死を表わしている。しかし、「彼」に色は無く、これは「彼」、つまり死に対して印象を持たないことを表わしている。前述したようにエーディットは来るべき死を受け入れようとしているのだろう。詩の最後にも、"mörka"という単語が出て

くる。「暗い」という意味のこの単語の色は黒だ。"jag har mörka ringar under ögonen (目の周りに隈がある)"という表現からも、病的で不健康そうな様子がイメージさせられる。黒色が「死」や「恐怖」の象徴であることからも、「私」の身に死が纏う様子がわかる。

乙女の色彩は赤色と白色だ。この赤色は女性的な「美しさ、愛」や血のイメージから「生命、生気」の象徴であり、また白色は無垢な「純粹さ」の象徴である。『詩集』を出版するころエーディットは異性を意識した詩もいくつか書いている。しかし、エーディットが夢見た男性がフィンランドを離れて勤務することにショックを受け、男性全般に対する失望や、自分が女らしさに欠けるのではないかという不安が詩の中に現れるようになっている。また、騎士が乙女を竜といった強大な敵から救い出すことは、騎士道物語を彷彿させる。騎士道物語はヒロイック・ファンタジーや恋愛小説の原型といえる。ヒロインたるこの乙女の存在は、愛を渴望するエーディットとの対比であり、また迫り来る死に対する生への憧れを示している。

まとめ

以上に見てきたように、結核という病を持ったエーディットは死を意識している。来るべき死を怖れずに受け入れようとする中で、生きることの意味や生の価値を見出そうとし、また自らの魂が持つ生への憧れを表わしているのだろう。

テクスト

Theo Radic, "MIN SJÄL", *EDITH SÖDERGRAN SELECTED POETRY*, 2006.

参考文献

三瓶恵子, 『どこにもない国—フィンランドの詩人エディス・セーデルグラン』, 富山房,

2011年.

Harry Martinson の詩

渡邊友里

DEN STORA SORGEN

大きな悲しみ

Naturens lagar är redan på väg
att ställa oss alla mot väggen.
Den väggen är lag av naturen.
Den saknar evangelium.
Den stora sorgen måste vi alla dela.
Då blir den möjlig att bärta.
Den stora sorgen är den stora omsorgen.
Den måste vi alla lära.

自然の法則はすでに
私達を壁に向かって立たせようとしている
その壁は自然の法則
それは福音を欠いている
その大きな悲しみをだれもが分け合わねばならない
そうすれば持ち運べるようになる
その大きな悲しみは大きな思い遣り
それをだれもが教えねばならない

Det finns bland alla bör och borde
ett måste för alla.
Alla måste lära att sörja för världen.

全てのすべきことやるべきであったことの間に
だれもが決して欠かしてはならないことがある
世界を守ることをだれもが教えねばならない

När mänskan nu fått makt nog
att ställa till världssorg
då är tiden inne
att bota världssorg i tid
innan all naturen blir
sorgebarnet för alla.

人間が世界の悲しみを構築する
十分な力を持った今
まさにその時なのだ
全ての自然が
だれもの荷物になってしまふその前に
世界の悲しみを癒すための

Detta kallas omsorg i tid.
Den verkliga sorgen
som i tid ser och inser.

それは手遅れになる前の思い遣りと称される
手遅れになる前に
理解し悟っている本当の悲しみ

(出典 : *Dikter 1961*)

(渡邊友里訳)

作者紹介 : Harry Martinson (1904-1978)

Harry Edmond Martinson はスウェーデンの小説家、詩人である。1929 年に詩集 *Spökskepp* (『幽霊船』) を刊行し、詩人としてデビューした。労働者階級の彼は独学で詩作を学び、近代のスウェーデンプロレタリア文学を代表する一人である。また詩集 *Fem unga* (『5 人の若者』) を Artur Lundkvist らと刊行し、スウェーデンにモダニズムを紹介した。彼の詩には自然への愛と鋭い視点、ヒューマニズムへの熱い想いが感じられる。また彼の詩の特徴は効果的に比喩が用いられていることであり、彼の観察力の鋭さがうかがえる。1949 年にスウェーデンアカデミーのメンバーに選ばれ、1974 年にノーベル文学賞を受賞した。

1904 年 6 月にスウェーデン南東部のブレーキング地方にある Jämshög で生まれる。7 人兄弟の 5 番目であった。幼いころに両親を失っており、父親の Martin Olfsson が 1910 年肺がんのため亡くなった時、彼はたった 6 歳であった。その一年後母親は子どもたちを保護施設に預けアメリカのオレゴン州へ移住し、その後ポーランドで定住したため、残された彼は里子として育てられた。過酷な労働を余儀なくされる厳しい幼少時代であった。

養家から何度か脱走を試みた彼は 16 歳のとき船に乗り、それから約 6 年間を乗組員として過ごした。19 の船で働き、ブラジルやインドなどを周りながら世界中を旅した。しかし 1927 年には肺の病気のため、スウェーデンへ帰国することを余儀なくされる。その翌年には彼は定職につくこともなくスウェーデン国内で浮浪者として過ごし、21 歳の時にはマルメで浮浪罪で逮捕されている。このように早いうちに両親を失い船舶の乗組員や浮浪者となった経験は、彼の文学作品へのインスピレーションに大きな影響を及ぼしている。また彼は若いころの辛い時代を描き 1935 年に出版した半自伝的小説 *Nässlorna blomma* で小説家としても高い評価を得た。1929 年には作家で 14 歳年上の Moa と結婚し二人の子どもをもうけるが、のちに離婚し 1942 年に Ingrid と再婚した。

彼のもっとも有名な詩は、宇宙で遭難し漂流する宇宙船を描いた長編詩の *Aniara* (『アニーラ』) という作品で、1956 年に出版され、1959 年にはオペラ化されている。

1974 年に Eyvind Johnson と共にノーベル文学賞を受賞したが、2 人はどちらもノーベル賞委員会に所属していたため、彼らの受賞は論議を呼んだ。彼は周囲の批判に耐え切れず、1978 年 2 月 11 日にストックホルムのカロリンスカ病院で、はさみで自殺した。73 歳であった。彼の死についての詳細は Lars Gyllensten の著書に描かれている。

作品解釈

彼の作品には自然への愛と鋭い視点の感じられるものが多数あるが、今回私が扱った詩もまた、彼の自然に対する想いが強く読み取れる作品の一つである。

この詩は全体を通して一貫して、私達が自然に対してとるべき態度についての主張を述べている。人間の利己的な振る舞いによる自然破壊を阻止しなければならないと訴えかけて

いるのである。この詩は今から 40 年以上前の 1971 年に書かれた作品である。今でこそ自然や環境破壊は大きな問題として人々に認識されているが、彼はその当時からこの問題に対し警鐘を鳴らしていたのである。そう考えると、彼の人一倍強い自然に対する思いの深さ、鋭いまなざしをうかがうことができる。

題名の「大きな悲しみ」とは、世界が抱えている大きな問題、つまり自然や環境が人間の手によって破壊されていることを表していると考えられる。

第一連

この詩は「自然の法則はすでに私達を壁に向かって立たせようとしている」という一文で始まる。「壁 (väggen)」とは私達の前に立ちはだかっている大きな問題の比喩であり、私達がこれまで自然に対して行ってきた破壊活動に対する報いが今課せられようとしているのだと考えられる。そしてその壁には「福音 (evangelium)」が無い、つまりこのままでは神からの救いは望めないのである。

しかもしも私達一人ひとりが、この問題に対し関心を持ち思い遣りを持って世界の大きな悲しみを分かち合うならば、それを持ち運ぶことができるようになる、つまり 1 人では決して解決することのできない大きな問題を乗り越えてゆくことができるのだと解釈できる。そしてそのことを私たち皆が理解し、世代を超えて伝えてゆかなくてはならないのだ。

第二連

bör は「～すべきである」という意味で、borde は bör の過去形である。これらは本来補助動詞であるが、ここでは名詞として用いられている。よってここでは bör och borde の訳を、「すべきことやすべきであったこと」とした。第一文の意味は、人々が自分が「すべきである」と考えているすべての物事の中には、「すべき」にとどまらず「必ずしなければいけない」こと、「全ての人々に共通な義務的定め」がある、ということであると考えられる。そして世界を守ることを伝えていかなければならぬと主張している。

第三連

この連は一文だけで構成されている。

fått の前には har が省略されており、完了形の har fått である。ställa は「据える、置く」という意味の単語であるが、ställa till で「構成する、構築する」という意味の熟語になる。tiden är inne は、「その時がやってきた」という意味である。i tid は「間に合って、その時より前に」という意味で、ここでは手遅れになる前に、と訳した。sorgebarn は sorge 「悲しみ」と barn 「子ども」をくっつけた造語で「問題児や厄介者、お荷物」という意味の単語である。

現代では機械などの発達によって、人間の持つ自然を改変する力は以前とは比べものにならない程格段に大きくなっている。自然が持つ自己修復性を超えて負担をかけたり、自

己修復性が損なわれたりすると、回復が遅れ、結果的に人類をはじめとした生物に悪影響を及ぼすことになるのだ。

人間が簡単に世界や美しい自然を破壊することができる大きな力を持ってしまった今こそ、全ての自然が破壊され手遅れになってしまう前に、その力を自然を守り治癒してゆくことに用いなくてはならない、と主張しているのだと考えられる。

第四連

2文目の最後、*inser* の後には、目的語となるべき語が抜けている。

Den verkliga sorgen 「その大きな悲しみ」は、この詩で語られている全てのことを理解し悟っているのだと思われる。またこれは *omsorg* 「思い遣り」と *sorg* 「悲しみ」が全く意味は異なるが同じ語源から派生していることによる作者の言葉遊びの類でもある。実際に「本当の悲しみ」が何を理解し悟ったのかは明確にされていない。それが何であるかは私達個人の解釈にまかされているのだ。

参考文献

http://en.wikipedia.org/wiki/Harry_Martinson

http://www.nobelprize.org/nobel_prizes/literature/laureates/1974/martinson.html

<http://www.kirjasto.sci.fi/harrymar.htm>

http://www.saketvora.com/papers/srvora_harry_martinson.pdf#search='harry%20martinson'

第1部

その2

デンマーク編

Orla Brudgård Povlsen の詩

板倉絵理

Under horizonten

水平線のもとで

Sand og vand og sten
og et rum av mågeskrig
lidt blod
er mit liv.

砂、水、石、
そしてかもめが泣き叫ぶ場所。
わずかな血、それは
私が生きているという証。

Det summer deri
av en hendøende streng.
Det summer deri
av lidt blod som sagt.

響き渡る
ああ、だんだんと消えゆく弦のおののき。
響き渡る
ああ、繰り返そう、それが生きているということ。

På den hvide strand
sort under den øde
blege horizont

白い浜辺の上で
空虚でおぼろげな水平線の下
黒が沈む

et saltbmidt hvidt klaver
bævende fuldt av fluer.

白く浸食したピアノは
蠢くハエ達におおわれる

(出典：*Mur og Rum* 1962)

(板倉絵理訳)

作者紹介：Orla Brudgård Povlsen（1918-1982）

デンマークの作家で、ジャーナリストでもあり、鍛冶屋の顔を持つという異色の経験を持ち、多岐にわたる分野で活躍した。1918年4月22日、コペンハーゲンに生まれる。鍛冶屋で腕を磨き、ロスキレの職業訓練学校やアスコーのフォルケホイスコーレに通う。

1943年、短編小説を発表し、作家デビューを果たす。さらに、1945～1947年 *Hjemmets søndag*、*Holbæk Amstidende* のそれぞれのタブロイド紙でジャーナリストとして活躍する。

彼は生涯を通じて、様々な詩の形態を模索することとなった。1944年に *Ponny og Pegas* を、1953年に *Festens Vilkår*、*Hverdagsdigte* を相次いで発表する。これらの作品は共に大いなる自然への感動やそれに対する素晴らしい観察をテーマに描いている。一方で彼は1947年の *Vorherres Biograf* 以降、新しい詩の形態を模索し、従来の自然などのテーマから、自身の平凡な生活を表現する方向に転じた。1971年、*Flammekrebsen* を発表、この作品ではかなり政治的な色が濃くみられた。しかし、1974年の *Dagligdag* では、個人的な出来事をテーマにした詩を描き進めた。

また、私生活においては二度の離婚を経験した。後に1957年に結婚した Grete Olsen と生涯を添い遂げることとなる。二人の間には、息子 Klaus Bundgård が誕生し、作者と同じくジャーナリストになり、デンマークの報道番組で活躍している。

1982年10月10日、コペンハーゲンで逝去。

作品解釈

この詩は4つの連で成り立っているため、連ごとに解釈していった。

・第一連

まず、この連の第1～2行目は、水平線の見える砂浜の景観をイメージしている。この段落で出てくる“mit liv”であるが、この“mit”は私でも、あなたでも、また作者でもなく、誰にでもあてはまる人間の生を表している。これと関連して、第3行目の“blod”についてみたい。“blod”には、①血、血液、②血統、家柄、③生命、命と様々な意味がある。ここでは、3つめの生命、命という意味に注目し、“blod”が生の象徴であるということで“lidt blod er mit liv”に、「わずかな血、それは私が生きている証。」という訳をつけた。以上より、この段落は人間の生を表しているのだと解釈した。

・第二連

この連は第一連とうってかわり、主語は第四連で出てくる“klaver”、すなわちピアノである。“klaver”という単語はこの段落では直接触れられてはいないが、この連の情景をイメージすれば分かる。この連では大きなグランドピアノをイメージしてもらいたい。グランドピアノは音を最初にポーンと鳴らすと、最初は弦が震えてピアノの内部で響くが、

どんどんその音はよわよわしくなっていく。その情景がまさに第二連目にあてはまる。ピアノにとっては、美しくその弦をふるわせて音を出すということが、まさに生である。そこで、この段落に第一連に続き再び出てきた“lidt blod”に、少し意訳ではあるが、「それが生きているということ」という訳をつけた。この段落でも、“生”がテーマになっている。

・第三連

この連では、第1、2連と反対に死を表している。この連に出てくる“sort”（黒）も死を暗示する。なお、この連には動詞がないため邦訳に動詞を補っている。授業中に、この連の根幹の部分でもあり、この詩のタイトルでもある“under horizonten”（水平線のもとで）の“under”はどこに当たるのか、というご指摘を頂いた。他の方の意見から、人が死んだら海の向こうへ行くという説もあると伺い、この“under horizonten”はかなり曖昧でおぼろげなイメージであり、特定の場所を定められないと解釈した。また、地平線ははつきりと目で見て分かるのに対して、海と空の境界線である水平線はかなりあいまいである。このことからも、以上の筆者の解釈を裏付けられるだろう。

・第四連

この連でも、死をイメージする単語が随所にちりばめられている。たとえば、第1行目の“et saltbidt hvidt klaver”であるが、文字通りに訳すと「白く浸食した白いピアノ」である。浸食は長い年月をかけてピアノを蝕んでいったはずであり、このピアノはかなり長い年月を経ていたであろう。そのようなピアノは調律もされず、ピアノの弦はさび、美しい音を奏でられなくなっている。第二連のように、美しくピアノの内部いっぱいに弦を響かせられることこそピアノにとっての生であり、古くなつて音を出せないピアノは死を意味しているといえるだろう。さらに、最後の行に出てくるハエも死を暗示している。ハエは死体に群がる生き物であり、死をイメージしている。このように、第3連目に引き続きこの連でも死をテーマにしている。

まとめ

今回、ゼミの授業を通して初めてデンマーク語の詩というものにじっくり取り組んだ。真正面から詩に取り組んで初めて、いかに詩を読み説くことが難しいかを痛感した。しかし、辞書と詩の文面を交互に照らし合わせていく内に、詩をよみながら作者の声が聞こえるような気がした。今回私が行った訳は、一つの解釈に過ぎず、読み手によっていろいろな解釈の仕方ができるだろう。一つの作品に根気強く取り組んでいく中で、詩を読む面白さがわかってきた気がした。これからも、たくさんの詩を読んで詩を読む力を磨いていきたい。

最後に、この詩の題名である“horizonten”について述べたいと思う。私はこの作品のタイトルを“水平線”と訳したが、この“horizonten”には水平線、または地平線という意味でもないもう一つの意味がある。それは視野や展望という意味であり、この詩には作

者の人生観が込められていると解釈した。作者は美しい水平線が広がる海の光景を目の前にして、自分の存在とは何か、そしてさらには生とは、そして死とは何かを考えたに違いない。

参考資料

<http://www.litteraturpriser.dk/aut/bo.htm>

<http://www.gravsted.dk/person.php?navn=orlabundgaardpovlsen>

Torben, Brostrøm. *Lyrik*. 1976. København: Gyldendal.

Tove Ditlevsen の詩

板倉亮平

Så tag mit hjerte

わたしのこの心を

Så tag mit hjerte i dine hænder
men tag det varsomt og tag det blidt
det røde hjerte - nu er det dit.

わたしのこの心を、
あなたの両手に取ってみて
でも、そっと、やさしくね
真っ赤なこの心は
— いまはもうあなたのもの

Det slår så roligt, det slår så dæmpet
for det har elsket og det har lidt
nu er det stille - nu er det dit.

おだやかに、やわらかに鼓動するこの心
なぜなら、ずっと愛し、
苦しみ続けてきたから
いまはもう静か — いまはもうあなたのもの

Og det kan såres og det kan segne
og det kan glemme og glemme tit,
men glemmer aldrig - at det er dit.

ときには傷つき、倒れるようなこともある
忘れ、忘れてしまうこともたくさんある
でも、これだけは忘れないの —
この心が、あなたのものだということを

Det var så stærkt og så stolt, mit hjerte
detsov og drømte i lyst og leg
nu kan det knuses - men kun af dig.

とても強く、誇り高かった、わたしのこの心
眠りにつくと、
喜びと遊びの中で夢見ていたの
それでも、この心が潰れてしまうことだって、
今ならありえるわ
— でも、そうさせるのは、ただあなただけ

(出典 : *Lille verden* 1942)

(板倉亮平訳)

作者紹介 : Tove Ditlevsen (1917-1976)

デンマーク人作家。自身では作詞家と称しており、デンマークの伝統的な作詞に深く根差した作品を残している。生まれは København の Vesterbro 地区。労働者階級の家庭で育った。幼少期に読んだ物語や贊美歌、黄金時代の文学作品から多くのインスピレーションを得たという。彼女の作品には押韻や比喩表現を含んだ詩が多く、また自身の人生での様々な経験が作品に反映されている。

彼女はその人生の中で4度にわたり結婚と離婚を繰り返した。1937年、"Til mit døde barn"が *Hvild Hvede* 誌に掲載されデビュー。その後、その雑誌編集者であった Viggo F. Møller と結婚することとなる。1939年には“本当の女性らしさ”をテーマにした詩集 *Pigesind* を出版する。1941年、一人目の夫と離婚。同年には二人目の夫で、経済学を学んでいた Ebbe Munk と結婚する。1942年、*Lille verden* が出版される。1943年、長女 Helle を出産。しかし、1945年に二度目の離婚をすると、同年には三人目の夫、医者の Carl R. と結婚する。彼との間には 1946 年に儲けた長男 Michael の他に、養女 Trine を迎えた。1947年に出版された *Blinkende Lygter* では、記憶とうつ病がテーマにされた。そして三人目の夫とも、1950年に離婚。翌年、1951年に最後の夫となる Victor Andersen と結婚する。4人の中でも彼との結婚期間は最も長く、1951年から 1973 年までの 20 年以上に渡って結婚生活が続いた。1954年に二男 Peter を出産。彼女はその後も数多くの作品を残したが、1967年に *Barndom* と *Ungdom* を発表したころには精神疾患を患っていた。そして最後の夫と離婚してから 3 年後、1976 年に睡眠薬の大量摂取により自ら命を絶った。

今回扱う詩は Ditlevsen の詩の中でも比較的初期のものであり、しっかりと韻の踏まれているこの詩は、多くの音楽家から注目されている。1946年には、Hugo Alfvén によりコンサート曲 *Saa tag mit Hjerte* が作曲される。また最近では、Michael Bojesen によって、より素朴でオルタナティブな女声コーラス曲 *Så tag mit hjerte* が作曲されている。

作品解釈

1. 訳について

作品の解釈へ移る前に、授業でご指摘いただいた訳の表現について言及しておく。その際、筆者が以下の二点を強く意識して訳しているということをご理解いただきたい。まず、この詩の持つメロディー性についてである。複数の作曲家により曲を付けられ、多くの人に親しまれていることからも分かるように、この詩は非常に柔らかで流れるようなリズム

を持っている。実際に口ずさんでみても、なんとも形容しがたい心地よさとともに、ことばが意味するもの、感情、情景がするりと身体に流れ込むような魅力がある。日本語という全く異なる表現方法を用いる以上、このリズムをそのまま変換することは不可能であるが、ゼミの皆さんのお力をお借りして、思いつくかぎり最良のかたちに訳したいと考えた。そしてもう一つ、訳していく際に注意したのが、なるべく簡単な表現を用いるということである。原文の中でも、比較的身近で日常的に使われるような単語が用いられている。文法構造も非常にシンプルである。こういった読みやすさ、馴染み深さというのも、この詩の心地よいリズムの形成に一役買っていると思い、文のかたちやことば選びに特に留意して訳している。以上の二点をふまえてどう日本語に訳したのか、"hjerte"を例にして見ていただきたい。

詩のタイトルにもある"hjerte"を、最終的に漢字で「心」と訳した。理由はいくつかあるが、第一に読みやすさを優先したことである。当初、平仮名で「こころ」としていたのは、タイトルを和訳し「わたしのこのこころを」と表記した際の、丸っことしていて、かつ、流れるような視覚的美しさ、視覚で捉えながらも聴覚に訴えるような平仮名のやわらかさに魅力を感じたからである。そしてなにより、この詩の中でもっとも重要なポジションにあるであろうこの単語を、「心」という漢字一文字にしてしまうのに若干の申し訳なさを感じたのである。「こころ」という三つの音に対して「こころ」と三文字をあてられるのは日本語の持つ美しい機能であり、この詩にこそこのかたちが相応しいと考えたのだ。しかしながら、平仮名ばかりだと読み難いというのはもっともあるし、目で読むのにつまずけば、せっかくこだわったリズムも崩してしまいかねない。試しに漢字で表記してみたが、特に強い違和感もなく、周りの平仮名ともうまく調和していると感じたため、素直に漢字で表すことにした。おそらく「心」という漢字が、視覚的にもシンプルでやわらかな形をしていることがうまく作用しているのではないかと感じる。文全体を見ても、綴りが出て読みやすくなったように思う。

さらにこの詩には、もう一つの魅力があると筆者は感じている。それは、この詩を眺めた時の視覚的な美しさである。四つの連に各三行ずつ同じように割り振られ、その行一つ一つを見るだけでも、音としてのリズムが感じられるような形をとっている。特に各連の最後でハイフンを用いたあたりはそれが顕著である。しかしながら、前述の二点を優先したことで、日本語訳を視覚的に整えられなかつたことを非常に残念に感じている。これは筆者の能力の至らなかつた点として反省し、今後に生かしたいと思う。また今回、原文と訳を1ページにまとめるために、日本語訳に余計な改行が入ってしまっていることをここでお詫びしたい。

2. 詩の持つリズム

前項でも述べたように、この詩においてことばのリズムは非常に重要な魅力の一つである。まず、一つ目の特徴として、同じリズムを持ったフレーズが短い周期で次々に繰り返されている点が挙げられる。例えば第一連では、一行目と二行目をそれぞれ真ん中で区切り、4つのフレーズに分けることができる。アクセントをつけるとそのリズムが分かりやすい。

Så 'tag mit 'hjerte / i 'dine 'hænder
men 'tag det 'varsomt / og 'tag det 'blidt

各フレーズでほぼ同様のリズムが形成されている。このように同じリズムを繰り返すことで、詰まるところなくさらさらと流れるようなリズムを生み出している。またこれに関連して、同じ表現が一つの行の中で連續して繰り返されている点にも着目したい。第二連の一・二行目を参照されたい。

Det slår så roligt, / det slår så dæmpet
for det har elsket / og det har lidt

太字にした部分では、各行ごとに全く、あるいはほぼ同じ表現が使われている。リズムに關しても、第一連とまったく同様のかたちをとっている。同じリズムを細かく繰り返すうえで、同じ表現を用いるのはもっともシンプルで有効な方法である。しかしそれ以上に、これだけ短い周期で同じ表現が用いられていれば、読み手は否応なしに各フレーズの共通要素を意識することとなり、ほぼ強制的にと言っていいほど同じリズムで読んでしまうだろう。

さらに着目したいのが、先ほど4つに分けたフレーズのうち最後のフレーズのリズムである。他のフレーズでは、末尾が2音節の単語で終わっているのに対し、4フレーズ目だけは1音節の単語である。これだけ均整のとれたリズムが続いている中で、急に短い単語になれば、今まで流れるように続いたリズムは自ずとそこで途切れてしまう。しかし、それこそがこの詩の狙うところであると筆者は感じる。その先に続く三行目を参照されたい。上の2行とは明らかに異なるリズムを持っている。ハイフンを用いながら、表現自体も幾分シンプルなものが用いられている。ぱっと読んだだけでも、ひときわ目を引く部分である。筆者は、この最後の行こそ、Ditlevsen がこの詩で伝えたいことであると考える。二行目の最後でリズムを断ち切り、一呼吸おいてから、改めて最後の行に入ることで、読み手の眼、耳、心にしっかりとその印象を焼き付けることができる。つまり、4フレーズ目の

変則的なリズムは、最後の行を強調する役割を負っているのだ。

しかし、これらの法則がしっかりと当てはまるのは第一・二連だけで、第三連から少しずつ崩れ、第四連では逆にリズムをとりにくいかたちさえ取られている。さらに第四連に関して言えば、他の連では二・三行目の発音が[id]で終わっているのに対し、[aj]という発音で終わっている。他の連と比べても、第四連だけ特殊なことからすると、この連に特別な何かが込められているではないかと感じる。

3. 詩の解釈・最後の連

この詩に登場するのは、「わたし」と「あなた」である。初めの一一行目で、”Så tag mit hjerte i dine hænder”と始まるところから、「わたし」と「あなた」で構成されるこの詩の世界が広がる。この”mit hjerte”とは「わたし」の心臓であり、こころであり、なによりも「わたし」自身である。Ditlensen の作品の多くに彼女の人生経験が反映されていることからも、この「わたし」とは Ditlevsen であるととらえてもよいだろう。この詩が発表されたのが、一人目の夫と別れ、二人目の夫との新たな生活を始めたばかりの頃だということを考えると、「あなた」とは新たな夫 Ebbe Munk であるともとらえられる。だとすれば、その夫に対して、むき出しの心臓を、繊細な心を、ありのままの自分をすべて「あなた」に委ねます、という Ditlevsen の決意を感じる。

前項では最後の連の表現上の特異性について話したが、実際に何が込められているのかを読んでいきたい。この連では、過去形と現在形がはっきり使い分けられている。それにより Ditlevsen と二人目の夫との結婚を起点として、彼女自身のこれまでとこれからを表しているのではないかと考えた。つまり第一・二行では Ditlevsen が二人目の夫とのあいだに新たな「愛」を見出す以前、第三行ではそれ以降のそれぞれの時期における彼女の「心」の様子を描いている。第一行では強く誇り高い心、そして第二行では喜びに満ちた心の様子が描かれている。しかし「愛」を得たのちの第三行では、その心が壊れてしまいかねないと語られているのである。つまり、強くて満ち足りた心でさえも壊しかねない「愛」の危うさ、影響力の強さがこの連では表されているのである。そしてこういった危うさを示したうえで、彼女は”men kun af dig”と詩の最後を締めている。つまり、そういうった影響は「あなたによってのみ」もたらされるものであるとすることで、自分にとって「あなた」がどれほど重要で大きな影響を及ぼすものであるのかを示すと同時に、そんな「あなた」が唯一無二の存在であるということを強く簡潔に表しているのである。

Ditlevsen は Ebbe Munk との結婚の前に、Viggo F. Møller との結婚・離婚を経験している。愛によって得られる喜びや平穏だけでなく、同時にもたらされる不安や悲しみといつ

たものを含めて「愛」を語るこの作品には、普遍的な「愛」を見出すため、自身の経験を通して「愛」というものにしっかりと向き合う Ditlevsen の詩人、表現者としての姿勢を見ることができる。そしてその結果、そのままの自分、「心」そのものを相手にたくすことが「愛」のかたちであり、「愛」のもつ危うささえ「あなた」が「わたし」にとって重要であることの証であると詠っているのである。

まとめ

このレポートを書いている間、事前に聴いていた Michael Bojesen 作曲の女声合唱曲 *Så tag mit hjerte* がずっと頭を離れなかった。もちろん彼が付けたメロディの良さもあるのだが、Ditlevsen の書いた詩の魅力、流れるようでいて、ぐっと染み入るようなことばとリズムの魅力に強く惹かれ、このようなかたちでレポートを書くに至った。普遍的な愛のかたちを、シンプルでありながらリアルに表現しているところが、この詩の大きな魅力であり、多くの人々に親しまれている所以であろう。それだけに、この愛を詠った Ebbe Munk との結婚生活がわずか4年のうちに幕を閉じてしまったことは、なんとも皮肉な運命である。そして、それでも新たな夫との結婚を繰り返す Ditlevsen の姿に、執念にも似た、愛と幸せへの憧れを感じずにはいられない。

テクスト

<http://tosommerfugle.blogspot.jp/2012/02/tove-ditlevsen-sa-tag-mit-hjerte.html>

参考文献

1976. *Om Tove Ditlevsen*. København:Forum

<http://www.denstoredanske.dk/>

Finn Jørgensen & Kristen D.Jørgensen の詩

井上みゆき

Sensommervise

(出典 : *Højskole Sangbogen* 1982)

夏の暮れの歌

Æbler lyser rødt på træernes grene,
høsten går ind.

木々のりんごは紅く輝く

Går igennem skoven ganske alene,
stille i sind.

摘みとりに
たつた一人で森のなかをゆく
心穏やかに

* Gyldne farver og sensommerbrise
fylder hjertet med vemodig musik,
går og nynner en sensommervise
fjernet fra byens larmende trafik.

* 染まる黄金(こがね)よ 夏のおわりに吹く風よ
心に溢るる哀しいメロディ
夏のおわりの歌を口ずさむ
町の喧騒を遠ざけて

Sommerbrisen danner krusning på søen,
mystisk og sort.

夏のおわりに吹く風は小波(さざなみ)を
湖(うみ)にたててゆく神秘的な漆黒で
ムクドリたちの群れは空高く湖(うみ)の上を舞う
そしてすぐに遠ざかる

Stæreflokke svæver højt over øen -
snart tager de bort.

* 染まる黄金(こがね)よ～

* Gyldne farver...

Duft af brænderøg blandt brunlige
bregner,
blåsorte bær.

茶色っぽいシダ、

Stille summen mellem blade som
blegner -
aftnen er nær...

藍色の実から木々の香りが立ち込める
朽ちた葉たちが優しくささやく
もうすぐ陽が暮れる...

* Gyldne farver...

* 染まる黄金(こがね)よ～

Modne rønnebær bag dybgrønne grene
rødt titter frem -
Går igennem skoven ganske alene -
nu må jeg hjem!

熟れたななかまどは深い緑の枝陰に
のぞき見えるは深緋色
たつた一人で森のなかをゆく
さあ、我が家に帰らなきや!
(井上みゆき訳)

作者紹介 : Finn Jørgensen (1936-), Kristen D.Jørgensen(1939-)

この作品は Finn Jørgensen と Kristen D.Jørgensen の 2 人による共同作品である。この 2 人は共に学校教師として教鞭をとっていた。歌詞を担当した Finn Jørgensen は高校教師として働くほか、作曲家、作詞家、教科書作家、漫画家と幅広く活躍している。曲を担当した Kristen D.Jørgensen はデンマーク語、演劇、絵画、音楽と幅広い教科を教えるほか、音楽学校で教鞭をとり長年にわたって子供たちの合唱をリードしていた。この 2 人は今回扱う “Sensommervise” だけでなく、他にも多くの作品を協力し出版している。

出典紹介 : *Højskole Sangbogen*

デンマークで最も一般的な歌集である。1894 年に学校歌集として出版され、それから 18 回の刷新を経て今に至る。デンマークの国民学校、Folkehøjskole ではこの歌集の曲が頻繁に歌われており、実際にデンマーク人に親しまれ、愛用されている詩集である。デンマーク語を中心とした北欧言語の歌に加えて、ドイツ語、英語、フランス語の歌なども収録されているが、第 17 版では北欧以外の曲を除外する動きが見られた。第 18 版では再び取り入れられ、今現在は国際色豊かな歌曲が収録されている。今回扱う詩はこの *Højskole Sangbogen*『学校歌集』のなかの 1 曲であり、1 年の情景を歌った歌曲を集めた章の「sensommer (晩夏)」の部分に収録されている。

作品解釈

1. はじめに

この詩はデンマークの学校教師 2 人によって “デンマークの情景を歌う歌曲” として生まれた作品である。デンマークの美しい風景を描いたこの詩を解釈するにあたり、まずこの詩は情景を描いた詩であって、それ以上でもそれ以下でもないことを確認したい。作品が作られた状況、作者から得られる情報からみて、「作者の考え」や「情景を通して実際にこの詩が伝えたかったもの」など、描かれた情景それ以上のものを求めるのはナンセンスであると思われる。そしてこの歌曲がデンマークにおいて広く親しまれている点にも注目したい。実際に筆者がデンマークの国民学校にいた頃、この曲はデンマーク人のあいだで非常に人気があり、頻繁に歌われる曲のなかの 1 つであった。ネットでも名前を検索にかけただけで個人の独唱からピアノやバイオリンによる演奏、グループによる合唱など、非常に多くの動画ページがヒットし、この曲を楽しむことができる。そのため今回の解釈では「情景を描いた詩」として、この詩がデンマーク人に喚起させる豊かなイメージを中心に推測を進め、解釈に臨んでいきたいと思う。

2. 解釈

この詩は *Højskole Sangbogen* 『学校歌集』のなかで「Året (1 年)」という章のなかの「sensommer (晩夏)」の部分に収録されている。長く暗い冬を過ごす北欧の人々にとって夏は太陽の輝く魅力ある季節であり、そこには我々日本人以上に特別な思い入れがある

と考えられる。実際に「Året (1年)」の章のなかでも、夏は「tidlig sommer (初夏)」「midsommer (真夏)」「højsommer (盛夏)」「sensommer (晩夏)」の4つに分けられ、各時期を特徴づける歌曲が分類されてまとめられている。今回扱う“Sensommervise”(夏の暮れの歌)は題名からもわかるとおり、晩夏にあたる季節を表現した詩である。輝く夏も終わりにさしかかり、秋に入るまでの短い間を歌ったこの詩は、最初から最後まで韻がきちんと踏まれており、リズム感のある作品になっている。

さて、この詩の内容を見ていくにあたって、特筆すべきはその色彩の豊かさである。色彩に関する単語の登場回数は非常に多く、「紅く輝くりんご」、「湖の神秘的な漆黒」、「茶色っぽいシダ」、「藍色の実」、「熟れたななかもどの深緋色」、「枝葉の濃い緑」、そしてサビの部分で何度も歌われる「Gyldne farver (金色)」というように、たった4連とサビのなかにこれだけの色彩表現が入っている。りんご、シダ、実など、ひとつひとつは季節的に秋の入り口を連想させる風景描写がなされているが、そこに暗さはあまりない。各所にちりばめられた色のイメージはかわるがわる読者の描く風景に色をつけ、非常に鮮やかな情景を彼らのなかに仕立てあげることに貢献している。また、デンマークで暮らす人々にとっては馴染み深い情景が描かれていると考えられ、色のイメージは日本人である我々以上に容易くできるのではないだろうか。今回はそういった部分で色がとても重要な役割を占めていると感じたため、作品中の風景に馴染みのない日本人にも少しでもデンマーク人の思う色と同じものが描けるよう、色彩の訳には非常に注意を払っている。

こうした色彩表現のなかでも、最も気になるのがサビの部分で何度も繰り返される「Gyldne farver (金色)」である。何度も登場するこの色は「Gyldne farver og sensommerbrise (金色と夏の終わりの風)」とあるように、作品中に付随する対象が見当たらない。この金色が何の色を指すのかは読者の想像に任されているのである。紅葉した葉、麦、金色の光が注ぐ日暮れなど、このイメージには選択肢が存在する。デンマークでは紅葉した葉は赤色よりも黄色に変わるものが多く、「金色」という言葉で表現するにはふさわしいであろう。秋の収穫を控え金色に変わる麦は「夏の終わりの風」という言葉からも、風にそよぐ美しい姿をイメージできる。また、日暮れのイメージは第2連のムクドリの群れを追う視点で空に目がいっていること、第3連では夕方になる描写があることから想起させられるものとして考えられる。筆者が思いついたのはこの3つであるが、実際デンマーク人のなかではたった一つのイメージに集約するのかもしれないし、筆者が考えた以上のイメージが多数存在するのかもしれない。作品そのものに表記されていない以上答えはないが、気になるところである。

これまで色彩に目を向けてきたが、この詩にはこうした視覚的な要素以外にも情景をより具体的に感じさせる描写が存在する。この作品で登場回数が最も多い「夏の終わりの風」は夏から秋に移り変わるあの時期の風、温度を、そして「木々から立ち込める香り」は森に立ち入ったときの独特の匂いをイメージさせ、上手く五感に訴える描写となっているのではないだろうか。また、視覚、触覚、嗅覚と美しい描写が連なるなか、聴覚に訴える風景描写が存在しないこともこの詩のひとつの特徴であるだろう。そのため鮮やかながらも

全体的に非常に静かなイメージが広がっているのである。これは鮮やかな夏と静謐さをもった秋との間に位置する「夏の暮れ」を実に上手く表現しているといえるだろう。また、これはこの詩に出てくる唯一の人物の「心に溢るる哀しいメロディ」が、題名でもある「sensommervise（夏のおわりの歌）」その曲自身であることを暗に示しているようにも思われる。

この詩はほぼ全てが自然風景の描写によるものであるが、内容としては「たった一人で森のなかをゆ」き、「陽が暮れ」、「我が家に帰」る、というストーリー構成が成されている。では、ここで出てくる「一人」とは一体誰のことを指しているのであろうか。筆者は、これはこの詩を読む読者自身であると考える。この詩を読む多くの人が自分が主人公となって「たった一人で森のなかをゆく」ことで豊かなイメージを膨らませ、そこにそれぞれに思いを重ねながら美しい晩夏の季節に浸れるのであろう。

テクスト

Højskole Sangbogen 2009

参考文献

http://lager.dansksang.dk/forfatter/finn_jorgensen.htm

http://www.dr.dk/skole/Musik/123_sange/20101125101153.htm

Pia Tafdrup の詩

鹿倉 麻未

A

Du kaster et A
jeg ser det lyse hvidt
og griber en sten

Spørg stjernerne
om deres alder
og blodet størkner
i sine årer

Du kaster et A
jeg griber en sten

Alger og koraldyr
kapslet ind i kridt
jeg sover min ursøvn

Jeg står på en vej i tørke og sol
dit skyts flyver omkring mig
sten efter sten skingrer
ubønhørligt gennem luften

Jeg rammes og vågner
genkendt af mørket
dit ansigt midnat
identificeret

Tæller årtusinder frem
og vokser frysende
til ét med min drøm.

A

あなたが A を放つ
白く光るのがみえる
わたしはひとつの石を手にする

星々にたずねよ
その齢を
血潮が固まる
あなたの血管の中で

あなたが A を放つ
わたしはひとつの石を手にする

藻と珊瑚
白亜に封じ込められ
わたしは原始の眠りにつく

わたしは乾きと日照りの道に立っている
あなたの銃がまわりを飛んでいる
石は次々うなりをあげながら
避けがたく飛んでくる

わたしは撃たれ目覚める
闇に知らされた
あなたの顔は真夜中
誰なのかつきとめられた

幾千年をかぞえ
成長し冷え固まる
わたしの夢によってそれへと

(出典 : KRYSTALSKOVEN 1992)

(鹿倉麻未訳)

DET FØRSTE BOGSTAV

ひとつめの文字

Jeg ønsker dit had blæst væk
— eller mit
ønsker stilhed
som det første bogstav i alfabetet
er stille

Jeg ønsker de giftige skygger visket bort fra
dit ansigt
at den inderste sol må skinne igen

Jeg ønsker et hemmelige sprog mellem os
ét der kan standse den krig vi har ført
din tro mod min

ét der kan lukke min sår og give mig min
sovñ tilbage

Jeg er for dig, elskede
hvad du er for mig

Jeg ønsker et sprog
hvor to floder løber sammen
uden at spørge hvorfra
eller hvortil

Stilhed som træer der vokser.

あなたの憎しみが吹き飛ばされれば良いのに
——わたしのでもいい
静寂がほしい
アルファベットの最初の文字みたいに
静かな
そのいやな陰があなたの顔から拭いさられれば
良いのに
心の奥底の太陽が再び輝きだすに違いない
わたしたちの間に秘密の言語があればいいのに
それは私達の起こした戦争を止められるから
わたしへのあなたの信頼——
それはわたしの傷口を塞ぎ、眠りを取り戻してくれるものだ
わたしはあなたのために居る、愛するひとよ
あなたは私のための何なのだ
言語がほしい——
共に流れる二つの川のような
どこからくるのかとか
どこへいくのかなんて訊ねることのない
静寂は樹のように育まれゆく

(出典 : KRYSTALSKOVEN 1992)

(鹿倉麻未訳)

作者紹介：Pia Tafdrup (1952-)

Pia Tafdrup(ピア・タフドロップ)は、デンマークの女性詩人・作詞家である。コペンハーゲンの裕福な農家のもとに生まれ、幼いころから詩作に親しんで育った。1977年にはコペンハーゲン大学にて芸術学の修士号を取得している。彼女の詩はシンプルな語彙で構成され一見すると読みやすいように思われるのだが、抽象度が高く、暗喩が多く含まれ難解である。生と死、光と影、音と静寂、細胞や血、大地、水、鳥、太陽、月など具体的な事物や一般的な名詞を借りて、身体と心、人生の探求、万物のつながりなど、あらゆる観念を巧みに表現する点に特性があり、アイデンティティへの問題、外界と内界の調和、生と死など、現代に象徴的な多くのテーマを提示しているといわれている。これまでに出版された詩集は11冊だが、著作は詩だけでなく、『山中の死』(1988)、『地球は青い』(1991)など戯曲作品やダンス用台本の『ヴィソの町』(1999)などもある。デンマーク現代詩アンソロジーを2冊編集し、1989年には、デンマーク文学アカデミーのメンバーに選ばれた。1911年にNordic Council's Literary Prize in 1999、2006年にはSwedish Academy's Nordic Prize in 2006を受賞、2001年には、Knight of the Order of the Dannebrogに任命され、詩集はすでに25カ国語に翻訳され、現代デンマークを代表する詩人の一人となっている。

作品解釈

*KRYSTALSKOVEN*は全部で5章56篇の詩から成る詩集である。詩の形式には特に一貫性はなくほとんどが自由律をとり、長さはだいたい70~100語程度である。語彙は比較的平易で意味はとりやすくなっている。詩集全体に目を通すとある特徴に気がつく。同じ単語が幾度となく用いられているのである。最も頻繁に使われるのが“et træ=木”と“en stille=静寂”、“et sprog=言語”の3つで、そのほかには“stjerne=星”や“himmel=天”など空に関連するものや昼と夜、生と死などの対称語、光の明暗を表す表現が多い。ほぼすべての詩に天候や植物など自然に関する言葉や言語や生死など観念的な言葉が合わせて用いられている。自然の事物や現象を観念的なものの表象として象徴させ抽象度を高めている。これらが多義的にはたらき強い異化をもたらし詩的効果を生み出す源になっている。1抽象的な語が詩集全体を通して何度も用いられ重層的に重なり合うことによって詩どうしに関連性が生まれている。一篇の詩だけでは意味が閉じず、複数の語によって詩と詩が重ね合わされ、縫い止められていく。ある一つの抽象な言葉、たとえば“stilhed=静寂”をタイトルにもつ詩があり、その詩が他の詩に含まれる“stilhed”的象徴を担って、詩を解くための鍵の役割をする。また“stilhed”という詩もまたその他多くの象徴的な言葉によって紡がれ、詩集の中におさめられているその他の詩に意味が託されている。部分が全体に還元され一冊の詩集が完成される。象徴的な言葉のイメージを通して、新たな次の詩へと言葉や詩の意味が相互に定義し合いながら樹木の枝葉のようにのびていき三次元的な広がりをみせるのは、どこが始まりなのかどこが終わりなのか分からぬが個別に検討してゆけばそれぞれに関連性が見出される——いわゆるリズーム構造状の複雑系を成している。

“KRYSTALSKOVEN=クリスタルの森”のタイトル通り、各詩が一本一本の樹木であり、集まって一つの森=詩集を構成している。風、光、空気、水など透明な=KRYSTALなイ

¹ “共示義の問題を取り上げてみよう。詩的言語の特徴は、ある語の表示義（その語がじかに指示するもの）だけではなく、共示義、すなわちそこから連想される一群の意味全体をも伝えることだ。この点で、詩的言語は法律や科学の言語とは異なっており、後者のほうは厳密な表示義めざして、余分な共示義を削ぎ落そうとする。一般に、法律言語や科学の言語は意味を抑制しようとするのに対して、詩的言語は意味を増殖しようとする。”（『詩をどう読むか』 p.290）

イメージを持つ言葉が錯綜し、それぞれの詩を構成する一つの言葉の対岸に別の詩が透けて見える。ひとつひとつの言葉はまた他の詩をのぞくための窓となり、光をあてる角度によってまるでクリスタルのように、きらきらときらめきをみせる。今回はこの *KRYSTALSKOVEN* の中から “A” と “DET FØRSTE BOGSTAV” の関連する二つの詩を選び、比較を交えながら詩集全体をふまえた上で部分的な解釈を試みることにした。

“A”について

この詩は、詩集の冒頭におさめられている始まりの詩である。口語詩で 7 つの短い連から成る。第 2 連と第 6 連では韻を踏んでいるがその他の連では見られない。詩集全篇を通して詩の語調は冷静で落ち着いた印象をもつ。この詩には 2 つの主語が登場する。“jeg=わたし” と “u=あなた” である。“jeg” は自己性を表し、“du” はその対外である他者性を示す。第 1 連の 1 行目で “du” から投げてよこされた無形態の “et A” を “jeg” が手で掴む。手の中をみると、そこには一つの小石がある。他者が放った「A」が自己に届くと実体をもって小石へと変化をしてしまっている。この詩がテーマとするのは「コミュニケーションと言葉」の関係である。発話とは意識の領域でのたらきである。感情や意味といったものははじめ言語化されていない状態で無意識下にある。発話するためには、いったん意識の階層に抽出しそれを言語化しなければ成らない。「A」は、“du” のもつ無意識が意識の階層に反映されて発せられた言葉を示しているのだが、“jeg” が手に掴んだときに小石と変質してしまっていてそれを再び意識に還元することができなくなっている。“du” と “jeg” の間のコミュニケーションは破綻していることが隠喩されている。それを象徴するように何かが冷えかたまるというイメージに象徴される。第 2 連の血潮が血管の中で固まるという現象や続く第 3 連の藻や珊瑚が堆積し押し固められ白亜=石灰石になるという現象、最終連での何かが成長し凍って「ét」へと成る現象。これら 3 つに共通するのは、どれも非常に長い、悠久ともいえる時間を経て有機的な物が無機的な物へと固まっていくイメージだ。循環する血潮や生物である珊瑚や藻、そして何か。それらは不可逆な形へ変質してしまっている。第 4 連で “jeg” は “ursøvn=根源、原始の眠り” につくのだが、第 5 連にて示される夢の内容は、日照りのなか道に立ち尽くし “du” の銃が身の回りを飛びまわって石を撃ちつけてくるというまるで悪夢のようなものである。続く第 6 連で “jeg” は目覚め、“du” の顔の闇があることを認める。最終連では幾千歳を数え、何かが “min drøm=わたしの夢” を携え成長して “ét” へと冷たく固まっていく現象が示されている。“ét” は第一行の “et A” の省略形であると考えられる。第 1 連の 1 行目に出でてきた “et A” から最後でまた同じ “et A” にたどり着く循環が生まれている。“min drøm=わたしの夢” —— すなわち無意識の世界が長い時間をかけて “et A=言葉” のなかに還元されていく。この詩の中においては言葉とは人間の意識の結晶のようなものとして捉えられている。“et A” と明確に示すのではなく “ét” として指示をぼかした曖昧さから最後の語 “drøm.” の後に音がこだまして余韻を生み出している。「コミュニケーションと言葉」の関係から浮上してくる「言葉と自己」の関係が最終連でぼかしつつも示されていて、この詩集全体が言葉と自然や現象、自己といったテーマを持ち、続くページの詩でそれらがさらに展開されることを始まりの詩として暗示しているのだ。

“DET FØRSTE BOGSTAV”について

この詩は 5 章あるうちの 3 章目、ちょうど詩集の真ん中あたりに配置されている詩である。“jeg” から始まるいくつかの文章を文節ごとに区切った自由律の形式をとっていて、とくに韻を踏んでいる様はみられない。この詩はこの 4 行目の “det første bogstav i alfabetet = アルファベットの最初の文字=A” がこの詩の始まりの詩 “A” を想起させ、また詩全体の意味をとっても “A” との関連が深く、この詩集がもつ特殊な構成をよく反映しているので比較の対象に選ぶことにした。この詩にも 2 つの主語 “jeg” と “du” が登場する。

“A”よりもより「コミュニケーションと言葉」の関係性へ焦点があてられている。この詩では、“Jeg ønsker=～があればいいのに、～がほしい”が何度も繰り返されるが、これは望むものがいま手元にないということ意味している。つまり “jeg” はいま、“du” の間に “den krig=争い、戦争”を抱えている。“du” の顔には “had=嫌悪” や “dit giftige skygge=嫌な影”が浮かび、心の奥底はどんよりと曇った状態になっている。対する “jeg” も “sår=傷”を負っていて、眠りを奪われている。これらはすべて2人の間に言葉がないことによって引き起こされている。そこで “jeg” は、“et hemmelige sprog=秘密の言葉”を望んでいる。それがあれば “du” の “inderste sol=心の太陽”は “må skinne igen=再び輝きだし”、“jeg”に対する信頼は回復し、“stilhed=静寂”をもたらすであろうと “jeg” は考えている。そしてその “jeg” が望む “sprog=言葉”とは、また、“to floder løber sammen=共に流れる大河”的ようなものであり、望む “stilhed=静寂”とは “det første bogstav i alfabetet=アルファベットの最初の文字=A”のような静けさであるとしている。始まりの詩 “A”において、“du”の放つ “et A” は “en sten=石” へと変質してしまって、“jeg”を擊つ、硬く冷え固まつたものでしかなく、“du”の意識の領域で発せられた言葉は不可逆で破壊的になってしまっていた。そこで、“jeg” は “to floder løber sammen=共に流れる大河”的ような言語を望んでいる。どこからくるのか、どこへ向かうのか尋ねることのない河であり、起源も終着点もない。この2つの水流は意識と無意識を表象している。現象から生まれるのか、言語から生まれるのか定かでなく、またそれがどう還元されるかもわからない自己と意識の関係を解いて、交わることはなくゆったりと寄り添って滔々と流れしていくばかりの水流を新しい言語の象徴としている。そしてその大河の水脈の恩恵を受け、光を浴び、樹木のように安寧や静寂が育まれていく。“A”と同じくこの詩も、最後の一行 “Stilhed som træer der vokser” が多分に意味を含み、最後の “vokser” が広がりと余韻を残し、また別の詩へと連なっていく。

まとめ

意味が閉じられず一つの詩が別の詩へと開かれていく。Tafdrup がこの “*KRYSTALSKOVEN*=クリスタルの森” という詩集で取り組んだのは、言葉と自然、現象や自己、他者の関わりを自然の事物や現象に表象を借りて抽象的に観念的な世界を視覚的に表現することであった。視覚的であるのに、物理的な法則の世界からはずれた想念の次元での出来事を扱っている。普段は言語活動の領域に浮上することのない無意識の世界を可視化することによって意識の階層に持ち上げている。一辺倒な決まりきった解釈というものを拒むかのように一つ一つの言葉に多義性をもたせる傾向はまさに現代的な詩の特徴であり、1990年代、ポストモダンの時代に、人間と言語、コミュニケーションと言語、現象と言語の危機が示唆されている。現象学的な観念を扱いながらも体系的になりすぎず、実存を兼ね備えながら高い抽象性や象徴性を活かしている、いわば詩が詩である必然性を達成しているともいえる作品である。

テクスト

Tafdrup, Pia. 1992. *KRYSTALSKOVEN*: Gyldendal København

参考文献

『詩をどう読むか』テリー・イーグルトン著 川本皓嗣訳 岩波書店 2011年

Pia Tafdrup official <http://www.tafdrup.com/>

Den Store Danske

http://www.denstoredanske.dk/Kunst_og_kultur/Litteratur/Dansk_litteratur/

Efter_1940/Pia_Tafdrup

Jens Peter Jacobsen の詩

川原知巳

Landskab

風景

Stille, du elskede kvinde!

静かに、愛しい人よ！

tyst må vi træde, vi to.

我々はふたり、静かに歩まねばならない

Der sover en sange her inde

歌は眠る

i skovens natlige ro.

森の夜の平穏の中に

Stille er vover og vinde,

波と風は音もなく

tavs er hver sangfuglemund,

鳴鳥は口を閉ざし

tiende kilderne rinde

静かな泉が湧き出る

blankt over mossede bund.

苔に覆われた底にきらきらと

Månestrålerne spille

月光が

tyst mellem bøgene frem,

ブナの木々から静かにこぼれ

langs ad stierne stille

静かな小道に沿って

blunder en lyslig bræm.

明るい境界がまどろむ

Sølvskyen selv der oppe

銀色の雲が羽を広げて休み

højt over træernes toppe

木々の上方から

skuer den lyttende ned.

耳を傾け見下ろしている

Stille er vover og vinde,

波と風は音もなく

tyst må vi træde, vi to.

我々はふたり、静かに歩まねばならない

Der sover en sange her inde

歌は眠る

i skovens natlige ro.

森の夜の平穏の中に

(出典 : *Danske Lyriske Digte 1875*)

(川原知巳訳)

作者紹介 : Jens Peter Jacobsen (1847-1885)

Jacobsen (以下、ヤコプスンとする) はデンマークの小説家、詩人でありダーウィンの翻訳・紹介に寄与した植物学者でもあった。デンマーク文学界における “Det Moderne Gennembrud” (近代的突破) という文学史上の革新運動を担った一連の作家の中心的存在である。主な作品に長編小説 *Fru Marie Grubbe* (『マリーイ・グルベ夫人』1876) や *Niels Lyhne* (『ニルス・リューネ』1880) などがある。

彼は、1847年にユラン北部の港町 Thisted に、船長および石炭商の息子として生まれ、子どもの頃から植物学への才能を發揮した。1863年にコペンハーゲン大学に入学し、植物学を専攻する一方、詩作も行っていた。20歳頃に信仰の危機を迎える、キルケゴー、聖書、ハイネなどの読書遍歴と様々な葛藤の末、無神論者となる。1872年 *Mogens* (『モーンス』) を発表。また多年にわたる藻類の研究をまとめ、大学より金牌を受与される。しかし沼や川での無理な採集がたたって、この頃から胸を病むようになる。ヤコプスンは作品の中で神に反抗して詩作と恋愛で人間性を高揚させようとし、生きる根拠と目的を失いつつ信念を曲げない人物を創造したため、一部の人から “無神論者の聖書” と呼ばれた。その後もいくつかの作品を発表し、1885年に結核のため38歳の若さで死去した。

彼の作品のテーマはアイデンティティー、性、夢などに関するものであり、その思考は今日にも受け入れられている。彼の作品の言葉は、非常に刺激的で美しさにあふれたものであり、彼は可能な限り正確にまた客観的に人間の心理を研究し描きだそうとした。彼の詩は、抽象主義的で優雅な主題が、比較的長い詩では韻を踏まず、短い詩では韻を踏むという傾向をもって、リズミカルに読まれる。彼の作品は繰り返し読んでこそデンマーク語の可能性を真に感じることができると言われ、彼はデンマーク文学界における誇りとされる人物である。

作品解釈

この作品は全体を通して、題名通り「風景」を描いた詩である。きれいに韻の踏まれた美しい言葉は読み手の想像を膨らませる。またそうして描かれた「風景」は特に静けさを強調したものであり、詩の中には何度も静けさを表現する語句が登場する。

まず詩の始まりでは、

“Stille, du elskede kvinde!

tyst må vi træde, vi to.”

(静かに、愛する人よ！)

我々はふたり、静かに歩まねばならない)

という様に、恐らく愛する恋人への呼びかけがなされている。この導入によって読み手は、これから描かれる静かで美しい風景を二人で見ているのではないか、あるいはこれから見

るのではないかと想像できる。

そして第二連と第五連で繰り返されるのが、
“Stille er vover og vinde”
(波と風は音もなく)

である。第二連では後の“rinde”と、第五連では“inde”と韻を踏ませるために倒置されおり、この詩において非常に印象的な部分である。

さらに、

“tavs er hver sangfuglemund,
tiende kilderne rinde”
(鳴鳥は口を閉ざし、
静かな泉が湧き出る)

“tyst mellem bøgene frem,
langs ad stierne stille”
(ブナの木々から静かにこぼれ、
静かな小道に沿って)

という部分にも、普段鳴いている鳥が静かに黙っていたり、活発なイメージのある「湧き出る」という動詞の主語を「静かな泉」としたりすることによって、どこまでも静けさの強調が見られる。なお、第一連と第五連に出てくる“Der sover en sange her inde”（歌は眠る）という表現の“en sange”は鳴鳥の鳴き声である考えられ、鳴鳥が口を閉ざすという表現と関連している。

また、静かなという意味の直接的な修飾語ではないが、“at sove”（眠る），“en ro”（平穏），“at blunde”（まどろむ），“at hvile”（休む）など、静けさを連想させるような語句も多い。次に、題名である“Landskab”（風景）に注目したい。この詩はまるで絵や写真のようであるが、中でも特に第四連から第五連にかけて描かれる場面が印象的である。第四連では、ブナの木々の間から月光がこぼれ、小道に光が射し、例えば静かな風が吹くことなどによって木々がゆれ、同時にその光もゆらゆらゆれて見えることを、「まどろむ」と表現しているのだと解釈した。つまり“en bræm”（境界）は、月光を指しており、小道のうちの照らされている部分とそうでない部分の境界という意味を込めて“en bræm”と表現したのではないだろうか。そして第五連は、そのブナの木々の下から上方を見上げた視点で描かれている。木々の上方に雲と月がたたずむ様子を、ここでは月光に照らされて銀色に見える雲が、羽（下から見上げた時、月の羽の様に見える木々のことである。）を広げて休み、静けさの中で、耳を傾けながら見下ろしていると表現している。雲が羽を広げるという比

喻によって雲のふわふわとした軽さを感じることができる。

詩は、第一連と第二連の一部を繰り返して成る連で終わり、最後まで安らかで穏やかなこの詩の印象が変わることはない。

まとめ

この作品における静けさとは、心の静けさ、つまり心の平穏、安定などを意味しており、それらをこの詩の中に美しい自然描写として表現しているのではないかと感じた。言葉の響き、リズム、またそれによって生み出される想像上の風景全てが美しく、ヤコブセンの詩作におけるテクニックを堪能するにふさわしい作品である。

テクスト

Jacobsen, Jens Peter. 1875. *Danske Lyriske Digte*.

参考資料

<http://www.litteratursiden.dk/analyser/jacobsen-j-p>

<http://denmark.dk/en/meet-the-danes/great-danes/writers/jens-peter-jacobsen/>

http://da.wikipedia.org/wiki/Jens_Peter_Jacobsen

Per Højholt の詩

権田奈津美

November

Ikke at sneen falder og det er ret koldt vejr
blæsende, plager mig o min solsort.
Heller ikke egentlig at den lille sø
under kirsebærtræerne tæt ved banen
falmer og fyger til. Sådan er november.
Men at du i morges sad kold i magnolien
som omspændt af ribben et hjerte
pludselig i snetykning eller forfald

11月

雪は降らず、とても寒い日
風が吹き、クロウタドリと私を悩ませる。
小道のそばの桜の木の下にある
その小さな湖は見えなくなることもなく
流されてなくなることもない。これが11月。
でも君は今朝モクレンの中で冷たく佇んでいた
心臓が肋骨に包まれているかのように
突然、降り積もった雪の中に埋もれているのだろうか、
死にかけているのだろうか

(出典：*Poetens Hoved* 1963)

(権田奈津美訳)

作者紹介：Per Højholt (1928-2004)

1928年7月にユトランド半島のEsbjergで生まれ、人生の大部分をHørbylundeで過ごした。1951年（当時23歳）にデンマークのBiblioteksskole（図書館学校）の試験を受け、それと同時に執筆活動を開始。1966年（当時38歳）まで図書館で働きながら執筆活動を続けていた。

彼は、詩集*Hesten og Solen* (The Horse and the Sun) (1948年)でデビューし、その後1960年代のモダニズムに影響を受けて叙情詩を書き始め、1963年には2作目である*Poetens Hoved* (The Poet's Head) が出版された。以降、*Provinser* (1964年)、*Show* (1966年)、そして*Min hånd 66* (1966年)など次々と出版し、1977年から19年間*Praksis*シリーズという12巻に渡る詩集を書いた。執筆活動を数年間休止した後、*Auricula* (2003年)で活動を再開した。死後に出版された未完成の*Hans Henrik Mattesen·En monografi* (2007年)により広く知られることになる。

また彼は哲学に精通していて、哲学的な問題を皮肉的にユーモアを用いて口語表現する能力に長けており、陽気な文体の作品が多くみられる。全作品は詩から散文までに及び、特に詩の作品を多く残している。

1982年にDet Danske Akademis Store Pris（デンマークアカデミー大賞）、1997年にHolbergmedaljen（Holberg賞）を受賞した。

作品解釈

この作品は1963年に出版されたPer Højholtの2作目である*Poetens Hoved*の中の“November”(11月)という作品である。ここでは、全体を2つに区切って解釈していく。

1~5行目

この部分はほとんどが11月の湖畔の風景を詠った風景描写になっている。しかし、その裏には、「その小さな湖は見えなくなることもなく 流されてなくなることもない。」などに見られるように、あえて冬の風景を否定する形で表現することによって、これから寒くて暗い冬がやってくることへの作者の不安や、クロウタドリを心配する気持ちがうかがえる。また、11月の風景描写の中にあえて暖かくなる時期に綺麗な花を咲かせる桜の木を登場させることによって、これから訪れる長くて寒い冬に対する不安をより一層強めているのではないだろうか。

6~8行目

6行目からは冬の描写にうつっている。ここに出てくる“du”とはクロウタドリのことである。ここでも春に綺麗な花を咲かせるモクレンという花が効果的に用いられている。“som omspændt af ribben et hjerte”は文法的に正しくすると“som et hjerte omspændt af ribben”となり、「肋骨に包まれた心臓のように」という訳になる。ここで作者は、雪に包まれたクロウタドリを肋骨と心臓を用いて表現している。つまり、肋骨は雪を表し、心臓はクロウタドリを表している。作者がモクレンの木々の中に佇んでいるクロウタドリを見たときに、クロウタドリが雪に埋もれている様子が肋骨に包まれた心臓のようにハート形に見えたのであろう。そして最後の2行は、クロウタドリが弱っていく様子を表しており、いずれは死にゆくクロウタドリを見つめながら悲しみに暮れている作者の様子がうかがえる。

まとめ

11月とは徐々に寒くなり、風も吹き、冷たい雨が降る時期である。この詩では、作者 Per Højholt 自身は冷たい雨に打たれても、風にさらされても構わないが、クロウタドリが冷たい雨にさらされ、寒さに震えることには耐えられないという思いを詠っている。作者のクロウタドリに対する強い思いが伝わってくる作品である。

参考資料：

<http://calquezine.blogspot.jp/2008/09/from-praxis-8-album-tumult-by-per.html>
http://de.wikipedia.org/wiki/Per_H%C3%B8jholt
http://www.denstoredanske.dk/Kunst_og_kultur/Litteratur/Dansk_litteratur/Efter_1940/J%C3%B8rgen_Per_H%C3%B8jholt?highlight=per%20h%C3%B8jholt

Benny Andersen の詩

櫻木絢子

Årstiderne

Vasketøj vajer for vinden.
Småbørn får knopper på kinden.
Piger blir drillet
og fodbold blir spillet
for nu er det sommer i Danmark.

Dagene falder så dystre.
Skolebørn vil ikke lystre.
Tøj blir forældet
og tårer blir fældet
for efterår er det i Danmark.

Skilsmisser. Dødsfald. Romaner.
Hoste og nedfrosne planer.
Næsen blir dryppet
og tuden blir dyppet
for nu er det vinter i Danmark.

Blomster på eng og i potte.
Banket blir mangen en måtte.
Plæner blir sået
og digte forstået
for nu er det forår i Danmark.

四季

洗濯物が風になびく。
幼子たちは頬におできができる。
女の子たちがからかわれ
サッカーがおこなわれる
デンマークはもう夏だから。

日々薄暗くなる。
小学生らは反抗する。
服が時代遅れになり
涙が流れる
デンマークはもう秋だから。

離婚。死別。小説。
咳と凍った計画。
鼻水がながれ
そして拭われる
デンマークはもう冬だから。

牧草地と鉢植えの花。
皆ドアマットを踏み鳴らす。
芝生が植えられ
詩が理解される
デンマークはもう春だから。

(出典 : *Folkehøjskolens sangbog* 1990)

(櫻木絢子訳)

作者紹介：Benny Andersen（1929-）

Benny Andersen はデンマークで最も読まれ、また歌われてきたモダニズム詩人/作詞家であり、作家、作曲家、ピアニストでもある。

1929 年にコペンハーゲン郊外の Vangede という町で生まれ、10 歳になった時にピアノを買ってもらい、弾くようになった。また、小さいころから読書家で、学生時代にはサルトル、ブルースト、カフカなどの多くの大作を読んだ。後に彼は子供時代を振り返り、読書に没頭したのは自分自身のアイデンティティーを見つけるためだったと語っている。²

1952 年に当時の新文学運動のよりどころだった実存主義の文学雑誌 *Heretica*（『異端者』）³で最初の詩を発表。1960 年に詩集 *Den musikalske ål*（『音楽好きのうなぎ』）で詩人としてデビューした。その後の詩集 *Kamera med Køkkenadgang*（『勝手口のあるカメラ』）、*Den indre bowlerhat*（『山高帽子の内側』）でも成功し、1964 年以降は短編小説集 *Puderne*（『クッション』）や、1992 年に映画化された児童書 *Snøvsen* シリーズを執筆するなどして、作家としての活動の幅を広げた。

彼に国民的詩人としての名声を与えたのは、1972 年に発表した小説 *Svantes Viser*（『スヴァンテの歌』）であった。この作品ではスヴァンテという作詞家のやや悲しい運命が彼の詩とともに綴られたもので、歌手 Povl Dissing との共同制作の音楽テープとともに発売された。物語は独特的構成で、あまり幸せな人生を送ってこなかったスヴァンテという名の架空の中高年男性と Benny Andersen 自身の交流、また、収録されている歌が作られていく過程が描かれている。スヴァンテの詩は現代的ではなく、きちんと韻が踏まれていて、内容には彼自身の憂鬱な考え方や感情、またその時々の人生観が表れている。物語中には 13 篇の詩がスヴァンテの作品として含まれており、そのうちの 4 篇は 1990 年発行の *Folkehøjskolens sangbog*（『ホイスコレ歌集』）に収録された。今回扱う作品”Årstiderne”（『四季』）もその中に収録されている。

1998 年の *Samlede digte*（『選詩集』）では詩に関するすべての記録を破り、13 万部以上発行された。Benny Andersen の作品はまた、2004 年に発行された *Dansk litteraturs kanon*（デンマーク文学カノン）、2006 年発行の *Kulturkanon*（文化カノン）にも選ばれている。

題材の選択においても形式においても彼はきわめてデンマーク的な詩人であり、それゆえに人気も高い。⁴ 彼の詩は優しく巧妙なユーモアとその言葉遊びで、今なおデンマーク人に親しまれている。

作品解釈

Svantes Viser（『スヴァンテの歌』）に収録。古典的な作詞家スヴァンテの作品として書かれているので、4 連すべてでそれぞれ 1・2 行目、3・4 行目に規則正しく脚韻が踏まれている。特に 3・4 行目は全ての連において受動態 (blir -et) で終わっている。第 4 連の 4 行目は”og digte forstået”だが、これは”og digte blir forstået”の”blir”が省略されていると考えられる。また、どの連もほぼ同じ形に統一されている。第 2 連のみ、5 行目が”for efterår er det i Danmark.”となっているのは、他の連と同じように”for nu er det efterår i

² Wikipedia(Benny Andersen: 2012/07/30)

³ 谷口, 1987, p.294

⁴ 早野, 1993, p.265

Danmark.”とてしまうと、メロディーに乗せて歌う時に字余りになってしまい、おさまりが悪いからではないかと思われる。歌う時のことと関連して、一つの行の中で単語の頭文字などの統一も見られる。例えば第1連の1行目では”*vasketøj*”, ”*vajer*”, ”*vinden*”というように頭文字が”v”に統一されており、声に出した時にリズムに乗りやすくなっている。これらも Benny Andersen の言葉遊びではないだろうか。

内容は一連ごとにデンマークの四季を扱っていて、それぞれの 5 行目の春夏秋冬の語がなくても、どの季節のものが推測できそうである。

まず第1連は夏。明るい夏の日に洗濯物が干され、子供たちが外で元気に遊んでいる光景が想像される。はじめは2行目の”*knopper*”を、幼い子らの類がかわいらしく紅潮しているイメージで「つぼみ」と訳していたが、「つぼみ」だと春のイメージになってしまいう意見を頂き、「おでき」とした。

次の第2連は秋。1行目に”*Dagene falder så dystre.*”とあるように、デンマークを含め、北欧の夏は短いため、冬に向かってどんどん暗くなっていく。そんな中で人々の気持ちもセンチメンタルになっていることがうかがえる。

第3連は冬。離婚、死別、咳など孤独マイナスイメージの単語が並び、この連全体で暗い冬を連想できる。1行目の”*Romaner.*”は「短編小説」ではなく「長編小説」の意であることから、長編小説を何冊も読むことができるぐらい、北欧の冬が長く続くことを表していると考えられる。

そして最後の第4連は春。暗く長い冬から一転、牧草地や鉢植え、芝生に緑があふれる明るい季節。2行目の”*Banket blir mangen en måtte.*”から、たくさんの人が家に集まる様子をイメージできる。では4行目の”*og digte forstået*”はどういうことか。作詞家スヴァンテにとって、自分が書いた詩は自分の心や気持ちの表れなので、「詩が理解される」ということはつまり「心が理解される」ということになる。Benny Andersen の作品について「いくぶん変人ながら感動的な登場人物すべてに共通するのは、社会を彼等には制御できない因習の集合体とみなしているところだ。そこで彼等は常にコミュニケーション上の問題、つまり他人の言動の解釈の問題にとりつかれる」⁵ という見方があることから、スヴァンテもコミュニケーション上の問題に関心が高く、相手の言動の解釈について深く考える性質だったと考えられる。そして同時に自分自身のことを相手に解釈されることにも関心が深かったと考えると、冬の間に家にこもり一人で抱え込んでいたことが、春になって人と交流することで解放され、相手に理解されるようになるというように考えられる。

この詩を読んで疑問に思ったのは、なぜ夏から始まっているのかということだった。まず考えたのは、新しいスタートが感じられる春を最後に置くことで、また次の新しい一年がどんどん巡っていく感じを与えたかったからではないかということだ。しかしひでの発表後に指摘を受けたように、詩の内容から見ていくと、違う見方ができることがわかつた。第1連に”*Småbørn*”、第2連に”*Skolebørn*”、第3連に”*Skilsmisser. Dødsfald.*”とあることから、詩全体で人の一生を表しているように考えられる。第4連には”*Plæner blir sået*”とあり、死別の後に、人間ではないが新しい生命の種がまかれている様子としてつながる。またこの流れから”*Banket blir mangen en måtte.*”の理由として、ある家庭に赤ちゃんが生

⁵ 早野, 1993, p.264

まれ、人々がお祝いに駆けつけると想像することもできる。このように見ていくと、この詩はただデンマークの四季を詠っているだけではなく、生命の輪廻も表現していることがわかり、そのために夏から始まっていると考えられる。

まとめ

Benny Andersen の詩は現行のホイスコーレ歌集でも多く収録されており、そのうちの一つに”Svantes lykkelige dag” (『スヴァンテの幸せな日』) がある。その作品も小説 *Svantes Viser* に収められたものであるが、ホイスコーレ留学中にもよく歌い、13 篇のうちで最も有名だと思われる。そんな作品に隠れて存在する”Årstiderne”。はじめは、詩のテーマとしてよくある「季節の移ろい」について書かれているという印象だったが、解釈をしていくうちに、より深い内容であることがわかった。今回は主に *Svantes Viser* についてしか見ることができていないが、彼の作品が長く愛されているのは、巧妙なユーモアや言葉遊びと並んで、登場人物、また Benny Andersen 自身の人間味がじみ出ているところにあるのではないかと感じた。

テクスト

Foreningen for folkehøjskoler I Danmark. 1990. *FOLKEHØJSKOLENS SANGBOG*.

Odense: AiO Tryk as

参考文献・参考サイト

谷口幸男編. 1987. 『現代北欧文学 18 人集』. 東京: 新潮社

ラーセン, ステファン・ハイルスコウ監修. 早野勝巳監訳. 1993.『デンマーク文学史』.東京:

ビネバル出版

Kulturkanon (<http://kulturkanon.kum.dk/>)

Ministriet for børn og undervisning (<http://pub.uvm.dk/>)

Litteratursiden.dk (<http://www.litteratursiden.dk/>)

Wikipedia (<http://da.wikipedia.org/wiki/>)

Jens Fink-Jensen の詩

高尾久美子

I dag kom sommeren

I dag kom sommeren

Med sol og piger

I flagrende skørter

Børn sang og spillede bold

Dansede på det lille torv

Som om det altid havde været sådan

Hvor mange gange

Har jeg ikke forelsket mig i dag

I den grad overrumplet af sommeren

Hvor ofte har jeg ikke bare i dag

Fortvivlet over altings forandring

Trøstet mig ved altings gentagelse

夏の訪れ

今日夏がやって來た

太陽とそして

ひらめくスカートの少女たちと一緒に

子どもたちは街の小さな一角で

踊り 歌い ボールで遊ぶ

まるでずっとそうしていたとでもいうふうに

いったい何度

今日という日に恋しまいとする私に

夏は大きく不意をついてきたことだろう

今日だけではない 私はこれまでいittaiどれだけ

全てのものが移り変わっていくことに落胆し

しかし全てはまた繰り返すと希望をもったことだろう

(出典 : *Nær afstanden* 1988)

(高尾久美子訳)

作者紹介 : Jens Fink-Jensen (1956~)

1956年12月19日デンマークのコペンハーゲン生まれ。

詩人、作家、写真家、作曲家、建築家として幅広く活動中。

主な出版物に詩集、短編小説、児童図書など。

デンマーク国内外の詩集、雑誌、新聞に、詩や短編小説、記事を寄せている。

音楽祭や文学祭、高校、図書館など様々な場所で、詩の朗読と音楽（シンセサイザーやサックス）、スライドショーを組み合わせたマルチメディア・パフォーマンスを行っている。

著書・出版物

Verden i et øje (『瞳の中の世界』) 詩集 1981 年

Sorgrejser (『嘆きの旅』) 詩集 1982 年

Dans under galgen (『絞首台でのダンス』) 詩集 1983 年

Bæsterne (『野獣』) 短編小説 1986 年

Nær afstanden (『隔たりの近く』) 詩集 1988 年 (1999 年にアラビア語訳出版)

Jonas og konkylien (『ヨナスと巻貝』) 児童図書 1994 年 (絵 : Mads Stage)

Forvandlingshavet (『変化の海』) 詩集 1995 年

Jonas og himmelteltet (『ヨナスと空のテント』) 児童図書 1998 年 (絵 : Mads Stage)

Alt er en åbning (『全ては始まり』) 詩集 2002 年

Syd for mit hjerte. 100 udvalgte kærlighedsdigte 詩集 2005 年

Europas vestkyst – en fotorejse fra Skagen til Gibraltar, 旅の本 2008 年

Jonas og engletræet (『ヨナスと天使の木』) 児童図書 2010 年 (絵 : Mads Stage)

作品解釈

4連から成るこの「夏」の詩を、主に2つの部分に区切って解釈する。

まず1、2連目に関しては日本語に翻訳する際なんの問題もない非常に簡潔な文章である。夏の訪れと、それによって街に表れた小さな変化をうたっている。この詩を読むにあたって必要な前提条件は、北欧の夏は突然にやってくるということである。日本の場合、夏というものは春の陽気からじわじわと変化していき、梅雨の時期の蒸し暑さを経て本格的な暑さに突入するものだから、はっきりと「今日、夏がやって来たな」と実感するというよりは「いつの間にか、もう夏だな」という印象の方が強いことだろう。しかしこの詩においては、”I dag kom sommeren”なのである。デンマークで最も良い時期は6月であるともいわれるよう、本格的な夏の季節は6月頃であるが、その直前の5月、前日までの寒さとはうつてかわり夏を感じる太陽の日差しがふりそそぐ日が訪れる。昨日まで続いていた薄ら寒い曇り空から一転した青空の下で、人々は今年の夏の到来をはっきりと確認するのだ。2連目を除いた全ての連にこの”i dag”が登場するのだが、この詩を解釈するにお

いて最も重要な単語のひとつとなっている。街に初めて夏の太陽がやってきたその日、少女たちは防寒用の服を脱ぎ捨て、スカートをはいて外へ繰り出す。家の中で過ごしていた子どもたちは広場で陽気に遊ぶ。6行目の”Som om det altid havet været sådan”(まるでずっとそうしていたとでもいうふうに)とは、子どもたちの新しい季節への適応の早さを表すと共に、次の連から登場する”jeg”(私)との対比にもなっている。

この詩の解釈にあたって最大の(そして唯一の)問題は3連目の”Hvor mange gange Har jeg ikke forelsket mig i dag”的部分であった。初めて訳そうと試みた時、どうして否定の”ikke”がついているのか、デンマーク人にとって夏は喜びの季節なのだから、夏がやってくる日は何よりの楽しみではないのかという疑問をもった。”forelske sig”とは「恋に落ちる」の意であり、直訳すると、「私はいったい何度も、今日という日に恋をしなかったことだろう」となる。ちなみに「～に恋をする」と言う場合、”forelske sig i ~”であり「今日に恋をする」ならば本来は”forelske mig i i dag”と書くべきであるが、詩という特性上、細かい文法は無視されることもありリズム的にも視覚的にもスマートにするため”i dag”的”i”がもうひとつ分を兼用していると考えた。よって授業中にこの部分に対するアドバイスを求めたところ、2種類の意見をいただくことができた。まずひとつめは反語ではないか、との意見だ。何度も恋してきたことを強調するためにあえて”ikke”を使っている、つまり(何度も恋をしなかったことだろう、いや、何度も何度もしてきた)と解釈できるのではないか。もうひとつは、恋に落ちるということを自分の意思でなんとかコントロールできれば、好きになってしまいそうになるのを、あえて我慢してきたという意味ではないか、との意見である。つまり「今日に恋しまいとしてきた」とも受け取れる。どちらも思いもよらなかつた発想であり、そしてどちらも非常に納得のいくものであった。この一見相反する解釈をふまえて日本語訳をつけなおしてみれば、「いったい何度も私は今日という日に恋しましてきたことだろう」が最も適しているように思われる。この訳の裏側には、表面上は素知らぬふりをしながら、心の底では何度も何度も夏の訪れる日(詩の中ではそれが今日である)に恋してきたという意味を込めた。その解釈で進めると、その後がとても読みやすくなる。3連目3行目の”I den grad overrumplet af sommeren”は直訳すれば「夏にはたいそう驚かされた」となるが、あえて恋しまいとする「私」の心を、突然やって来る夏はいつも大きく揺さぶるのだ、といった意味であろう。

それでは何故、「私」はそのような心理になるのだろうか。詩の前半に描かれる子どもたちのように、新しい喜びの季節を素直に享受できないのだろうか。それは「喪失」、もしくは「変化」への強い恐れだと筆者は推察する。北欧の夏は短い。そしてそれだけではなく、昨日は青空と太陽が心地よい一日だったとしても、次の日にはまた曇り空に逆戻りしてしまったりする。それどころか、一日の中ですら、朝は晴れていたのにあっという間に雨が降ってきてしまうかもしれない。喜びや期待はずっと続くものではなく、いつ裏切られるとも知れないものなのだ。その喜びや期待とは、「夏の訪れ」だけにはとどまらない。最後の連において、これまで抑えていた「私」の心情が吐露されている。”Fortvivlet over altions

forandring”(全てのものが移り変わっていくことに落胆し)、つまり恐れるべき変化や喪失は、この世にある物事すべてに付きまとう真実なのである。だからこそこれまでずっと、そういった喪失や変化に自分の心を傷つけられないよう、端から期待しまいしてきたのだと。

もしここでこの詩が終わっていたのであれば、「夏」の詩にはふさわしくないだろう。しかしそうではない。喪失を味わい、しかしそれでも希望をもつことを諦めなかつた全ての人間が持っている知恵がある。それが、最後の行に書かれている”altings gentagelse(全ての物事はまた繰り返す)”である。「変化」と同様に、また「繰り返すこと」もこの世界における摂理なのである。違う面から眺めてみると、失望や喪失にすら、変化は訪れる。つまり喜びだけでなく悲しみもまた、永遠に続くものではないということだ。恐らく期待と失望とは、何度繰り返そうともいつまでたっても慣れることのないものである。

”Hvor ofte har jeg ikke bare i dag	今日だけだはない　私はこれまでいittaiどれだけ
Fortvivlet over altings forandring	全てのものが移り変わっていくことに落胆し
Trøstet mig ved altings gentagelse	しかし全てはまた繰り返すと希望をもつことが”

と書かれるように、「私」はこれまで、物事の移り変わりと繰り返しという事実を全て承知の上で、それでもなお期待、失望そして新たな期待といった、絶え間ない心の変化を繰り返している。そしてこの詩においては、再び希望を持ったところで終わっている。なぜならば、これは「夏」の詩なのだ。夏は喜びの季節である。どれだけ否定しようとも、毎年毎年必ず我々のもとへ訪れる、力強く明るい季節なのである。

まとめ

この詩の前半に描かれているのは夏の訪れと、それを真っ先に享受する無邪気な子ども達の姿である。そして後半は「夏」という喜びを例として、人生における期待と失望、そして子どもから少し成長した「私」がそれに対してどのような視線を向けているのかという心情をうたっている。われわれは自分の子ども時代の夏を思い返す時、楽しかった記憶と共に、なんとも言い表せぬ切なさを抱くことがないだろうか。それはいくら時計を逆さまに回したところで戻ることのできない眩しい季節に対する懐かしさと憧れであり、そしてかつては確かに自分のものであったのに、今では二度と手にできない日々への、尽きることのない渴望であろう。しかし、そのような渴望こそが人生を豊かにする要素であり、常に訪れる新しい変化に対して心を開いていれば、必ずや「大人」としての新たな夏を、喜びで満たすことができるのではないだろうか。

参考

Jens Fink-Jensen Online <http://www.jensfink.dk/>

Halfdan Rasmussen の詩

高畠知里

Fiskestime

Stilhed omsluttet af vigende klarhed.
Rytme.
Tegn som bestandig er kode.
Flygtende billede.
Tøvende som en musik
af forløste skygger.
Glidende former
som intet forestillede.
Mønster på vandring mod nye mønstre.
Drøm.
Flygtige anelse
slettet af vind og strøm.

魚群

引きこもった透明の中の静けさ。
リズム。
絶えず暗号のようなサイン。
消えゆく光景。
音楽のようにためらいがちな
解き放たれた影。
何ものも表さなかつた
滑らかな形。
模様を求めてさまよう模様。
夢。
風と流れに消される
つかの間の感覚。

(出典 : *Stilheden* 1962)

(高畠知里訳)

作者紹介 : Halfdan Rasmussen (1915-2002)

1915年1月29日、コペンハーゲンに生まれる。ロスキレの職業訓練学校と Helsingør の国際学校に在学中に本の世界にのめりこむようになり、彼が読んだ本の作家たちや当時の社会情勢に影響を受け、詩を書き始める。1953年に Ester Nagel という作家と結婚、1973年に彼女と別れたのち、友人 Benny Andersen の最初の妻であった Signe Plenser と結婚した。政治や社会に強い関心を示しており、原爆反対運動や EU 反対運動、アムネスティ・インターナショナルに関与している。1978年に Herman Bangs Mindelegat (Herman Bang 記念賞)、1988年に Det Danske Akademis Store Pris (デンマークアカデミー大賞) を受賞。特に Tosserier (ナンセンス詩) と Børnerim (子どものための詩) という二つの分野で名が知られている。しかし社会批判や戦争といった暗い内容のもの、旅行先のことを記述したもの、さらには歌詞、本なども書いており、彼の活動は多岐にわたっている。明るく楽しいリズミカルな詩が一般的に人気だが、Rasmussen 自身は次のように記している。

Jag skriver sjove digte.

私は楽しい詩を書く。

Jeg skriver også triste.

私は悲しい詩も書く。

De første læser andre folk.

楽しい詩を他のみんなは読む。

Selv læser jeg de sidste.

私自身は悲しい詩を読む。

作品解釈

この詩は *Stilheden* (1962) という詩集に収録されている。この詩集は Rasmussen がグリーンランド旅行について書き記した詩を集めた物なので、“Fiskestime” もグリーンランドでの情景をうたった詩だと分かる。題名の通り、一見魚の群れの様子を描写した詩であるが、他にもいくつかのシンボルが散りばめられている。

はじめに、この詩の軸となる「魚の群れ」という観点から解釈を試みることにする。まず 1 行目では、魚たちがいる環境、すなわち澄んだ水の流れる静かな空間が描写されている。2 行目 “rytme” (リズム) は、魚の群れが一斉に向きを変える不規則な間隔をリズムのように感じているのではないかと思われる。3 行目では、私たち人間には分からない魚の本能的なサインやそれに伴う動きを、暗号のようだと例えている。4 行目では、魚たちの動きや水の流れによって一瞬の光景がすぐさま消えていく様子を表している。また、“billeder” には「絵のように美しいもの」という意味もあることから、その光景がとても美しいということも暗示されている。5, 6 行目では、魚の群れの影が川の底に映って揺らめいている様子を表していると解釈した。7, 8 行目では、群れの形がとても滑らかであることを示している。9 行目では、群れが違う形になろうとするのだが、そのための移動の最中の模様ですら美しいと言っている。10 行目 “drøm” (夢) は後で触れるため省略する。そして 11,

12行目で、このような「風と流れによって消される」魚の群れは、移ろいやすくはかないものだ、と結んでいる。つまり「魚の群れ」というものに限って解釈すると、この詩で描かれているのは魚の群れが澄んだ水の中で泳いでいる様子である。そしてその形や模様、光の反射具合などは風や流れによって一瞬にして消されまた新しくなるという、とてもはかなくも美しいものとして描写されている。

次に、「音楽」という観点に注目したい。この詩の中では“rytme”（リズム）と“musik”（音楽）という関連性のある単語が出てくる。音楽というのもまた、決して後戻りすることなく先へ先へと流れていくものである。常に移ろい変わっていくという点で、Rasmussenは魚の群れと音楽に共通項を見出したのかもしれない。また詩を音読してみると分かるように、一文一文が短くこの詩自体もまるで音楽のように聞こえる。Rasmussenは言葉遊びや響きが良くリズミカルになるような単語のチョイスが得意で、この詩の中でもそれがうかがえる。Rytme, misikという単語、そして詩全体を通しての心地のいいリズム感が、魚の群れの動きが軽やかで美しいものだと印象づける役割を果たしている。

最後に10行目に出でてくる“drøm”（夢）という単語を考察する。夢というのも一瞬にして覚めてしまうはかなくも美しいものだという点で、魚の群れや音楽と共通の部分がある。しかし、夢は私達人間が見るものという点で、今までよりもより現実味を帯びているように思われる。ずっと魚の群れの描写をしてきて、ここにきて「夢」という単語を置く。そして最後に「風と流れに消されるつかの間の感覚」と結ぶことで、Rasmussenは「このように魚の群れは夢のようにはかなくも美しい」と伝えると同時に、「それは私達人間の世界も同じである」ということを言わんとしているのではないだろうか。

また、この詩は文体に特徴がある。文の始まりは名詞か形容詞で統一されており、動詞はほとんど使われていない。一文一文は短くすっきりした印象を受ける。このようなこだわりは、前にも述べたように音楽的要素を取り入れるためという目的もあるが、次から次へと消えては新しくなる感覚を、文体を以って強調する意図もあると思われる。

まとめ

この詩の主題はこれまで述べてきたように、「はかなさ、移りゆくものの美しさ」である。Rasmussenはグリーンランドに赴きキラキラ光る魚の群れを見ているうちに、ちょっとしたきっかけで一瞬にして見え方が変わってしまうそれに感銘を受けこの詩を作ったのではないだろうか。「音楽」や「夢」といった同じくはかなさと美しさのイメージを兼ね揃えた単語を用いることや、文体にも注意を払うことで、この主題はさらに昇華されている。そしてそのはかなさは魚の群れに限らず、私達人間の常にも当てはまる。今というときは二度とやってこないし、何もかもが必ず変化を続けていく。こう書くと一見切なく感じるが、Rasmussenはむしろ移りゆく一瞬一瞬の時はかけがえのない美しいものだと捉えている。変わってしまうからこそ美しい、一瞬だからこそ光り輝いている、そのようなはかなくも美しい世の常をきれいに詠った詩である。

補足

授業中、ここで描かれているのはどのような魚だろうかという話になった。私はこの詩を読んだ時、詩のイメージから群れが形を変えるときに光を反射してキラッと輝く様子が浮かび、日を浴びてキラキラ輝く魚ではないかと想像した。また「風と流れに消される」というところから小さな魚で、場所も海よりも川のほうがイメージに合うと思われた。このことを踏まえ新谷先生に伺ったところ、*løje* という魚が近いのではないかと教えていただいた。*løje* は体長 12~18cm のコイ科で、アルプスより北のヨーロッパに生息している。体は銀色に輝き、きれいな水の池や流れの穏やかな小川の水面近くを群れで泳ぐ、ということであった。確かにこの詩のイメージにぴったり重なる魚であるように思う。

参考資料

http://www.denstoredanske.dk/Kunst_og_kultur/Litteratur/Dansk_litteratur/Efter_1940/Halfdan_Rasmussen
http://www.forfatterweb.dk/oversigt/hrasmussen/print_hrasmussen
http://beta.visl.sdu.dk/urkas/kap15_skoenlitteratur.pdf#search='Halfdan%20Rasmussen%20stilheden'
<http://www.alvilda.dk/kunstner.php?vis=67>

Tove Ditlevsen の詩

中川真麻

GRÆNSE

境界

Efter ethvert
dødsfald
følger
et måltid.

どんな
死別の後にも
訪れるのは
食事

Ingen har
appetit
man kniber
alligevel
en bid ned
og tar en
lille en.

誰にも
食欲はない
それでも
一つまみ
したり
一口とつて
みたり

Enken har
lavet maden
tårer drypper
i suppen
hulkende
undskylder hun
at sværen ikke
er helt sprød.

寡婦は
食事の支度
涙が
スープに落ちる
嗚咽を漏らし
彼女は大目にみる
ベーコンの皮が
カリッと仕上がらないことを

Grænsen er
tynd mellem
det patetiske og
det triviele.

境界は
薄く
熱情と
陳腐の狭間

(出典 : DE VOKSNE 1969)

(中川真麻訳)

作者紹介 : Tove Irma Margit Ditlevsen (1917-1976)

Tove Ditlevsen は、デンマークで最も幅広く読まれる女性作家の一人である。直接的な表現方法や彼女自身の人生を赤裸々に書き記す作品が特徴的で、詩や小説、自叙伝、エッセイや短編集など多岐にわたる著作を 30 作品余り残した。

1917 年、コペンハーゲンに生まれる。労働者階級の近隣に囲まれ幼少期を過ごした。彼女が生まれた当時、父親は消防士として働いていたが、後の不況により失職。主に彼女の幼少期の思い出を占めるのは、母である Alfrida のものが多い。10 歳の頃から詩を書き始め、1932 年より企業に勤める。この頃、彼女の最初の詩 “Til mit døde barn” が *Vild Hvede* 誌に掲載される。最初の本 *Pigesind* (1939) を出版するが、この頃扱うテーマは主に子どもを悩ませる諸問題（虐待、いじめ、変質者など）についてであった。1953 年には、科学、芸術、音楽、文学や演劇の分野において優れたデンマーク人女性に贈られる奨学金制度、*Tagea Brandt Rejseregat* を受賞している。私生活では 4 度に渡る結婚、離婚を繰り返し、1976 年 5 月、睡眠薬の過剰摂取により自殺。58 歳の若さでこの世を去った。

作品の中で扱うテーマはエロティックな問題、愛の喜び、結婚、そして母性。また、家族との関係や幼少時代、彼女独自の経験が作品の背景にある。例えば彼女の幼少期、その頃の友人たちはもっぱら性的な事柄や盗みに興味をもっていた。“Regn” という詩の中で彼女はこう書く。“飲んだくれの男は／怖くなんてないわ／と 私の／友だち／子どもを襲う変質者は／いつも素面。”

彼女自身の人生、経験の数々が堅く伝統的な形の詩に反映されているという点が、Tove Ditlevsen 作品の大きな特徴であり魅力である。

作品解釈

今回選んだ作品は、彼女の作品の中でも後期に発表されたものである。生きていく中で誰しもが経験する「死別」。どんなに辛く苦しい死別という現実に直面しようと、人は自身が生きるために食事をつくり、食べていかなければならない。そんなやるせなさや苦しさを、彼女は第一連の短い言葉で的確に表現していると感じた。恋や結婚、そして別れと人生の悲喜を数多く経験してきた、晩年の作者だからこそ書くことのできた書き出しであろう。

続く第二連では、食欲のない人々が、それでも食卓に並び一口、また一口と手に取る様子が描かれている。この場面の *knibe ned* を直訳の“噛みくだす”とするか、意訳の“一つまみする”とするかでは意見を募ったゼミの皆さんのがんばり割れた。故人を偲び食卓を囲むと聞くと、どうしても日本流の、お通夜の後などに思い出話に花を咲かせ賑やかに故人を送るというイメージが浮かぶ。しかしこの風習は日本独自のものであり、普通であれば故人を偲んだ悲しい食卓、という考え方の方が当てはまると思った。また、*kniber ned* のあとに続く *tar en lille en* “一口取る”との並列関係にも鑑み、最終的には“噛みくだす”と口の中に入れて食べきるまでの表現よりも、控えめに手に取り食べるところの描写だと

いうイメージを強調する“一つまみする”という訳を選んだ。

第三連では場面が変わり、夫と死に別れた女性が悲しみに暮れながら料理を準備する姿が描かれる。女性は涙をこぼしながら食事を用意するが、どうしてもうまく仕上がらない。しかし彼女は、そんな自分の料理の出来映えについて、大目に見ようと考える。料理がうまくいかないことを大目に見る、この箇所も日本語訳に悩んだ。まず彼女がうまく食事をつくれない原因は何か。それは、この詩のメインテーマである「死別」、夫の死であろう。食卓を共にした夫を失ってもなお、いつもと変わらない食事をつくるという悲しみ、それが彼女の食事の準備を邪魔しているのだと考えられる。それでは、うまく仕上がりなかつたことへの感情である *undskylde* はどう訳すのが最も適當だろうか。この箇所も、ゼミでの発表で沢山の意見を頂くことができた。料理がうまくいかないという現実を“受け入れる”、料理の出来を“妥協する”、“仕方がないと思う”、料理をうまくつくることが出来ない自分に“言い訳をする”など。どの訳も元の単語の意味や原文の流れと違和感なく合致するため、言葉の選択には非常に悩んだ。しかし、ここでの *undskylde* は、ただ彼女の妥協、あきらめを表す客観的な言葉ではなく、辛い現実にある自分自身へ言い聞かせている主観的な言葉をもって訳される方がより原文の伝えたい内容に近づくのではないかと考え、変更を加えず“大目に見る”と訳した。この一連の考察により、第三連は食事の準備という何気ない日常の描写でありながら、夫に先立たれた女性の悲しみがひしひしと伝わる連であると改めて感じた。

そして最後の第四連では、この詩のタイトルにもなっている *grænse* “境界”についての言葉が並ぶ。境界とは、薄く、熱情と陳腐の狭間にあると。この最終連は一体どのような意味を持つのだろうか。そこでまず、ゼミでの発表やそこで頂いた意見などを活用しながら、この詩における境界について二通りの考察をした。

この詩における境界の一つ目の意味は、「日常」と「非日常」との境目である。大切な人との「死別」により、それまでその人がいることが当たり前であった日常から、その人がいなくなった非日常の世界を生きていかなければならぬという変化。詩の第三連で食卓の準備をしながら涙を流す寡婦についても、今まで自らの食事を共に食べる夫がいる日常を過ごしていたが、その日常は夫の死により、境界を超えて非日常へと変わってしまったのだと考えられるだろう。この解釈では、死、そして死別こそが、人生の境界線であると考えられる。二つ目の意味は、「当事者」と「第三者」との境界である。夫を亡くした妻は、悲しみの渦中にありますに当事者の立場である。しかしその周りの人々は、悲しみこそするが、その感情にはどこか「かわいそうだ」といった同情のニュアンスが含まれている第三者の立場の域を超えないのではないだろうか。一つの「死別」において、悲しみに直面する当事者と、哀れむ周りの人々と、その二者の間にもまた確かに決定的な「境界」が存在すると言えるであろう。

以上の二つの見解から、この詩における「境界」について自分なりに明確なイメージを持つことができた。それでは最後に、この「境界」が薄く、そして熱情と陳腐の狭間にあ

るという意味について解釈を試みる。この詩の中での「境界」とは、日常と非日常、当事者と第三者という絶対的な違いについての象徴だといえる。しかし、それらの違いは実は非常に近しいものなのでないだろうか。死別という一つの出来事によって残された人々の日常は形を変えるが、しかしそれはまた時間の流れとともに、故人のいない日常として、非日常から日常へと変化していく。つまり死別がもたらす境界は、時の流れとともに薄く、まるでなかったかのように変化していくのである。作者はその過程を、激しさを表す熱情が時を経て薄れ、陳腐なものに変わっていくと表現したのであはないだろうか。

この詩は、死別という人生の苦しみが時の流れとともにその激しさを潜め、まるで傷が癒えるかのように非日常から新たな日常へと変化していく人の感情を、「食事」という人間の生活になくてはならない大切で身近なテーマを用いて的確に表現した作品である。人生の悲しさや辛さに人一倍敏感であったであろう繊細な作者、Tove Ditlevsen だからこそ書くことの出来た作品なのではないかと感じた。

参考資料

books and writers. <http://www.kirjasto.sci.fi/calendar.htm>

Uffe Harder の詩

中川麻琴

Disse dage

頃日

Disse dage

最近の日々は

brænder med en klar gul flamme

明るく黄色い火をともし燃えている

som bladbunker

生気に満ちた昆虫たちのうごめく

fulde af knitrende insekter

葉っぱの山のように

Disse dage

こうした日々は

kommer ikke igen

もう二度と戻ることはない

let gå du nu

軽やかに

din vej

自分の道をゆく

Ordet står malet på asfalten

アスファルトに描かれた言葉が

løber gennem kloakernes

下水管の下にはりめぐらされた

underjordiske karnet

貯水池網のあいだを駆け抜ける

danser

車がはきだす突風の中で

i udblæsningsgassen fra bilerne

ダンスする

Disse dage

最近の日々は

brænder med en klar gul flamme

明るく黄色い炎をともし燃えている

varmen

暑さが

bliver stærker

ましてゆく

(出典 : *I disse dage* 1997)

(中川麻琴訳)

作者紹介 : Uffe Harder (1930—2002)

Uffe Harder は 1930 年、コペンハーゲンに生まれる。コペンハーゲン大学で英語とフランス語を学び、1957 年に文学修士号を取得。1973 年にデンマークアカデミー会員となる。1960 年代の主要なモダニストのうちの 1 人である。デンマークの作家協会、デンマークペンクラブの会長をつとめた。

1954 年に *Sprængte diger* (『浸食された堤防』) でデビューして以来、叙情的な才能が開花していく。“正と負の不安定な性質” “というものが、彼の作品を通してのテーマとなっていいる。

彼の洗練された言語スタイルは、モダニズムとシューレアリズムの影響を受けており、世界および日常の不条理さに対して驚くべき、ときには感嘆すべきヴィジョンを持つことにより確立された。

彼は印象派やコブラグループなど自分の関係する現代の伝統絵画を通して、詩そのもののやその世界を解釈した。

また彼は翻訳家や評論家としてもひろく活動していた。『マダムボバリー』をはじめとする数々の傑作、またフランス語、スペイン語、イタリア語、ラテンアメリカ、さらにアフリカ諸言語の作品を翻訳しており、なかでも Samuel Becket の本を翻訳した。

1960 年のデンマーク語翻訳者連邦名誉賞、1961 年のルイジアナ賞など数々の賞を受賞している。

作品解釈

この詩は dage に向けて書かれた詩であり、作品中の du は dage のことをさすと考えられる。brænde (燃える)、klar gul flamme (明るく黄色い炎)、varm (暑さ)、などの表現からとても暑い様子がうかがえ、夏の詩であると想像できる。この詩は全体を通して、毎日が足速に過ぎ去っていってしまうことを語っていると思われる。第一連は Disse dage という表記があり、比較的内容のとりやすい連となっている。夏の日々はまるで生気に満ちた昆虫たちがうごめく葉っぱの山のように炎がめらめらと燃えているかのように暑い。

第一連のこの前半部分は「陽炎」の現象について述べたものであると推測できる。陽炎とは夏の暑いときに、コンクリートの上の空気がゆらゆらとして見える現象のことである。

夏の暑い直射日光にさらされたコンクリートは、時に 50 度以上の高温となり、接している空気が膨張して軽くなり上昇気流となる。この上昇気流は周りの空気と密度が異なるため、その接触面で光が屈折して景色がゆらゆらゆれているように見える。これらのことからも、夏についての詩であると考えられる。また、第一連の下から 2 行目の”du” というのは”dage”をさしており、過ぎ去った日々はもう二度と戻らない(disse dage kommer ikke igen)。日々、つまり du は自分の道(din vej)をすすんでゆく。日々は戻ることなくとても足速にすぎさっていってしまうということがここからも読みとれる。

第二連からも日々がどんどんとすぎさっていく様子が書かれている。

Ordet は、既知形になっていることと作者が dage にたいして詩を書いていることから、

dage を示すと考えられる。下水管のしたにはりめぐらされた貯水池網のあいだを駆け抜け
るというのも、日々が足速に過ぎ去っていく様子をあらわしていると思われる。

また、第三連の表現も同じように日々の経過の速さがあらわされている。

第四連は第一連の前半の繰り返しであり、第五連の「varmen bliver stærker（暑さが増
していく）」という表現から夏の暑い様子がうかがえる。

1年の半分が寒くて暗い冬であるデンマークに住む人々にとって、夏は公園や庭などの野外で飲み物を楽しみ、バーベキューやピクニックをして過ごす特別な季節である。冬とは対照的に日照時間が格段と長くなり、7月頃は夜の10時頃まで太陽がぎらぎらと照り付ける。さらに、草花がぐんぐんと成長し、町並みにみずみずしいアクセントをあたえる。

日本のように春を経て徐々に暖かくなる感じではなく、昨日まで寒くて暗い冬だったのである日突然ピカッ！と夏がおとずれる。この限られた季節を満喫しようと、多くの人々が野外で活動をはじめる。また日本のじめじめとした夏とは違い、デンマークの夏は湿気が少なく、空気もきれいなので太陽の光がクリスタルのように美しく降り注ぎ、今までとは一変した世界がおとずれる。このように、デンマーク人にとって夏という季節は特別なものである。そのように素晴らしい時間ほど経つのが速く感じられるものである。

Uffe Harder は、素晴らしい夏を楽しみながらも、日々が足速に過ぎ去っていくことにわずかな寂しさを感じながらこの詩を書いたではないだろうか。夏がおとずれて、日々が過ぎるのがいつもより速く感じられる。第五連の表現から、この詩が書かれたのは夏の終わりではなく、これから夏が始まろうとしていることがわかるので、この詩には楽しい夏への期待も込められているのだろう。

また日々が足速に過ぎ去っていく、というのは時間がどんどん経過していく、つまりものごとが移りかわっていくということにもとれる。これは、彼が作品全体を通してテーマとしていた「ものごとの不安定さ」というものに通じるのではないだろうか。

まとめ

これまで述べてきたことから、この詩は夏の日々について書かれたものであることがわかる。デンマーク人にとって非常に特別な季節である夏の日々が足速に過ぎ去っていく様子を、Uffe Harder は夏を楽しみにしながらもどことなく寂しいような気持ちを感じつつこの詩を書いたのではないだろうか。夏という明るく輝いた日々のことを書いたにもかかわらず、私はこの詩からどこかもの悲しげな印象をうけた。それは移りかわる日々に対する Uffe Harder の思いが、この詩にこめられているからであろう。

参考文献

Gyldendal. Den Store Dansk.

Ole Sarvig の詩

西村侑子

Regnmaaleren

雨量計

Regnmaaleren
med den flade kumme
staar i juninattens bløde regn
paa sin søjle,
fyldes af vand,
mens mørke popler suser
og bevæger deres grene.

平らな水鉢の
雨量計が
6月のやわらかな雨の中
柱の上に佇んでいる
雨水でいっぱい
濃色のポプラがザワザワと音を立て
その枝を揺り動かす中

Natten kan høres viden om.
Regnen gir genlyd i verden.
Der er tomt. Der er stille.
Alle skabninger sover.

夜は遠くまで聞こえる
雨は世界中で共鳴している
それは空虚で静か
全ての生き物たちは眠る

Poplerene suser.

ポプラがざわめく

Inat er haven vaagen
og fuld af vellugt.

今夜は庭が目覚めていて
香りに包まれる

Ganske stille
som en flad kumme
i juniregnen
vil jeg løbe fuld
af vilje
inat.

とても静か
平らな水鉢のように
6月の雨の中
今夜わたしは
決意に満ちて
流れ出す

(出典：*Grønne digte* 1943)
(西村侑子訳)

作者紹介 : Ole Sarvig(1921 - 1981)

Ole Sarvig はデンマークの作家である。詩歌作家として最もよく知られているが、その他にも小説やエッセイなどの作品も残している。1921 年にコペンハーゲンに生まれ、1940 年からコペンハーゲン大学で芸術史を学んだ。海外で生活することが多く、ノルウェーやフランス、スコットランドを旅し、特にスペインには 1954~1962 年の間住んでいた。この旅は彼自身が人生を通して追求した独創的ではないキリスト教信仰の影響を受けており、宗教詩人とも呼ばれる彼の執筆に大きな役割を果たしている。

彼は青年期（1940 年代）の詩の中で戦争時の集団的不安や不確かさを捉え、自身のエッセイや小説を通してその感情を深めてきた。また彼の作品に共通するのは独特的な美学で、それは現代の絵画や新約聖書のモチーフ、また自律の中で築かれていた信念などが影響している。彼の初期の作品、特に 1944 年に発表した詩 “Jeghuset” は、全ての世代のデンマーク詩人にとってとても大きな刺激となった。

今回扱った作品 “Regnmaaleren”（「雨量計」）は、1943 年に出版されたデビュー作 *Grønne digte* に収録されている作品で、Kulturkanon（文化カノン）に選ばれている。その他にも Emil Aarestrup の勲章（1965）や Det Danske Akademis Store Pris（1967）を受け、1972 年には Det Danske Akademi のメンバーとなった。

一生の間に複数回結婚と離婚を繰り返すが、1980 年に最後の妻ヘレンが亡くなると、その翌年に自殺しこの世を去った。

作品解釈

一見すると雨量計の水鉢に水がたまり、最後には溢れ出してしまうという情景を切り取った詩のように思えるが、私はこう解釈した。

- ・全体のテーマ：戦争や社会に対する苛立ちやもどかしさと、そこからの変化。
- ・全体の解釈：雨量計の水鉢を自身の心や感情の器として表現し、そこに雨水が徐々にたまつてき、最終的に水鉢がいっぱいになり水が流れ出していくことで、何か Sarvig 自身の感情の変化を表しているのではないか。
- ・各連ごとの解釈：

《第一連》

雨水でいっぱい（4 行目）→徐々に感情が高ぶってきている様子。

ポプラがザワザワと音を立て（5 行目）→自分を取り巻く社会か、もしくは自身の心の中の騒がしさを表現。

《第二連》

夜=静かなイメージ

雨は世界中で共鳴（8 行目）→感情が世界中に広がり、高まっていく様子。

全ての生き物たちは眠る（10 行目）→感情の落ち着きを表現。

《第三連》

ポプラがざわめく（11 行目）→いったん落ち着いたように思えた感情や社会が、再び騒

がしくなる。

『第四連』

今夜は庭が目覚めていて 香りに包まれる（12、13行目）→少し前向きな、何か変化を連想させるような表現。そこから決意へと。

『第五連』

とても静か（14行目）→第二連と似たような表現だが、その時とはどこか感情に変化が見られる。

今夜わたしは 決意に満ちて 流れ出す（17、18、19行目）→ついに感情が溢れ出し、何か行動を起こすことを決意した様子。

私がこのように解釈した理由は、1.「彼の作品の特徴」と、2.「この詩が書かれた当時のデンマークの時代背景」である。まず一つ目の「彼の作品の特徴」だが、彼は風景やある場面を切り取って詩にするタイプの詩人ではない。彼がよくテーマとして扱うのは、芸術、宗教、認識、抽象理論、現代性・モダニズムなどで、その点から、この詩を初めて読んだ時に感じた、ただの風景描写の印象からはだいぶ発展した解釈にたどり着いた。また二つ目の「この詩が書かれた当時のデンマークの時代背景」だが、これはこの詩の全体のテーマとして戦争や社会に対する感情を挙げた理由である。この詩が発表されたのは1943年で、当時デンマークは第二次世界大戦下にあった。ここで、このRegnmaaleren（『雨量計』）という詩と、当時のデンマークで起きたレジスタンス運動との関わりを考えていきたい。

【デンマークにおけるレジスタンス運動】

1940年4月9日にドイツ海軍はオスロほかノルウェー西海岸6か所とコペンハーゲンを含むデンマーク領諸島数か所に上陸し、陸軍機械化部隊がスレースヴィの国境を越えてユラン半島を北上した。ドイツと不可侵条約を結んでいたデンマーク政府にとって、ドイツ軍の急襲は寝耳に水であった。ヒトラーはデンマークに対して、大戦継続中ドイツの保護を与えること、並びにドイツ軍当局はデンマークの内政に干渉しない旨を通告し、スタウニング内閣は流血を避けるために同日のうちに降伏するほかなかった。こうして、デンマークは形式的には政府や行政が継続し中立政策も維持されて、ナチス以外の政党も活動を認められることになった（「モデル保護国」）。デンマークの被占領国としての特殊な位置の中で特に象徴的ともいえるのが、7月に起きたアスラングと呼ばれる抵抗活動である。これは一地方都市で始まった国家の合唱運動が全国に広がった事件で、その後さまざまな地方青年組織の設立につながった。デンマークでレジスタンス運動が活発になったのは、1943年8月29日にドイツ軍当局が国家緊急事態を宣言し、警察が解体され占領軍による軍政がしかれて、「ノルウェーの状況」と呼ばれる事態が生じてからだった。これは自国政府が存続する中での抵抗への国民のためらいを吹き飛ばす効果をもたらした。9月18日には各地に散在していたレジスタンスやサボタージュグループを指揮する「自由評議会」が形成さ

れ、全国民組織に発展した。このように遅れてレジスタンスが本格化したデンマークであったが、共産党までも含んだ組織を基盤にその活動はノルウェー以上に広い範囲の国民の参加を可能にした。さらにレジスタンスの動きが強まると、ドイツ側は一般市民を巻き込むような破壊活動を行い、1944年6月には首都で夜間外出禁止令をだし、巡回隊はテロを実行した。大戦の終盤にはデンマークのサボタージュ活動も軍事的力をさらに強め、1945年5月には来るべき連合軍の進撃に備えて4万5000の地下軍が編成され、スウェーデンに亡命したデンマーク人部隊も待機していた。しかし、ドイツ占領軍は英米軍がデンマークに上陸する以前にほとんど抵抗なく降伏し、デンマークは解放された。終戦時には活動家の犠牲者は850人を上回る数となった。

このような当時の社会背景と、作者紹介でも述べたが彼自身、青年期（1940年代）に戦争に関する作品を多く残していることから、この“Regnmaaleren”（『雨量計』）という詩にも、そういった戦争への強い気持ちが込められているのではないかと考えた。私がこの詩の中で最も気になったのが、「今夜わたしは 決意に満ちて 流れ出す」という最後の部分で、認識やアイデンティティをテーマとした作品も書いているという彼の性格等も含めて考えてみると、なにかレジスタンス運動への参加、またはドイツに対する抵抗の意志を固め、実際に行動に移そうとしているような印象を受けた。しかし、実際にはこの詩が収録されている *Grønne digte* が出版されたのは1943年で、この詩自体が書かれたのが何年なのかはわかっていない。デンマークでレジスタンス運動が活発になるのは1943年以降のことなので、この詩を書いた時に Ole Sarvig がレジスタンス運動に何かしらの形で関わっていたか、もしくはこの詩が当時のデンマーク国民のレジスタンス運動に何かしらの影響を与えたかどうかなどは定かではない。また、彼がデンマークのレジスタンス運動に参加していた、というはっきりとした記述も見つけられていない。もしかすると、この詩とレジスタンス運動とは何の関係もないのかもしれない。しかし私は、この詩の内容、そして当時のデンマークの時代背景、そして何より Sarvig の作品の特徴や性格を考慮して、この詩の「今夜わたしは 決意に満ちて 流れ出す」という最後の部分が、レジスタンス運動への何らかのかたちでの取り組みを示唆しているのではないかと考えた。そしてこの力強い言葉から、彼の母国への想いを感じたような気がしたのだ。

参考文献

- 百瀬宏、熊野聰、村井誠人 著.1998.『新版 世界各国史 21 北欧史』.東京：山川出版社
http://www.denstoredanske.dk/Kunst_og_kultur/Litteratur/Dansk_litteratur/Efter_1940/Ole_Sarvig
http://da.wikipedia.org/wiki/Ole_Sarvig
<http://www.forfatterweb.dk/oversigt/zsarvig00/zsarvig02>

Naja Marie Aidt の詩

橋本詩織

Jeg vågnede tidligt

Jeg vågnede tidligt
og gik ned til den lille lund
og der var spor efter heste og fugle.
Hjemme tikker søvn og stilhed
som befrielser
men jeg vågnede tidligt af en drøm
hvor du var så tung som de modne
sagtmodige køer der ligger i klynger
på marken. Det har ikke altid været sådan.
Engang var der hav her.
Engang kendte jeg ikke din stemme,
den svingende resonans.
Jeg vil gerne bo et øde sted til vinter. Jeg vil lære at betvinge et dyr.
Det er ikke mere muligt at drukne i glemsel og minder.
Og nu er det bare sommer.
Insekterne snurrer
og alle de gule og lilla blomster nikker, blæsten
synger.

(出展 : *Samlede Digte* 2008)

朝早く目覚めて

朝早く目が覚めて
小さな森へ降りていくと
馬や鳥の跡があった。
家では眠りや静けさが時を刻む
解放として
でもわたしは、夢から早く覚めてしまった。
夢の中であなたは重かった、まるで野原で群れている
成熟しておとなしい
牛みたいに。いつもはそうじゃなかつたのに。
かつてここには海があった。
かつてわたしはあなたの声を知らなかつた
あの揺れる響きを。
冬には人気のないところに住みたい。動物を手懐けてみたい。
そうすれば、忘却と記憶に溺れることも、もうないだろう。
そして今はただ夏なのだ。
昆虫が飛び回り
黄色や紫の花はそよぎ、風は
歌っている。

(橋本詩織訳)

作者紹介：Naja Marie Aidt (1963 -)

1963年12月24日、教員であった父親の仕事の関係で、当時両親が住んでいたグリーンランドのアシアートに生まれる。ナヤが7歳になると、一家はデンマークのコペンハーゲンに引っ越す。両親が離婚すると、ナヤは母親に引き取られ、デンマークのベスタブロにて新しい父親と3人で暮らすことになる。思春期にはデンマーク共産主義青年団にて親友のLine Knutzon(現在は劇作家)と共に活動をする。そして1982年、18歳の若さでミュージシャンのMartin Heurlinとの間に第一子Frederikをもうける。続いて1989年にCarlとEmilを、その2年後にJohanを出産。

1991年、初めての詩集 *Sålænge jeg er ung*(『私が若いあいだに』)を出版する。翌1992年に詩集 *Et vanskeligt møde*(『難しい出会い』)、1993年に小説 *Den blomstrende have*(『花盛りの庭』), *Vandmærk*(『透かし』)、1994年に詩集 *Det tredje landskab*(『第三の風景』)、と連続で作品を発表。私生活では離婚後すぐに映画カメラマンEgil Bryldと結婚、2003年に第四子Zakariasをもうける。2005年に子供の名を題名にした児童書 *Zakarias*(『ザカリアス』)を発表、またデンマークの人形映画 *Strings*(『ストリングス～愛と絆の旅路～』)の脚本を担当した。2006年に発表した小説 *Bavian*(『ヒヒ』)で、2007年にKritikerprisen(批評家大賞)、2008年にNordisk Råds Litteraturpris(北欧評議会文学賞)を受賞。2008年以降はニューヨークのブルックリンに拠点を移す。自然描写や、人生における人格の変化を大きなテーマとする点などが特徴とされる。

作品解釈

・ 透明感

この作品を選んだ理由の一つに「透明感」がある。まず題名と書き出しである“*Jeg vågnede tidligt*”(朝早く目覚めて)と森の描写が、清々しい早朝の様子を表している。いつもより早く起きた時は、さっぱりと晴れ晴れした気持ちになり、どこからか希望が湧いてくるものだ。特に *der var spor efter heste og fugle* (馬や鳥の跡があった)から、前日の夜まで雨が降り、馬車の轍や鳥の足跡ができたと推測される。そして、深夜のうちに雨が上がって土が乾き、跡が残ったのではないだろうか。雨上がりの晴天は、普通の晴天よりも美しい。植物などについた水滴が太陽の光を反射し、また雨が空気中の汚れを落とし澄んでいるからだと言われている。デンマークでは日本よりも雨量が少ないが、雨上がりの晴れ晴れとした様子は同じであろう。

そして *Hjemme tikker søvn og stilhed* (家では眠りや静けさが時を刻む)から、今主人公が出てきた家は、空ではなく、誰か(家族もしくは恋人)が中で眠り続けている様子が伺える。老人ならば早朝に目が覚めるのも普通であろうが、青少年の成長を描くことが多い作者の傾向から、少なくとも主人公は若者であると言える。若者ならば、家族よりも早く目が覚めることはあまり多くないはずだ。滅多にない事だからこそ詩になったのではないかだろうか。題名から読者に与える印象も違ってくる。もしこれが「朝早く目が覚めて」であったら、ネガティブで怠惰な印象を与え、読み手もあまり読みたいと思わないだろう。

ではなぜ早く起きてしまったのか。その理由はおそらく夢の内容にあったといえる。

・ 夢の世界

en drøm / du var så tung som de modne / sagtmodige kører ligger i klynger / på marken (夢の中であなたは重かった、まるで野原で群れている / 成熟しておとなしい / 牛みたいに。) の部分は、夢の描写ということでとても比喩的である。まず「あなた」を主人公の恋人であると想定する。あるいは drukne i glemsel og minder (忘却と記憶に溺れる) から、別れたばかりの恋人かもしれない。「あなた」がまるで牛の群れのようにどっしりと重く、「わたし(主人公)」は押しつぶされるように感じ、耐え切れず目が覚めてしまう。「野原で」というところから、「あなた」はのびのびとした長閑なところにおり、「おとなしい」から、「あなた」はわざと「わたし」を潰そうとしているわけではなく、無意識の行為だと言える。「成熟した」はこれまで一番重い状態を、「群れている」は、一匹、つまり一つの原因ではなく、複数の原因によって重くなり、また複数あるため逃げ場がない様子を表している。牛である理由は、酪農が盛んなデンマークでは牛が身近な存在であり、その見た目や従順さからのどかさや安定の象徴とされているが、逆に無知や愚かさをも象徴していると言える。「あなた」の無意識的な圧迫に疲れてしまった「わたし」を表現している夢なのである。

・ 現実の問題

Engang kendte jeg ikke din stemme (かつてわたしはあなたの声を知らなかった)、drukne i glemsel og minder (忘却と記憶に溺れる) から、「あなた」と「わたし」はかつて知り合いではなかったが、親しい関係あるいは恋人関係にあったと読み取れる。そして「溺れる」という表現から、その記憶はあまり良いものではなく、むしろその記憶に現在の「わたし」が縛られている印象を与える。だからこそ、その状態から解放されたい (som befrielser 、解放として) という願いがあるのではないか。

Jeg vil gerne bo et øde sted til vinter. Jeg vil lære at betvinge et dyr. (冬には人気のないところに住みたい。動物を手懐けてみたい。) から、「わたし」は新しい環境で新しい生活をする未来の展望を持っている。現実逃避ともとれるが、気持ちを切り替えるためには住まいや環境を変えることも必要なだろう。

しかし Og nu er det bare sommer. / Insekterne snurrer / og alle de gule og lilla blomster nikker, blæsten / synger. (そして今はただ夏なのだ。 / 昆虫が飛び回り / 黄色や紫の花はそよぎ、風は / 歌っている。) の部分では、現在の夏の風景に不満はない様子が見える。住居を変えたいのはあくまでも冬にかけてであり、「わたし」も他のデンマーク人と同様に夏を楽しんでいるようだ。現在が夏ということは、半年先の予定を立てることになる。突発的な逃亡欲なら近い未来に実行に移すはずなので、「わたし」は至って冷静に現実の問題に対処しようとしていると言えよう。

・ 世界観

森や野原、夏の風景などの自然描写が素晴らしい、何度も同じ表現を繰り返すのでなく簡潔な言葉が作品の雰囲気を形成している。女性作家ならではの優しい世界観をまとめて

おり、早朝という設定がそれをさらに強調している。他の登場人物の存在をおわせながらも、終始主人公一人にスポットライトを当てていて、語り手が一人称の小説のようである。「あなた」が誰なのか、そしてどういった関係なのかをはっきりと記してはいないが、その分読み手一人ひとりが独自に解釈できるという利点がある。文学ゼミのクラスでも、女性は女性主人公、男性は男性主人公の物語として捉えていた点が面白い。それぞれが、自分の経験や価値観に影響された展開を想像する。それが詩など芸術作品の面白さであり、作者もそれを願ってわざと曖昧な表現をとったのだろう。ただ、どんな読み方をしても、題名や作品全体にある透明感・すがすがしさは、誰もが感じことだろう。そこには、確かに作者 Naja Marie Aidt の手法と世界観があるので。

おわりに

映画監督で言えばソフィア・コッポラのようだと思った。自然描写、淡い色合い、天真爛漫で少しへミステリアスな主人公、そして何より透明感。これが 2 人の作品の共通点であると言える。突然動物を手懐けたいと言ったり、恋人が牛の群れになる夢を見たりと、少し理解不能な点はあるのだが、その不思議さが心地良い。わからない部分はそのままに、詩集や小説を訳していくば、日本でも人気が出るのではないかと思う。作者はまだ 49 歳と若いので、今後の活躍も大いに期待される。個人的には、彼女の脚本による人形劇だけでなく実写のフィクション映画も見てみたい。それをコッポラが監督してくれたらなお良いのだが、と小さな期待を抱いている。ともあれ、今回本作品を翻訳・解釈するにあたり、とても楽しんで取り組むことができた。大変良い経験が出来たこの機会に感謝すると共に、これからは小説だけでなく詩にも注目していきたいと考えている。

参考

http://da.wikipedia.org/wiki/Naja_Marie_Aidt

http://www.denstoredanske.dk/Kunst_og_kultur/Litteratur/Dansk_litteratur/Efter_1940/Naja_Marie_Aidt

<http://www.najamarieaidt.com/index.php>

Piet Hein の詩

藤岡愛実

KUNSTEN AT VÆLGE

Kunsten at vælge er følgende spil
som foregår skjult for forstanden:
man styrker den sag som man hælder til
og undervurderer den anden.

Ingen kan vælge i åben dag
kun vakle og vende tilbage,
for tanken betivler den stærke sag
og finder fornuft i den svage.

Derfor vil klar beregning snart
lande En lige på midten.
Og skal beslutningen selv stå klart
så skal man famle sig til den.

選ぶべき芸術

選ぶべき芸術は継続するゲームである
理性のために隠れて行われる：
人は興味を抱くものに対しては強く関心を示し
別のものは過小評価する。

誰も開かれた日に選ぶことはできず
よろめき帰っていくだけである、
というのもその考えが強い関心を疑問視し
その芸術の中にある理性が曖昧だと分かるからだ。

それゆえ明確な計算が早急になされ
ただ一つのものを中心に置きたがる。
もしその決定そのものが明確だと立証されると
人はその決定に対して模索するようになる。

(出展：GruK 1998)

(藤岡愛実訳)

作者紹介 : Piet Hein(1905-1996)

デンマークの科学者、数学者、発明家、デザイナー、作家、詩人である。エンジニアの父と眼科医の母のもとでコペンハーゲンに生まれ幼少期と青年期を過ごす。1924年にコペンハーゲン大学で哲学を専攻したのちしばらく大学を休学し、スウェーデンにある私立の芸術学校で学生生活を送る。この学校を卒業してからは再びデンマークに戻り、哲学と理論物理学を学んだ。

1930年代に、日刊新聞 Politiken に”From day to day”という見出いで日常生活の中で起こる大小様々な出来事を詩的にコメントした。1940年代からは彼の作品の形式が固定したものになった。彼は Kumbel Kumbell というペンネームを使って *Gruk* という詩集を書くようになった。“Kumbel”とは古ノルド語で「墓石」という意味で、彼はこの名前を突然ひらめいたと言った。多くの人々が *Gruk* とは実際何であるのかを定義しようとした。*Gruk* のほとんどが人間の誰もが考えていることを意味していると考えられ、また読者に洗練された芸術を理解することにおける小さな助言を与えるような、新しい日常観察の視点を示唆するものであると解釈された。

1940年から1963年までの間に、20冊にわたる *Gruk* のシリーズが出版された。初期の *Gruk* のひとつである”Taking fun as simply fun”は非常に有名である。この *Gruk* を彼は教育的な *Gruk* と呼んでいて、これはすべての *Gruk* の手がかりであると言及した。*Gruk* が書かれた陶器の皿が有名になり、*Gruk* はあらゆる言語に翻訳され詩集は全世界で150万部が印刷された。彼は *Gruk* を多くの人に読んでもらうことを切望した。

デザイナーとしての活動に関しては、数学を用いて「スーパー橢円」という図形を考案し、これは住宅地、スポーツセンター、メキシコシティのオリンピックスタジアムなど様々な構造物に取り入れられている。その他照明ランプ、キャンドル、花瓶などのデザインを考案した。

作品解釈

科学、数学、発明、デザイン、詩など多岐にわたる分野で才能を開花した Piet Hein が、芸術品の見方に関して書いた詩である。3部構成になっており、すべてが独立して内容ではなく意味のつながった話となっている。解釈を始めた当初は意味が何を言わんとしているのかよく分からなかつたが、田辺先生、久保田さん、そして文学ゼミのみなさまより頂いたご意見をもとに再度解釈を試みたところ、意味がだんだんと掴めたように思える。これより詩の内容を一連ずつ紹介していく、作者の考えを追求していきたいと思う。

・第一連

初めの1～2行目で、「選ぶべき芸術とは、理性のために隠されて行われるような、継続したゲームである」ということが述べられる。これは、芸術品を吟味する際にたいてい人は理性で判断することが審美において必要であるということを知っているながらも、実際には理性ではなく感性で良し悪しを判断することがたいていであり、この風潮がずっと継続して続いているゲームのようであるということを言及すると考えた。そのあとの3～4行

目で選ぶべき芸術の説明が来る。「人は興味を抱くものに対しては強く関心を示し、そうでないものには過小評価をする」とあるが、これは人が一般的に個人の感性でもってある芸術品が良いとか、そうではないなどといった評価を下すということを言及しているのではないかと考えた。

・第二連

「誰も開かれた日に選ぶことはできずよろめき帰っていく」という解釈について、「開かれた日」というのは、芸術品のお披露目会や展示会のこと、その日に芸術品を鑑賞しにやってきた人々が、ある芸術品をぱっと見て良いか悪いかを判断することができずに、その芸術品の良さを分からぬままの状態で帰っていくことであると考える。次に続く「というのもその考えが強い関心を疑問視し、その芸術の中にある理性が曖昧だと分かるからだ」で、人々がよろめき帰っていく理由が明記されているが、ここで出てくる「その考え方」というのは第一連にある「人は興味を抱くことには強く関心を示し、そうでないものには過小評価をする」のことであり、自分の主観的な感性のみで芸術品の良し悪しを判断すべきではないといふことを頭の中では分かっている傍らで、しかし自分の感性なくして芸術品の価値が分かることも当然できないわけで、そこで葛藤が生まれ、結局芸術品をよく理解できないままで帰ってしまうということである。

・第三連

第一連と第二連で語られた、人々が芸術品を判断する際に理性と感性がないまぜになっているという内容を受けたのが第三連である。前半の「それゆえ明確な計算が早急になされただ一つのものをちょうど中心に置きたがる」というのは、作者である Piet Hein が、デザインにあたって数学や物理学と芸術を融合させることを指針とした、きわめて理系色の強い人物であったため、理性と感性との間で芸術の審美に苦しんでいる人々のためにも、明確に一つの答えが出る数学のように、芸術品にも作品の良し悪しを含めたたったひとつの評価を据えるべきであると考えたことが述べられていると解釈した。そして最後の二行の「もしもその決定そのものが明確であると立証されると人はその決定に対して模索するようになる」に続くように、一つの価値判断がなされると今度はその判断に対して人々は思索を始めるようになるという結末に行きつく。

詩全体を解釈した上でこの詩が一体何を示唆しているのかを考えると、芸術作品を評価する際にはしばしば理性ではなく感性で作品を評価しがちであるが、そのままの見方を継続していると、簡単には良いものだと理解し難い作品に直面したときにどう評価したらいいのか分からなくなり、おおげさな言い方をすると精神的によろめくという結果になるため、このような状況を回避するために理性や計算といったひとつの答えとなるものを定めることが重要であるということを伝えたかったのではないかと考えた。

この詩の作者である Piet Hein は「合理的な理想主義者」と言われており、ルネサンス芸術、特にレオナルドダヴィンチの近代的なデザインに親和を抱きながらも出版物、エッセ

一、詩、建築には数学がからんだ科学的要素を含ませていることで知られている。デザインに関して言えば、決して感情的もしくは抽象的な判断で評価を下すことではなく、数学を用いて絶対的に物理学と調和させることをモットーとしていた。このことは彼が考案した「スーパー楕円」やその他の家具やオブジェなどからも見て取ることができる。

ここで、Piet Hein の芸術に対する考え方を紐解く手がかりとして、芸術作品における美の本質、美の基準またどのようなものが美しいものとして形容されるのか美の価値を問題として取り組む美学について触れておきたい。14世紀から16世紀にかけてヨーロッパで広まった文芸復興、すなわちルネサンスの時代には、レオナルドダヴィンチの芸術作品や発明に代表されるような、科学と芸術の統合が起こっていた時代である。18世紀になると啓蒙主義の思想と自然科学の確立に伴って、科学的認識と感性的認識の相違が認められるようになり、美学が学問として成立していった。この頃の美学は科学的認識から評価される美を感性的認識によって補完するというものとして定義されるようになり、美学はシェリングやヘーゲルによって展開された美に対する哲学的批判へと展開するようになる。さらに19世紀から20世紀になると、美の概念そのものの探求から個別の美的経験や芸術領域、もしくは他の人間活動との関係にまで考察が及んでおり、もはや当初の科学がからむ美の追求とはかけ離れてしまっており、この美学の在り方は現代に続いている。

Piet Hein はこうした科学から疎遠になってしまった芸術の在り方を良くは思っていないように思える。科学と調和したルネサンス芸術や、あいまいな答えがなく絶対的なひとつある答えを導く数学や物理学を愛した彼からしてみると、個別の感性による美的体験という、明確な答えのないものから美を評価することは納得のいかないことであり、個別の感性で芸術を評価するから人は納得のいく審美ができないのであるということを言いたかったのではないかと思う。「合理的な理想主義者」としての Piet Hein の芸術に対する考え方をよく知ることのできる詩である。

テクスト

Hein Piet. 1998. *GRUK*. København: Gyldendal.

参考文献

[http://en.wikipedia.org/wiki/Piet_Hein_\(Denmark\)](http://en.wikipedia.org/wiki/Piet_Hein_(Denmark))

<http://www.piethein.com/design-en.html>

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%BE%8E%E5%AD%A6#.E7.BE.8E.E5.AD.A6.E3.81.AE.E6.AD.B4.E5.8F.B2>

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%AB%E3%83%8D%E3%82%B5%E3%83%B3%E3%82%BC%E3%82%9F#.E7.BE.8E.E8.A1.93>

第2部

その1

スウェーデン編

夕暮れの国で (I Skymningslandet)

原作 : Astrid Lindgren

訳 : 德原・丹羽・弘瀬・渡邊・菊地

時々ママは悲しそうな顔をしている。ぼくの脚のせいだ。ぼくの脚が痛くなつてからもう丸一年になるんだ。ずっと長い間ベッドに横になつていていたから、全く歩くことができないんだ。ママはぼくの脚のことですごく悲しんでいる。一度、ママがパパにこう言うのを聞いたことがある。「ねえ、ユーランはもう二度と歩けないとと思うわ」

もちろん、ぼくがそのことを聞いているとは思いもしなかつただろう。

一日中ぼくはベッドに横になつて、本を読んだり、絵を描いたり、プラモデルを組み立てるたりしている。薄暗くなり始めると、ママが部屋に入つてきて言った。「ランプを点けようか? それともいつものように夕暮れを見ておきたい?」

ぼくは「いつもみたいに夕暮れを見ておきたい」と言った。ママは台所に戻つていった。ちょうどその時、リリヨンクヴァストさんが窓の所をノックした。リリヨンクヴァストさんは夕暮れの国の住人なんだ。その国は『どこにもない国』とも呼ばれている。毎日、ぼくはリリヨンクヴァストさんに連れられて夕暮れの国へでかけるんだ。

ぼくはリリヨンクヴァストさんが初めて迎えにきてくれた時のことを忘れないだろう。だって、その日はママがぼくが二度と歩けはしないだろうと言つた日のことだったから。それはこんな風にして起つたんだ。

外は夕暮れだった。部屋の隅は真っ暗だった。ぼくはランプを点けたくなかつた。というのは、ママがパパに台所であることを言うのを聞いたばかりだからだ。ぼくはもう二度と「本当に」歩くことができないのかなつて考えたり、誕生日にもらった、きっともう使えないだろう釣りざおのことを考えたり、そうだ、ぼくはちょっと涙ぐんでいたのかもしれない。その時、窓を叩く音が聞こえた。ぼくの家はカールバリ通りのアパートの4階にあるからすごくびっくりした。一体誰が窓を叩けるんだろう? そう、それはほかでもないリリヨンクヴァストさんだった。リリヨンクヴァストさんは窓からすつと入つてきた。窓は閉まつていたのに。リリヨンクヴァストさんはとっても小さな男の人で、チェックのスーツを着て、頭には黒い山高帽を被つていた。リリヨンクヴァストさんは帽子を取ると、おじぎをした。ぼくもベッドの中でできる限りのおじぎをした。

「私はリリヨンクヴァストだよ。私はこの町の窓辺をあちこち回つて、私について夕暮れの国に来たい子がいないかどうか見つめているんだよ。もしかしてきみも行ってみたい?」

「ぼくはどこにもついていくことができないよ」とぼくは言った。「ぼくは脚が痛いんだ」

でもリリヨンクヴァストさんはぼくの前にやってきて、ぼくの手を握つた。

「どうってことないさ。夕暮れの国ではどうってことないさ」

そしてぼくたちは窓を開けることなくすつと出つた。窓辺にぼくたちは立つて、辺りを見回した。ストックホルム中がとっても柔らかな青い夕暮れに包まれている。通りにはだれの姿も見えなかつた。

「さあ、飛ぶよ」リリヨンクヴァストさんが言つた。そしてぼくたちは飛んだ。クララ教

会の塔まで飛んでいった。

「風見鶏さんと少しだけ話をするね」リリヨンクヴァストさんが言った。だけど風見鶏はそこにはいなかった。「風見鶏さんは夕暮れの旅に出ているんだ。風見鶏さんも、夕暮れの国に招待できる子がいないかどうか、このクララ地区を探しているんだ。さあ、もっと先まで飛んでみよう！」

ぼくたちはクロノバリ公園に降り立った。木の上には赤や黄色のキャラメルがなっていた。

「さあ、お食べ」リリヨンクヴァストさんが言った。

ぼくは食べた。こんなにおいしいキャラメル、これまで食べたことがない。

「路面電車を運転してみたいとは思わないかい？」リリヨンクヴァストさんが尋ねた。

「できないよ。やってみたことないもの」

「どうってことないさ」とリリヨンクヴァストさん。「夕暮れの国ではどうってことないさ」

ぼくたちは聖エリク通りに降り立って、4番線のプラットホームの前の方に上った。路面電車の中にはだれもいなかった。ふつうの人はだれもいなかつたんだ、とぼくは思った。そこには小さくて変わったおじいさんやおばあさんがたくさんいた。

「みんなみんな夕暮れの国の住人なんだよ」とリリヨンクヴァストさんが言った。

そこには子どもも何人か座っていた。見覚えのある女の子がいた。その子はぼくが学校に通えていたころ下のクラスにいた。その子はいつも優しそうだったのを覚えている。それにしても今だってそうだ。

「あの子は長いこと夕暮れの国でわたしたちと一緒にいるんだよ」とリリヨンクヴァストさんが言った。

ぼくは路面電車を運転し始めた。それは何でもないくらい簡単だった。路面電車は警笛を鳴らしながらすごいスピードで走っていった。ぼくたちは全く停留所に止まらなかつた。だってだれも降りる人なんていなかつたもの。みんなただ楽しいから乗っているだけで、だれも決まった停留所で降りようとしない。ぼくはヴェステルブローン橋を越えた。その時、突然路面電車が線路から飛んで水にもぐつた。

「うわあ、どうなっているんだ」とぼくは叫んだ。

「どうってことないさ」とリリヨンクヴァストさん。「夕暮れの国ではどうってことないさ」

路面電車は水の上だともっとスイスイ運転できた。路面電車を運転するのはとってもおもしろかった。ノルブローン橋の下に到着して、それから再び路面電車は陸に飛び上がつた。やっぱりだれもいなかつた。だれもいない通りと不思議な青い夕暮れはとっても変な感じだった。

リリヨンクヴァストさんとぼくはお城で路面電車から降りた。その後だれが運転したのかぼくは知らない。

「これから王さまにあいさつをしにいこう」とリリヨンクヴァストさんが言った。

「そうしよう」とぼくは答えた。

もちろんぼくは普通の王さまだと思っていたけどそうじゃなかつた。ぼくたちは門をく

ぐって中に入った。階段を上ると、大きな広間にでた。そこには王さまとお妃さまが黄金の玉座に座っていた。王さまは金の衣装を着て、お妃さまは銀の衣装を着ていた。ふたりの目、ああ、誰もあのふたりの目のことを言い表すことはできない。ふたりがぼくを見ると背筋に火と氷が走ったように感じた。

リリヨンクヴァストさんは深くおじぎをして言った。

「夕暮れの国の王さま、そしてどこにもない国のお妃さま！カールバリ通りのユーラン・ペッテションを紹介してもよろしいでしょうか？」

王さまはぼくに話しかけた。王さまが話すと大きな滝が話しかけてくるような感じだった。でもぼくは王さまが何を言ったか全く覚えていない。王さまとお妃さまの周りには召使いたちがずらっと並んでいた。突然召使いたちは歌い出した。それはストックホルムの街では聴いたこともないような歌だった。その歌を聴くともっと氷や火が背筋を走るような感じがした。

王さまはうなずいて言った。

「夕暮れの国ではこんな風に歌うのだ。どこにもない国ではな」

そのあとしばらくして、リリヨンクヴァストさんとぼくはノルブローン橋のたもとに再び立っていた。

「これできみをお城で紹介できたし」とリリヨンクヴァストさんが言い、こう続けた。

「じゃあ、今度はスカンセンに行こう。バスの運転をしてみたいと思わないかい？」

「運転できるかわからない」とぼくは言った。だって、路面電車を運転するより難しいんじゃないのかと思ったから。

「どうってことないさ」とリリヨンクヴァストさん。「夕暮れの国ではどうってことないさ」

突然そこに赤いバスが現れた。そしてぼくは乗り込んで運転席に座ってアクセルを踏んだ。とってもうまく運転できたんだ。他のどんな人よりも速く運転した。そして救急車みたいにクラクションを鳴らした。

門をくぐってスカンセンの入り口に入っていくと、左手の丘を少し登った所に、バラの妖精農場があった。それはとてもすてきな古い農場で、四方に家並みがあって、前の方にはいごこちのよい芝生があった。ずっと昔、この農場はハリエダーレンにあったんだ。リリヨンクヴァストさんとぼくがバラの妖精農場に着いた時、入り口の階段に女の子が座っていた。ぼくたちは近づいて、あいさつした。「こんにちは。クリスティーナ」とリリヨンクヴァストさんは言った。クリスティーナは不思議な服を着ていた。「どうしてあんな服を着ているの?」とぼくは尋ねた。「クリスティーナがバラの妖精農場に住んでいたころ、ハリエダーレンではこんな服を着ていたんだよ」とリリヨンクヴァストさんは言った。

「昔って?」とぼくは言った。「今クリスティーナはここに住んでいないの?」「夕暮れの時間だけなんだ」リリヨンクヴァストさんは答えた。「クリスティーナは夕暮れの国の住人なんだ」

農場の中では音楽が聞こえていた。クリスティーナはぼくたちに中に入つておいでとさそった。そこでは3人の演奏家がバイオリンを弾いていて、たくさんの人人が踊っていた。

暖炉では火が燃えていた。

「ここにいるのはどんな人たちなの？」とぼくは言った。「みんな、ずっと昔にバラの妖精農場に住んでいたんだ」とリリヨンクヴァストさんは言った。「今では夕暮れの時間にここで会って、楽しく過ごすのさ」

クリスティーナはぼくと一緒に踊った。すごいんだ！ぼくは自分の脚でとってもうまく踊ることができた。ダンスの後、ぼくたちは食卓に用意されたおいしい食べ物をいっぱい食べた。薄切りパン、ヤギのチーズ、トナカイのステーキ、それからぼくの知らないものも。食べ物はとってもおいしかった。ぼくはとってもお腹が空いていたから。

でもぼくはもう少しスカンセンを見たかったので、リリヨンクヴァストさんと歩き続けた。バラの妖精農場を出た所に、ヘラジカがゆっくりとやってきた。「あのヘラジカは放し飼いにされてるの？」とぼくは言った。

「夕暮れの国では、どのヘラジカも自由なんだ」とリリヨンクヴァストさんは答えた。「どこにもない国では、檻にいれられているヘラジカはいないよ」「どうってことないんだ」とヘラジカは言った。ぼくはヘラジカが話せることに、ちっとも驚かなかった。

カフェに2匹の小さくてかわいいクマがのそのそ歩いてやってきた。そのカフェで、ぼくがまだ脚が痛くなかったころ、よく日曜日にパパとママと一緒にコーヒーを飲んだ。クマたちはテーブルの前に座って、ジュースを飲みたいと叫んだ。そこにとっても大きなジュースのビンがうかんてきて、クマたちが座っている前のテーブルの上に着陸した。クマたちはきちんととかわりばんこにジュースを飲んだ。その後、1匹の子グマが、もう1匹の子グマの頭の上に大量のジュースをぶっかけた。クマはびしょぬれになつたけれど、ただけら笑ってこう言った。「どうってことないさ。夕暮れの国では、全然どうってことないんだよ」リリヨンクヴァストさんとぼくは長いこと歩きまわって、全く好きなように歩いている動物を全部見てまわった。そこにはだれもいなかつた。ふつうの人はだれもいなかつた、ということだけね。

最後に、リリヨンクヴァストさんは、自分が住んでいる場所を見たいか尋ねた。「うん、ありがとう」とぼくは答えた。「じゃあ、ブロックヒュース岬まで飛んでいこう」とリリヨンクヴァストさんは言った。そしてぼくたちは飛んでいった。

ブロックヒュース岬には、ライラックの生け垣で囲まれた小さな小さな黄色い家があつた。その家は他の家々からすっかり遠く離れていて、通りからは見えなかつた。小道がベランダから湖に向かってのびていた。そこには桟橋があつて、近くにはボートが浮かんでいた。全部の家とボートは、ふつうの家やボートよりずっと小さかつた。だって、リリヨンクヴァストさんはとっても小さい男の人だから。まず、ぼくは自分も同じくらい小さくなっていることに気付いた。

「この小さな場所はとっても楽しいね」とぼくは言った。「名前は？」「やすらぎのリリヨン荘っていうんだ」とリリヨンクヴァストさんは答えた。ライラックはとってもいい匂いがして、おひさまは輝いていた。水は浜辺に向かってぱしゃぱしゃと音を立てていた。桟橋の上には釣りざおがあつた。あれ、おひさまが輝いている…。変じやない？

ぼくはライラックのしげみから外をのぞいた。外は青い夕暮れのままだつた。「やすらぎ

のリリヨン荘の上では、いつもおひさまが輝いているんだ」とリリヨンクヴァストさんは言った。「ライラックの花はいつでも咲いている。魚だって、次々釣れるんだ。きみは時々、ここで釣りをしたいかい?」「うん、したいな」とぼくは言った。「また今度ね」とリリヨンクヴァストさんは答えた。「夕暮れの時間はもうすぐ終わってしまう。わたしたちはカールバリ通りまで帰らないと」

そしてぼくらはそうした。ユールゴーデンのカシの木の森をこえて、水面がキラキラ輝くユールゴーデン湾の水の上をとび、街の上高くを飛んだ。街ではどの家でも明かりが灯されようとしていた。足元にあるこの街みたいに美しいものがあるなんて、これまでちっとも知らなかつた。

カールバリ通りの地下では地下鉄を建設中だった。パパはときどきぼくを窓際に抱いて行って、地中深くから砂利と石をすくい出す大きな穴掘り機を見るようにしてくれた。

「穴掘り機で砂利を少しずくい出してみたいかい?」リリヨンクヴァストさんはカールバリ通りの家に帰ってくると言った。

「動かし方なんてわからないよ」とぼくは言った。

「どうってことないさ」リリヨンクヴァストさんは言った。「夕暮れの国ではどうってことないさ」

それでぼくはもちろん動かすことができた。とっても簡単だった。ひとすくいひとすくいと大きな砂利の山をすくい上げて、そばに停めてあったトラックにドサッとおろした。とてもおもしろかった。だけど急に、赤い目をした小さい変なおじいさんたちが見えた。そのおじいさんたちは、地下鉄が通ることになっている奥深くのほら穴からのぞいていた。

「地下の住人だよ」リリヨンクヴァストさんは言った。「あの人たちも夕暮れの国の住人さ。あの奥深くに、金とダイアモンドで光り輝く大きい広間を持っているんだ。また別の機会についてくるといいよ」

「だけど、地下鉄がおじいさんたちの広間にぶつかってしまったらどうするの?」とぼくは言った。

「ドーデことないさ」リリヨンクヴァストさんは言った。「夕暮れの国ではどうってことないさ。地下の住人は必要なときに広間を動かせるのさ」

それからぼくらは閉まっている窓をすり抜け、ぼくはベッドにもぐりこんだ。

「明日の夕暮れ時に会おう」とリリヨンクヴァストさんは言って、そして消えてしまった。ちょうどそのときママが入ってきてランプを点けた。

それがリリヨンクヴァストさんに初めて会った時のこと。だけどリリヨンクヴァストさんは毎日やってきてぼくを夕暮れの国に連れて行ってくれる。なんてすばらしい国なんだ! あそこにいるのって、とてもすてきなんだ。脚が痛くたって全然どうってことないんだ。だって、夕暮れの国では飛べるんだからね。

スウェーデン国教会讃美歌集の変遷

菊地灯

1. はじめに

スウェーデン国教会は福音ルーテル派に属している。しかし宗教改革以降、現代に至るまでのあいだ、それは盤石のものであったわけではなく、他の欧米諸国同様に 18 世紀以降、宗教的多元主義や自由教会運動のもとで多数の教派が生まれスウェーデン国教会にも多大な影響を及ぼしてきた。今回はその影響をはかる視点の一つである讃美歌を取り上げ、19 世紀の自由教会運動を経て 1986 年に発行された現行のスウェーデン国教会讃美歌集にいかなる変化が生じたのか考察する。

2. 1695 年版スウェーデン国教会讃美歌集より “I himmelen, i himmelen”

作詩者であるラウレンティウス・ラウレンティ・ラウリ(Laurentius Laurentii Lauri, 1573–ca1655)は、スーデルマンランドのヘーラドスハンマル(Häradshammar)の教区牧師であった。彼は歌曲の分野において最初のものとなる教本を著した。ここで取り上げた詩は彼の最初の妻マルガレータ・ラーシュドッテルの死へ向けて書かれたもので、彼女の人生最後の日に出版された。その後、1694 年のスウェードバリの讃美歌集に収録される際、17 連からなる詩に編集され、その版が 1695 年スウェーデン国教会讃美歌集に取り上げられている。1816 年に再度 J・オーストルムにより編集され、より短く簡潔となった詩が現行の讃美歌集に収録されている。

この讃美歌は諸聖人の祝日に教会でよく歌われる。諸聖人の祝日にはこの世を去ったものたちが地上に生きる私たちの最も近くまで来ると考えられ、この詩の天上の世界やそこから地上に来たものについての描写が関連づけられたことから、そのような祝日に歌われていると考えられる。また、この詩には聖書からの引用や聖書の内容を把握していることが前提とされているような箇所が多く、この詩のみを一読するだけでその内容をはかり知ることは難しい。

ここで取り上げたメロディーは、この詩に付けられた旋律のひとつであり、スウェーデンやノルウェーの民謡に由来するものである。この旋律はスカットゥングビー(Skattungbyn)で記録され、1914 年に出版された。この曲はレクサンドで毎夏上演されるルーネ・リンドストルムの「天国の遊び」(Himlaspelet)などに使われている。この他にもグリーグにより作曲されたノルウェー民謡風の合唱曲も存在するが、讃美歌集には収録されていない。

3. 1819 年版スウェーデン国教会讃美歌集より “Vad ljus över griften”

作詩者フランツ・ミヒヤエル・フランツェーン(Frans Michael Franzén, 1772-1847)は、ロマン派の詩人及びハーヌサンド(Härnösand)の教区監督(biskop)であった。同時代の詩人にはテグネールらがあり、彼らからは「日曜日（安息日）の子」('Ett söndagsbarn')と称され、温厚かつ知的な人物であった。この詩は、フランツェーンが

クムラ(Kumla)で牧師をしていた 1812 年に書かれた。王国讃美歌集委員会が 1811 年には既にこの詩を受理しており、その後 1812 年前半に彼とワリンによる「試験的讃美歌」(Prov-psalmer)のうちに収めた。1981 年、新讃美歌集のためにカール=グスタフ・ヒルデブランドが編集を加え、現行の讃美歌集に収録されている形となった。

また、この讃美歌は、最もよく知られているイースターの讃美歌のひとつである。テキストにはイエスの復活日の朝に起きる事柄について聖書からの多大な引用(イエスの墓所における女性たちやイエスの復活描写:マタイ 28 章、マルコ 16 章、ルカ 24 章、ヨハネ 20 章)を用いながら書き表している。ただし、第 4 番の詩はナポレオンの統一ヨーロッパ精神、さらにはそれと一緒に始まった世界伝道への関心を促すものとして充てられているとする解釈も存在する。(1811 年はナポレオンの絶頂期である)

メロディーはデンマーク民謡を基にしている。その旋律自体は 16 世紀のデンマークの文献に記録が残されているが、和音の進行には讃美歌集収録当時のロマン派の影響が見られる。

4. 1937 年版スウェーデン国教会讃美歌集より “Blott en dag”

作詩者のリーナ・バリ(旧姓サンデル) (Lina Sandell-Berg, 1832~1903)は、新福音主義最初期の作詩家で、彼女の詩には慈悲深き天の父なる神やイエスへの静かで内的な信仰心があり、なおかつ親しみやすさも持ち合わせていることが特徴である。*Blott en dag* は 19 世紀の信仰復興運動に由来を持つ古典的な讃美歌である。リーナは 1865 年から「十字架の花」(Korsblomman)というキリスト教に関連するカレンダーを出しておらず、この詩は 1866 年にそのカレンダー上で、古い壁掛け時計の終末についての寓喩的描写の末尾として著された。また、この詩の主題に関してはマタイによる福音書に基づいているということも出来る。

この讃美歌は葬儀の際に歌われる讃美歌のうち最も有名なものひとつである。死や悲しみを連想させる、神の傍における安らぎや「かの地」('goda land')、つまり約束の地という天国を思わせる言葉が並ぶからである。天国の喜びや天から地へ降りてくるものを歌った “I himmelen, i himmelen” と違い、この歌では天国の安らぎや救い、そこへ至るまでの日々の短さと短い時であっても惜しみなく注がれる深い慈しみが歌われている。死者の天国における永遠の安らぎを願うとともに、短い時を生きる残された者たちの悲しみを癒す慈しみが表された詩である。

オスカル・アーンフェルト(Oscar Ahnfelt, 1813~1882)が曲をつけ、「聖歌集」(Andeliga sånger, 1872)に収められた。この詩を含む彼女の詩の多くは讃美歌による巡回伝道師オスカル・アーンフェルトによって作曲され、リーナ同様、信仰復興運動において彼の作曲した旋律が広く知られていった作曲家である。

5. まとめ

以上の 3 篇の違いとして、まずその長さが挙げられる。最も時代の古い “I himmelen, i himmelen” は 17 番、続く “Vad ljus över griften” は 5 番、そしてこの中では最も

新しい“Blott en dag”は3番までと時代ごとに短くなっていく。これはこの3篇のみに見られる特徴ではなく、他の多くの讃美歌にもおおむね同様の特徴が見られた。さらに、それらの長く複雑な讃美歌が後世の讃美歌集に収録される際にはより短く簡潔な内容に編集されていることからも、古い讃美歌は長大で一般大衆には分かりにくいものであったと言える。対してリーナの“Blott en dag”はとりわけ簡素で、キリスト教に関して特別な教育を受けていない人々にも受け入れやすいものである。このことから、この讃美歌は国教会讃美歌集への収録に向けて書かれたものではなく、自由教会運動の中で派生した一教派、この場合は全国福音同盟の普及に向けて、会衆全員で歌うことを想定したものであったことがうかがえる。

しかし、そのような差異はあるものの現在は同一の讃美歌集に収められている理由としては、編集により現代においても意味の通る詩に改められていることもあるが、やはり各詩の完成度の高さがあるだろう。編集前のオリジナルの讃美歌は確かに複雑ではあるが、押韻及びリズムの秀逸さには目を見張るものがある。またこれらの詩には、現在のスウェーデン国教会にとって教義の逸脱が見られない。過去に国教会讃美歌集に収められていたものでも教義の見直し、問題の表面化に従って削除された詩も存在するため、このことも大きな理由の一つと考えられる。

たった3篇の讃美歌ではあるが、その一つ一つから様々な背景、性格及び後世への影響を見ることができた。日本においてはデンマークよりも話題にされにくく、スウェーデンの讃美歌であるが、そこには興味深い文化的背景や歴史が詰まっている。今後もスウェーデンの教会史と讃美歌の文化史の両面を比較し、現在の教会あるいは文化への影響を調査していきたい。

6. 参考文献

- Anders Palm, Johan Stenström, *Den svenska sång boken*, Stockholm, 1997.
- Håkan Möller(red.), *Den gamla psalmboken ett urval ur 1695, 1819 och 1937 års psalmböcker*, Stockholm, 2001.
- Inger Selander, "Psalm och andlig sång i Sverige under 1800-talets senare del", *Sveriges kyrkohistoria omfattar åtta band, 7.Folkväckelsens och kyrkoförnyelsens tid*, 2003, pp. 316-325.
- 日本基督教団讃美歌委員会, 『讃美歌』, 日本基督教団出版局, 1991年.
- 八木谷涼子, 『なんでもわかるキリスト教大辞典』, 朝日新聞出版, 2012

1695 年版讃美歌集より第 410 番(1695 års psalmbok-Nr 410)

詩：ラウレンティウス・ラウレンティ・ラウリ (Laurentius Laurentii Lauri)

1. I himmelen, i himmelen,
Där Gud själver bor⁶,
Få vi honom beskåda
I salighet fast⁷ stor,
Ansikte mot ansikte⁸:
Ansikte mot ansikte:
När⁹ Herran Sebaot.
2. Av det saliga åskådande
Orsakas glädje stor
Med fröjde-sång och spelande,
Uti Guds Ängla Kor,
Sjungande Helig,
Sjungande Helig,
När Herran Sebaot.
3. I Himmelen, i Himmelen,
Där är klarhet fin,
Så att den klara Solen
Hon ej så klara skin,
Som den klarhet i Himmelen är,
Som den klarhet i Himmelen är,
När Herran Sebaot.
4. Utav den klarhet i Himmelen
Människan skina skall,
Allt som den klara Solen,
Vidt¹⁰ över Stjärnor all,
Änglomen fast mycket lik:
Änglomen fast mycket lik:
För Herran Sebaot.
5. Den klarhet som omtalat är,
Till kropp och så till själ,
Fast oförändrad bliver där,
Som Gud det täckes¹¹ väl,
Med en evig odödelighet,
Med en evig odödelighet,
För Herran Sebaot.
6. Och själens prydning bliver där
Frid, fröjd, rätfärdighet,
Rätt ödmjukhet och sanning kär,
Med all fullkomlighet,
Igenom Guds åskådande,
Igenom Guds åskådande,
På Herran Sebaot.

⁶ Där [...] bor: Se Upp. 21:3.

Upp. 21:3 : Och från tronen hörde jag en stark röst som sade: Se, Guds tält står bland människorna, och han skall bo ibland dem, och de skall vara hans folk, och Gud själv skall vara hos dem,
ヨハネの黙示録 21 章(新しい天と新しい地)3 節

そのとき、わたしは玉座から語りかける大きな声を聞いた。「見よ、神の幕屋が人の間にあって、神が人と共に住み、人は神の民となる。神は自ら人とともにいてその神となり... (以下 4 節に続く)

⁷ fast: 'mycket'.

8 Ansikte mot ansikte: Se 1 Kor. 13:12 och Upp. 22:4.

1 Kor. 13:12 : Ännu ser vi en gåtfull spegelbild ; då skall vi se ansikte mot ansikte. Ännu är min kunskap begränsad ; då skall den bli fullständig som Guds kunskap om mig.

コリントの信徒への手紙 13 章(愛)12 節
わたしたちは、今は、鏡におぼろに映ったものを見ている。だがそのときには、顔と顔とを合わせて見ることになる。わたしは、今は一部しか知らないとも、そのときには、はつきり知られているようにはっきり知ることになる。

Upp. 22:4 : De skall se hans ansikte, och de skall böra hans namn på sin panna.

ヨハネの黙示録 22 章 4 節

御顔を仰ぎ見る。彼らの額には、神の名が記されている。

⁹ När: 'Nära'.

¹⁰ Vidt: Den gamla stavningen har i förtydligande syfte bibehållits.

¹¹ täckes: 'behagar'.

7. Utvärtes skall ock kroppen där,
Ifrån all krankhet ren,
Med Änglakraft och vishet skär¹²,
Begåvas utan men.¹³
Klädd med oforgängelighet,
Klädd med oforgängelighet,
När Herran Sebaot.
8. Vad mera som här felar
Gud allt uppfylla skall,
Uppå de frommas delar,
Uti sin fröjdesal :
Döden blir ock icke mer:
Döden blir ock icke mer:
För Herran Sebaot.
9. Ej torv där någor tänka¹⁴
På det som förra var,
Ty Gud mån¹⁵ därför skänka
Lust glädje, fröjd ospar¹⁶,
Med helt evigt hugsvalande¹⁷:
Med helt evigt hugsvalande:
I Herran Sebaot.
10. Ej finnes någon tunga,
Den rätt utsäga må,
Hur de med lust där sjunga,
De store med de små.
O Herre Gud vad lust där är!
O Herre Gud vad lust där är!
När Herran Sebaot
11. Exempel kan ej givas,
Mer än det¹⁸ Petrus sett har,
Allt såsom det beskrives,
Då han på berget var,
Och Kristi klarhet litet såg :
Och Kristi klarhet litet såg :
I Herran Sebaot.

¹⁸ Mer [...] var. Här åsyftas episoden om Jesus på härlighetensberg ; se bl.a. Matt. 17:1–8.

Matt. 17:1-8 : Sex dagar senare tog Jesus med sig Petrus, Jakob och hans bror Johannes och gick med dem upp på ett högt berg, där de var ensamma. Där förvandlades han inför dem: hans kläder blev vita som ljuset. Och de såg Mose och Elia stå och samtala med honom. Då sade Petrus till Jesus: Herre, det är bra att vi är med. Om du vill skall jag göra tre hyddor här, en för dig, en för Mose och en för Elia. Medan han ännu talade sänkte sig ett lysande moln över dem, och ur molnet kom en röst som sade: Detta är min älskade son, han är utvalde. Lyssna till honom. När lärjungarna hörde detta kastade sig ner med ansiktet mot marken och greps av stor skräck. Jesus gick fram och rörde vid dem och sade: Stig upp och var inte rädda. De lyfte blicken, och då såg de ingen utom Jesus.

マタイによる福音書 17 章(イエスの姿が変わる)1~7 節：六日の後、イエスは、ペトロ、それにヤコブ

とその兄弟ヨハネだけを連れて、高い山に登られた。イエスの姿が彼らの目の前で変わり、顔は太陽のように輝き、服は光のように白くなつた。見ると、モーセとエリヤが現れ、イエスと語り合つていた。

ペトロが口をはさんでイエスに言った。「主よ、わたしたちがここにいるのは、すばらしいことです。お望みでしたら、私がここに仮小屋を三つ建てましよう。一つはあなたのため、一つはモーセのため、もう一つはエリヤのためです。」ペトロがこう話しているうちに、光り輝く雲が彼らを覆つた。すると、「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者。これを聞け」という声が雲の中から聞えた。弟子たちはこれを聞いてひれ伏し、非常に恐れた。イエスは近づき、彼らに手を触れて言わされた。「起きなさい。恐れることはない。」彼らが顔を上げて見ると、イエスのほかにはだれもいなかつた。

¹² skär: 'ren', 'klar'.

¹³ utan men: 'utan brist'.

¹⁴ Ej torv där någor tänka: 'Där behöver ingen tänka'.

¹⁵ mån: 'månde', 'skall'.

¹⁶ ospar: 'ospard'.

¹⁷ hugsvalande: 'tröst (och lindring)'.

12. Ja, Paulus¹⁹ ock bejakar,
Att det ohörligt²⁰ är,
Fast om man än rannsakar,
Om den klarheten skär,
Som Gud de fromma giva vill:
Som Gud de fromma giva vill:
När Herran Sebaot.
13. De andre ej omtalas,
Som det ej kunna nå;
Ty de må ej hugsvalas,
Och ingen glädje få
Av den som evigt är beredd:
Av den som evigt är beredd:
När Herran Sebaot.
14. Stor härlighet och lust är till
När Herran Sebaot :
Väl allom han dem giva vill,
Och mycket mera gott :
Allenast tron den tager an:
Allenast tron den tager an:
När Herran Sebaot.
15. O Herre Gud! var du så god,
Där lät²¹ oss komma till :
Föröka du vårt svaga mod,
Allt såsom du själv vill :
Gör oss svaga frimodiga:
Gör oss svaga frimodiga:
I Herran Sebaot.
16. Dödsens skarpa pilar
O Herre lindra väl !
När det till ändan ilar,
O Herre tag vår själ !
Och lät oss få en evig ro :
Och lät oss få en evig ro :
När dig Herre Sebaot.
17. Gud Fader och hans enda Son
Man alltid ära bör
För sine nåd och mycken mån²²,
Den han oss alltid gör:
Desslikes ock den Helge And:
Desslikes ock den Helge And:
I Herran Sebaot.

¹⁹ Ja, Paulus [...] skär: Se 1 Kor. 2:9–10.
1 Kor. 2:9–10 : Vi förkunnar. som det står i skriften, vad inget öga sett och inget öra hört och ingen människa anat, det som Gud har berett åt dem som älskar honom.

Och för oss har Gud uppenbarat det genom Anden, ty det är Anden som utforskar allt, också djupen hos Gud.

コリントの信徒への手紙 2 章(神による啓示)9~10 節：しかし、このことは、「目が見もせず、耳が聞きもせず、人の心に思い浮かびもしなかったことを、神は御自身を愛する者たちに準備された」

と書いてあるとおりです。わたしたちには、神が“靈”によってそのことを明らかに示してくださいました。“靈”は一切のことを、神の深みさえも究めます。

²⁰ ohörligt: 'inte förut omtalat', '(för människan) okänt'.

²¹ lät: 'låt'.

²² mån: 'omsorg'.

〈直訳〉

1. 天つみくにに、天つみくにに、
み神、御自ら住まわれて
われら主を見ること許されん
大いなる至福のうちに
み顔と顔を見合わせて×2(以下第5行は同様)
万軍の主のみそばにて

2. 至福なるまなざしによりて
大いなる歓びもたらされん
歓喜の歌もて、奏でつつ
神のみつかいの合唱のうちに
清らかに(神聖に)歌いつつ
万軍の主のみそばにて

3. 天つみくにに、天つみくにに、
そこでは光映えし
明るき太陽も
そのように輝かぬほどに
天つみくにのみ光のようには
万軍の主のみそばにて

4. 天つみくにのみ光によりて
人の子輝かん
明るき太陽のごとくあらゆるもの
あらゆる星々を越えてどこまでも
みつかいのみしるしひごと
万軍の主のために

5. 耳に聞かれしそのみ光は
身にも、そして心にも
そこではけっして変わらぬ
み神のなされるごとく
とこしえの不死もて
万軍の主のために

6. 御靈を飾るは
平穏、歓び、義
正しきつつしみ、そして愛しきまことにあり
あらゆる完全とともに
み神のみまもりを通じて
万軍の主への

〈訳詞〉

天つみくに、天つみくに
み神住まいし
われら主のみ姿をみる
至福のうちに
み顔と顔を見合わせて×2
万軍の主よ

至福なるまなざしに
歓び起きん
歓喜の歌とその調べ
みつかい奏でん
神聖なる歌声×2
万軍の主よ

天つみくに、天つみくに、
光映えし
太陽もみくにほどには
輝かぬ
天つみくにの光ほど×2
万軍の主よ

天つみくにの光にて
主は輝かん
その広さ太陽のごと
星のかなたへ
みつかいのみしるしひごと
万軍の主よ

耳に聞こえし、みひかり
身にも魂(たま)にも
みくにでは決して変わらぬ
み神のごとく
とこしえの不死もて×2
万軍の主よ

御靈飾るは安らぎと
歓びと義と
正しきつつしみとまこと
全きものもて
み神へのまなざしによりて×2
万軍の主よ

7. 身の外も、そしてその身も
あらゆる病より清きまま
みつかいのみ力と清き知恵を
悪意なく授けられよう
どこしなえを装いて
万軍の主のみそばにて
- 身も身の外も病より
清いまま
みつかいのみ力と知恵
授けられん
どこしなえを装いて×2
万軍の主よ
8. ここにあらぬものも
み神はすべて満たしたもう
つつしみぶかき者らの上に
み神の歓びの間のうちに
もはや死は去りぬ
万軍の主にとりては
- なきものもすべてをみ神
満たしたもう
つつしみぶかき者のうえ
み神の間にて
ここからもはや死は去りぬ×2
万軍の主よ
9. いかなることも考えずともよい、
過ぎ去りしことを
み神授けたまわれば
歓び、楽しみ、おしみなき歓喜を
全くのこよなき慈しみもて
万軍の主のうちに
- いかなることも煩うな
過ぎ去りしこと
歓び、楽しみ、歓喜を
授けられん
こよなき慈しみもて×2
万軍の主よ
10. いかなる言葉も存在しないのだろうか
まことを表しうる言葉は
つつしみぶかき者ら歓びもていかに歌おうと
小さき者(子供)も大き者(大人)も共に
主なるみ神よ みくにの喜びはいかなりや！
万軍の主のみそばにて
- いかなる言葉もまこと
表せ得ずや
聖徒らこぞりて喜び
いかに歌えど
主よ喜びはいかなりや×2
万軍の主よ
11. たとえは与えられ得ぬ
ペテロの見た以上のこととは、
あらゆることが描かれているゆえに
主が山に登られた際に
キリストはみ光を述べられた
万軍の主のうちに
- ペテロの見しことのうえ
たとえ得られぬ
山上にペテロ見しこと
みふみのごとし
わずかにも見き主の光×2
万軍の主よ
12. パウロもかく言われよう
耳が聞かざりしことについて
たとえくまなく探せども
み光が強く感じられることについて
み神がつつしみぶかき人々に与えるごと
万軍の主のみそばにて
- さてもパウロ肯うは
知らざりしこと
さの清きみ光を
いかに糺せど
聖徒に授けらるみ光×2
万軍の主よ

13. 他の者らには語られぬ そこに達しえぬ者らは ゆえにその者らは慰められ得ず 喜びも得られぬ とこしえに備えられしものから 万軍の主のみそばにて	他の者らには語られぬ 届かぬ者は 慰めも喜びも 与えられえぬ とこしえの備えから×2 万軍の主よ
14. 大いなる栄光や喜びは 万軍の主のみそばへのもの 主はあらゆるものを与えたもう より多くを満つるほど 信仰のみぞが栄光と喜びを良しとせん 万軍の主のみそばにて	栄光や喜びは主の みそばにぞある あらゆるもの満つるほど 主は与えたもう 信仰のみぞが栄光、信仰のみぞが喜び 万軍の主よ
15. おお主なるみ神よ！良き方よ、 いざゆかん われらの貧しき心を強めたまえ あらゆることはあなたの意志ゆえに われら弱き者らを恐れなきものになしたまえ 万軍の主のうちに	主なるみ神よ、良き方よ いざ参りゆかん 貧しき心強めたまえ み心のまま 我ら弱きに恐れなし×2 万軍の主よ
16. 死したものの鋭き矢 おお主よいやしたまえ！ 死の来たる時 おお主よわれらの魂運びたまえ！ そしてわれらにとこしえの平和を与えたまえ あなた、万軍の主のみそばにて	主よ、死者の鋭き矢を いやしたまえ！ わが魂運びたまえ 死の来たる時 永久(とわ)の平和与えたまえ×2 万軍の主よ
17. 父なるみ神とそのひとりごよ 人の絶えず敬うべき 恩寵と大いなる憐みを 主は絶えずわれらにお与えになる 聖霊(みたま)もそのように 万軍の主のうちに	父なる神とひとりごを みな敬わん 主は恩寵と憐みを 絶えず下さる みたまもさのごとくあれ×2 万軍の主よ

1819 年版讃美歌集より第 102 番(1819 års psalmbok-Nr 102)

詩 : フランス・ミヒヤエル・フランツェン(Frans Michael Franzén)

1. Vad ljus över griften !
 Han lever, o fröjd !
 Fullkomnad är Skriften,
 O salighets höjd!
 Från himmelen hälsad,
 Han framgår i glans,
 Och världen är frälsad,
 Och segren är hans.
 Bortvältad är stenen och inseget bräckt²³,
 Och vakten har flytt för hans Andas fläkt,
 Och avgrunden båvar.
 Halleluja!
2. Här var mellan ljuset
 Och mörkret en strid;
 Dock segrade ljuset
 För evig tid.
 Nedstörtad är döden;
 Och tron står opp,
 Bland jordiska öden,
 Med himmelskt hopp.
 I sörjande kvinnor! vem söken I här?
 Den levande ej bland de döda är:
 Uppstånden är Jesus.
 Halleluja!
3. Så himlen med jorden
 Försonade sig.
 Så graven är vorden
 Till glädjen en stig.
 I huvun, som böjdens
 Vid korsets fot !
 Upplyftens och fröjdens,
 Trots världens hot.
 Kom, skingrade hjord! till din Herde igen:
 Han lever! han lever, och följer dig än
 Osynlig från himlen.
 Halleluja!
4. Nu stormen, o tider!
 Hans kyrka står fast.
 Som ljuset, sig sprider
 Hans lära med hast.
 Ut gå i all världen
 Hans sändningabud²⁴,
 Och vittna bland svärden
 Och bålen om Gud,
 Och vittna om honom, o tröst i all nöd!
 Som, död för vår synd, blev genom sin död
 En Förling till livet.²⁵
 Halleluja!
5. I fromme! vi klagen,
 Vi²⁶ misströsten I ?
 Hur fort är båd' dagen
 Och natten förbi!
 Snart jorden upplåter
 Sin famn till er ro ;
 Snart uppstå I åter,
 Likt kornen som gro.²⁷
 Han själv, som dem sådde, skall komma till
 slut
 Och samla in skörden; men skilja förut
 Ogräset från vetet.
 Halleluja!

²⁴ sändningabud: 'sändebud', dvs. missionärerna

²⁵ En Förling till livet: Kristus blev den förste som uppstod från de döda; jfr 1 Kor. 15:20.

Kor. 15:20: Men nu har Kristus uppstått från de död, som den förste av de avlidna.

コリントの信徒への手紙 15 章 20 節：しかし、実際、キリストは死者の中から復活し、眠りについた人たちの初穂となられました。

²⁶ Vi: 'varför'.

²⁷ Likt kornen som gro: En särskilt bland romantikens poeter uppskattad metaforik, den jordiska sådden och den himmelska växten (Fehrman, 1957).

²³ inseget bräckt: '(gravens) försegling bruten'.

〈直訳〉

1. み墓の上は何と明るきことか！
主は生きたもう、ああ喜ばしきや！
聖書(みふみ)は真理(まこと)
おお聖なる高みよ！
めでたき天からの
輝きのうちに主はいまし
世界はすぐわれ
勝利(かち)は主のもの
墓石は倒れ、封印はうちくだかれ
見張りは主の息吹に去り
地の底は揺れ動かん
ハレルヤ！

〈訳詞〉

み墓ひかり
よろこべや！
みふみはうえなき
まこと！
あまつひかり
主はいまし
世は救われ
主は勝ちぬ
墓は倒れ碎かれん
見張り主の息吹に去り
陰府(よみ)は揺らぐ
ハレルヤ！

2. ひかりとやみのあいだ

ここにたたかいありし
ひかりは勝ちぬ
いつの日も
死はうちくだかれ
みくらがたちあがる
地の運命のあいだに
天の望みとともに
汝ら悲しみのおみならよ！誰を探すや？
生者は死者のなかにはなし
主はよみがえりたもう
ハレルヤ！

ひかりとやみ
あらそいし
ひかり勝ちぬ
とこしえに
死はくだかれ
みくら立つ
地のさだめ
あまつのぞみ
おみなら、誰を探すや
主は死者のうちにはなし
よみがえらん
ハレルヤ！

3. そうして天地(あめつち)は

歩みよりたり
み墓は歓びへの
歩みへ変わろう
頭(こうべ)を垂れ合いし汝らよ
十字架のもとで！
頭をもたげ歓べ
世の危機にあっても
来たれさまよえる群れよひつじかいのみもとへ
主は生きたもう！主は生きたもう、
天にまします主はまた汝のそばにも
ハレルヤ！

あめつち
歩みよりたり
死は歓びに
至らん
十字架の下
汝らよ
世の苦難も
歓べや
つどえ群れ主のみもとへ
あまつ主は見えずとも
なれのそばに
ハレルヤ！

4. いまや嵐、おお時よ！
 主のみとのは堅くたちたまえり
 ひかりのように広がりゆく
 主の教えはすぐさまに。
 世のすべてをめぐりゆく
 彼のみつかいは
 つるぎとほのおのまにまに
 神について、証をたてる
 主、すべての苦しみの慰めよ！
 われらの罪のための死によりて
 主は初穂となられた
 ハレルヤ！
- 嵐にも、
 みとのかたし
 み教えは
 広がりゆく
 みつかいは
 世をめぐりて
 つるぎとほのおの
 まにまに
 主について証立てる
 我らの罪贖いて
 初穂となる
 ハレルヤ！
5. 汝らつつしみぶかき者らよ！いかで悲しむや
 いかで望み潰えしか
 いかに早く昼夜は
 過ぎ行かん！
 やがて地はその腕を広げん
 汝らの安らぎに
 やがて汝らは再びよみがえらん
 みくにに育つ種のごと
 種を蒔きし主は終わりに來たりて
 実りを集め、分けたもう
 麦から毒麦を
 ハレルヤ！
- 汝らなぜ
 悲しむや
 日はげに早く
 去りゆく
 地は腕に
 安らぎ抱き
 汝らまた
 よみがえらん
 種を蒔きし主は來たり
 実りをとり毒麦と
 麦を分かつ
 ハレルヤ！

1937 年版贊美歌集より第 355 番(1937 års psalmbok-Nr 355)

詩：リーナ・サンデル=バリ(Lina Sandel-Berg)

1. Blott en dag, ett ögonblick i sänder,²⁸
Vilken tröst, evad²⁹ som kommer på!
Allt ju vilar i min Faders händer,³⁰
Skulle jag, som barn, väl ängslas då?
Han som bär för mig en faders hjärta
Giver ju åt varje nyfödd dag
Dess beskärda del av fröjd och smärta,
Möda, vila och behag.

2. Själv han är mig alla dagar nära,³¹
För var särskild tid med särskild nåd.
Varje dags bekymmer vill han bära,
Han som heter både Kraft och Råd³².

²⁸ Blott (...) sänder : Jfr Matt.6:34.

Matt.6:34.:Gör er därför inga bekymmer för morgondagen. Den får själv bära sina bekymmer. Var dag har nog av sin egen plåga.

マタイによる福音書 6 章 34 節：だから、明日のことまで思い悩むな。明日のことは明日自らが思い悩む。その日の苦労は、その日だけで十分である。

²⁹ evad : 'vadhelst', 'vad än' .

³⁰ Allt (...) Faders händer : Se Psalm 31:6.

Psalt 31:6.: Psalm 31: För körledaren. En psalm av David.: 31:6: Jag överlämnar mig i dina händer. Du befriar mig, Herre, du sanne Gud.

詩編 31 章 6 節：まことの神、主よ、御手にわたしの靈をゆだねます。わたしを贖ってください。

³¹ Själv (...) nära : Se Matt. 28:20.

Matt. 28:20.: och lär dem att hålla alla de bud jag har gett er. Och jag är med er alla dagar till tidens slut.

マタイによる福音書 28 章 20 節：あなたがたに命じておいてことをすべて守るように教えなさい。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。

³² Kraft och Råd : Jfr Jes. 9:6.

Jes. 9:6.: Ty ett barn har fötts, en son är oss given. Väldet är lagt på hans axlar, och detta är hans namn: Allvis härskare, Gudomlig hjälte,

Morgondagens omsorg får jag spara,³³
Om än oviss syns min vandrings stig.
»Som din dag, så skall din kraft ock
vara³⁴«,
Detta löfte gav han mig.

3. Hjälp mig då att vila tryggt och stilla
Blott vid dina löften, Herre kär,
Och ej trones³⁵ dyra tröst förspilla,
Som i ordet mig förvarad är.
Hjälp mig, Herre, att vad helst mig
händer,
Taga av din trogna fadershand
Blott en dag, ett ögonblick i sänder,
Tills jag nått det goda land³⁶.

Evig fader, Fredsfurste.

イザヤ書 9 章 5 節：ひとりのみどりごがわたしたちのために生まれた。ひとりの男の子がわたしたちに与えられた。権威が彼の肩にある。その名は、「驚くべき指導者、力ある神、永遠の父、平和の君」と唱えられる。

³³ Mogrondagens (...) spara : Jfr Matt. 6:34.

³⁴ »Som din dag (...) vara³⁴« : Jfr 5 Mos. 33:25.

Som Lövgren (1964) påpekat har Sandell här utgått från formuleringen i den engelska bibelöversättningen : »Thy shoes shall be iron and brass ; and as thy days so shall thy strength be.«

5 Mos. 33:25.: Dina reglar skall vara av järn och brons, må din kraft bestå i alla dina dagar.

申命記 33 章 25 節：あなたのかんぬきは鉄と青銅。あなたの力はとこしえに続く。

³⁵ trones : 'trons'.

³⁶ det goda land : Jfr 5 Mos. 3:25.

5 Mos. 3:25.: Låt mig gå över Jordan till andra sidan och se det rika landet där, dessa härliga berg, och Libanon.

申命記 3 章 25 節：どうか、わたしにも渡って行かせ、ヨルダン川の向こうの良い土地、美しい山、またレバノン山を見せてください。

〈直訳〉

1. ただ一日、瞬きひとつの間にも
いかなる慈しみ、なおも思われん
父のみ手にこそすべては安らぐ
幼子のごとく思い煩えようか
父のみ心たる主は
生まれ来る一日に
歓び、苦しみ、困難、
そして恵みを与えたもう

2. とこしえにみ神はわが身とともにある
特別の赦しとともに、特別の時すべてにおいて
この世の煩い、主は耐えん
力ある神、世を統べる君の御名のもとに
明日への煩いはわが身を留まらせ
わが歩みは僥げに思えたり
「汝の力とこしえに続かん」
主はわれに誓いたり

3. 安らぎと憩いをわれに与えたまえ
主よ、ただみちかいのままに
宝座(みくら)のとうとき慈しみ失くしたもうな
みことばにまもられしごとくに
主よ、いかなる時にもわれに慰めを与えたまえ
父のみ手のうちより取り出したまいて
ただ一日、瞬きひとつの間にも
約束の地へ至るときまで

〈訳詞〉

ただひとひ、つかのまに
慰めこそあれば
父のみ手に安らぎ
恐ることとはなし
主のみ心イエスは
新しき日ごとに
歓びと苦しみを
ともに分かちあいて

いつの日もめぐみもて
主はかたわらにあり
み神のみ名のもとに
憂いを担われん
明日への悩みとどめ
歩みはさまよえる
汝が力も良かれと
誓いをたまいたり

安らぎ与えたまえ
主よみ誓いのまま
宝座(みくら)の慈しみは
みふみに守られん
慰め与えたまえ
父のみ手のなかの
ただひとひ、つかのまに
かの地へ至るまで

第2部

その2

デンマーク編

ワシの飛翔（*Ørneflugt*）

原作：Henrik Pontoppidan

訳：デンマーク語3年 板倉・権田・高畠

これは若いワシのお話。黄色いくちばしを持ったそのワシは、男の子たちに拾われ年をとった牧師の庭に連れてこられた。親切な人々がワシを世話してかわいがり、ついにはそのまま飼うこととした。おとぎ話の「醜いアヒルの子」のようにワシはここで、グワッグワッと鳴くアヒルやコッコと鳴く雌鶏、そしてメーメーと鳴く羊に囲まれて育った。ワシは徐々にこの環境になじみ、縦にも横にも大きくなつた。そう、牧師が言うように文字通り「見事な太鼓腹になった」のである。

豚小屋のそばの古い柵の上がワシの特等席だった。そこに座って太っちょドーデがキッチンからごみを出すのを見張っていた。ドーデを見るとすぐにワシは石畳に飛び降り、残飯でいっぱいの鉢にありつこうと、おどけた袋競争のようによたよたと歩いていった。天空の王子も地上ではこのようにしか動けないのである。

こんなことでもあった。特に嵐の日や雨の吹き荒れる日には、捕らわれた天空の王子の胸に飛翔への憧れ、ぼんやりとした郷愁の想いがわきあがってきた。そんな時ワシはくちばしを羽をまとった衣服の下にたたみこんで、半日間じっとしていることもあった。動くことも食べることもせず。そして突然、大気を抱きかかえるかのごとく翼を広げ空中に勇ましく羽ばたいた。しかしそれはいつもつかの間の飛翔に過ぎなかつた。翼は十分なくらい刈り込まれていた。一瞬のぎこちない飛翔の後ワシは地面に落ちた。最初は困惑して小さく横跳びをしたり首を突き出したりしたが、ふと恥ずかしがるかのように暗い小屋の中に隠れていった。

年を取った牧師が病氣になって死んだとき、このようなワシの暮らしは2、3年経っていた。牧師の死によって庭に起こった混乱の中で、人々は次第にこの鳥の王「クラウス」の世話ををするのを忘れていた。彼らは伝統に習ってワシにそう名付けていたのだ。ワシはいつものようにほかの鳥たちの間をよたよたと歩いた。たいていは平穏に、しかしときに不安そうに。というのも、ワシがほかのつまらない鳥に対して自分の生まれつきの優越を主張すると、牧師の娘にいつも叱られるからだ。しかし清々しい南風が春の暖かさを連れてきたある日、こんなことが起こつた。ワシは気づくと大きな納屋の背の上にいた。どうやって登ったのか自分でも分からぬまま。

ワシは以前にもしていたように自分の柵の上で悲しげに夢見心地でいた。そしていいようのない自由への憧れに突き動かされ、飛翔へと翼を大きく広げた。しかしいつものようになに石畳に落ちる代わりに、ワシはとてもびっくりして急いで足場を見つけなければならないほどの速さで大空へと舞い上がつた。

そして、そのワシは高い屋根の背で、何が起つたのか分からず、呆然としていた。今まで一度もこんな高いところから世界を眺めたことはなかつた。熱心にあっちこっち頭を傾けて、それからワシは青い空そして流れる雲に大変魅了されて再び翼を広げて飛んでい

った。初めは慎重にそして大胆にしっかりと、その後、歓喜の叫びをあげ、弧を描いて空高く舞い上がった。その時、ワシは自分がまさにワシであると感じた。

村や森そして輝く湖もワシの下を滑っていった。ワシは高く高く澄み切った空を昇っていった。広い地平線と翼の強さに酔いしれながら。

しかし、突然ワシは止まった。自分の周りにある空虚で大きな空間をワシは不安に感じた。そして、休憩場所を求めてあたりを見回した。

幸運にも、ワシは渓谷の見下ろせる突き出た場所に辿り着いた。しかし、ここからなお目眩を起こしながら、牧師の庭や納屋の高い背を探すにつれてワシは新たな狼狽にとらえられた。全く見知らぬ土地に対して、ワシの眼差しはあらゆる方向を移ろっていた。目の届く限り、知っている場所も隠れ場もなかった。

ワシの頭上には山々がそびえていた。風をしのぐ場所もない絶壁が現れた。そして西の方では血のように赤色に染まる夕暮れの雲の中に太陽が沈んでいった、それは嵐と暗い夜を警告していた。

取り残されたという不安が王の血を引くワシの胸によぎった。夜の霧が谷を覆っていた。すっかり落胆して、人間の住むあたたかい家々のある巣へとカーカーと鳴きながら帰っていくカラスの群れを見つめた。くちばしを胸の下にしまいこみ、羽をしっかりと折りたたんで、ワシはたった一人で人気のない静かな山にとまっていた。

すると突然、ワシの頭上で風がヒューッと吹いた。一羽の白い胸をしたメスワシが燃えるような夕暮れの空を旋回していた。

しばらくワシは首を突き伸ばして、この見慣れない光景を見つめ、考えた。しかし、突然あらゆる迷いが消えた。翼を大きく羽ばたかせ、ワシは空中に舞い上がり、次の瞬間、彼女の上を飛んでいた。

野生の狩りが始まった。メスワシは尚も前を進み高く飛び、クラウスは緊張気味にゆっくりと息切れしながら付いていった。

彼らはまもなく高い山の間に着いた。まだ頂上には夕暮れ時の太陽が輝き、一方、彼らはたそがれの霧の中、山の背を前へ前へと飛んでいった。

クラウスの下では暗い木のざわめき、そして山峡で川がぶつかる音が聞こえた。

彼女はとまらないのだろうか？説明しがたい騒音を不安に思いながら、考えた。彼はこれ以上息も續かないし、翼が弱ってきて重たいと感じていた。

しかし、高く、より高くメスワシは上昇し、赤い山の背を越えてより遠くに飛んでいった。誘惑するように、呼んでいるように。

彼らは果てしなく続く、石で覆われた荒地にやってきた。そこでは、岩がひっくり返ったバベルの塔の残骸のように、互いに無秩序に重なり合っていた。彼らの前に、突然景色が広がった。漂う雲よりも高く、夢の景色のように永遠雪を頂いた、超自然の王国が空高く浮かんでいた。命あるものによって穢されず、ただワシと壮大な静けさが存在する王国。最後日の光が、白い雪の上でまどろんでいるようだった。そしてその背後には、静かな星で満ちた、紺青色の空があった。

心配げに、クラウスは自分の飛翔をやめ、石にとまった。寒さと不安に震え、彼はその白い死の国を、輝く星々をみつめていた。それらは邪悪な猫の目のように、暗い中彼に向かってきらめいていた。

再び彼の思考は切なくも、彼が見捨てた故郷へ戻っていった。彼は思い出した、柵の上の居心地のよい居場所のことを。楽しいあひる小屋のことを。そこでは今頃、彼の小さい友達が、列になって翼に頭をうずめてすやすやと眠っていることだろう。彼は思い出した。小さい丸々太った豚のことを。彼らはお母さんの所に群れて、口におっぱいをくわえながら寝ていることだろう。そして太ったドーデのことも。彼女は、教会の時計が太陽の昇るのを知らせる時、蒸気をあげたハチを持って、キッチンから出てくることだろう。

冷たく澄んだ大気の上で、メスワシが呼び続けた。しかし、クラウスは静かに翼を伸ばして、自分の来た道へ戻って行った。彼は進んだ、最初はためらって、岩から岩へふらふらと。しかし、すぐに急いで自分の恐れ、不安、切ない憧れにつかれるように。家へ、家へ、家へ。

次の日の朝早く、ようやくワシは牧師の庭に向こう見ずな飛行から帰ってきた。しばらくワシは、いとしいふるさとの家の上を旋回した。下にある全てのものが、昔のままか確かめるかのように。

そして、ワシはゆっくりと降りていった。

しかし、不幸は起こるべくして起こったのだ。偶然ワシを見つけ、まだクラウスがいなくなつたのを聞いていなかった農夫は急いで銃を走って取りに行った。彼はそのワシを鶏泥棒だと思っていたのだ。ワシが近くに降りてきたらすぐさま撃ち落そうと、農夫は木の後ろに潜んでいた。

バーン。

羽が宙に舞った。まるで石のように、死んだクラウスは肥溜めの中に落ちていった。

たとえワシの卵からかえったものでも、あひる小屋で育ったらどうにもならないのだ。

あとがき 田邊ゼミ論集第14号に寄せて

校正老人 久保田勝己

田邊ゼミ論集は、田邊文学ゼミで学んだ2年間の成果の一部であるデンマーク詩の翻訳紹介と解釈について報告する手作りのゼミ誌としてスタートした。

2002年度版の第4号までの表紙にはANALYSER AF MODERNE LYRIKのタイトルが記されているが、2000年2月に発行された1999年度版の創刊号には、5人の学生による10詩人・11篇の詩の翻訳と解釈が掲載されている。

第3~6号には、デンマーク詩に加えて、冊子の最後部から前へ頁を捲るかたちで日本の詩の紹介と解釈が掲載されている。

第5号(2003年度版)からは、詩のみならず、ゼミで読んだテクストの批評や考察をまとめた文章も掲載されるようになり、表紙のタイトルがANALYSER OG FORSTÅELSER AF DANSKE LYRIK(第7・8号ではDANSK KORTPROSA)に変わるとともにLasefrugter i Tanabe Seminarというサブタイトルが追記された。

第9号(2007年度版)からは、田邊ゼミがスウェーデン文学をも包摂することとなったのに伴って、タイトルを表紙・裏表紙にそれぞれの言語で記すとともに、分析と理解の対象をNORDISK LITTERATURと広げ、スウェーデン語科の学生の成果も併載されて質量とともに一段と充実したゼミ誌となって今日に至っている。

この間、冊子の体裁としても、一時的に第2~4号の版型がA4型からB5型に縮小されることがあったほか、表裏二つの表紙絵の質に年々の向上が見られ、記事の構成・印刷や製本にも格段の進歩があった。

こうして本日、この第14号(2012年度版)が発行されることになったのだが、見ての通り北欧詩の翻訳・紹介・解釈という原点はいささかも揺らいでいない。それどころか、この内容の豪華さはどうだろう。この2年間、ゼミからも論集からも遠ざかっていた私は目を見張るばかりである。久しぶりに参加させてもらったゼミは、私が2002年度から10年間経験してきたそれとは一変していた。先生の作られるガイドラインに、全員が熱心に従うだけでなく、臆せず疑問を提出し、活発に意見を述べ、率直に討論して倦むところがなかった。その熱意と才覚は、4年生に関して言えば卒論執筆にも歴然としていた。

そして今回、論集原稿の校正に携わって、田邊文学ゼミナリステンの素晴らしい改めて感じ入ったのである。北欧の詩に対する真摯な取り組み、鋭い分析力と若い感性の十全発揮、仲間の意見を聴き入れる柔軟、どこまでも真理を追究しようとする熱意、これらの美点は、北欧語や詩や文学の問題を越えて、今後の人生における諸問題に処するための大いな資力となるであろう、と思ったことである。

10詩人11篇の詩でスタートした論集は、13年を経て今や通算70詩人160篇を擁する詩の宝庫へと成長した。そこには、詩に対する一貫して変わらぬ田邊先生の強い思いと学生たちの並々ならぬ努力が息づいている。この稀有の詩アンソロジーを誇りにしよう。そして、ますます充実させて行くことを誓おう。

院生 奥村佳子

大学院2年目の今年、微力ながらもサポート役として第1期はデンマーク語とスウェーデン語の4年生の授業に、第2期はデンマーク語の3、4年生の授業に参加させて頂きました。今年は卒論執筆者が過去最大の13人となったため、田辺先生の提案で従来の授業形態を変更し、第1期でゼミの時間を使って進捗発表、軌道修正を行う形になりました。田辺先生や4年生にとって非常に効率の良い方法であったのはもちろんですが、4年生が互いの論文テーマや研究方法を共有し、意見を出し合えた事も大変良かったと感じています。

第2期は3、4年生といえども実際には3学年にまたがる学部生が集まり、第1期とは異なり新鮮な雰囲気でした。Naja Marie Aidt や Bent Haller の短編のテクスト分析では、私が修士論文で扱う Bent Haller の *Grænsebørn* も採り上げて頂きました。一人で分析をしていると固定的な考えになりがちですが、皆さんと作品解釈について議論できしたこと、興味深い意見を頂けたことがいい刺激になりました。

今年度のゼミ論集に、本来ならば私も院生として執筆するべきでした。しかし修士論文の執筆が思うように渉らず、ゼミ論集に参加することができない結果となってしまいました。申し訳ございません。この2年間、未熟な私を終始あたたかくご指導くださった田辺先生と久保田さんには頭が上がりません。大学院に入学する前は、孤独で地味な学生生活が待っていると思っていました。しかし、院ゼミは先生方のご指導のもと真剣に取り組みながらも、非常に和気藹々とした雰囲気でした。そして文学ゼミで学部生の皆さんと一緒に勉強する時間、時には一緒に食事をする時間が持てたことで、予想していたよりも楽しい院生生活を送ることができました。院生とはいえ文学研究に関する力は微々たるものでしかなく、皆さんのサポート役としてはあまり貢献できていなかったかもしれません。せめてこの論集を編集し、仕上げることで少しでも文学ゼミのお役に立てればと思います。

文学ゼミに所属して早5年になりました。5年間でそれぞれカラーの違う学年が集まり、ゼミの運営方法や授業内容も田辺先生の工夫と共に変化してきました。しかし、一つのテクストに学生が様々な意見をぶつけ合い、議論をする姿が途絶えたことはありません。文学の世界に浸る時間、他愛も無いことで談笑する時間など、有意義で穏やかな時間を文学ゼミの全員が持てたと思います。文学の素晴らしさや難しさ、そしてゼミを通じて社会に出る人間としての基本を、私達学生に熱心にご指導くださった田辺先生と久保田さんに、学生を代表してここに心から感謝申し上げます。



ANALYS OCH FÖRSTÅELSE AV NORDISK LITTERATUR

—“Læsefrugter” i Tanabes Seminarium, 2012—